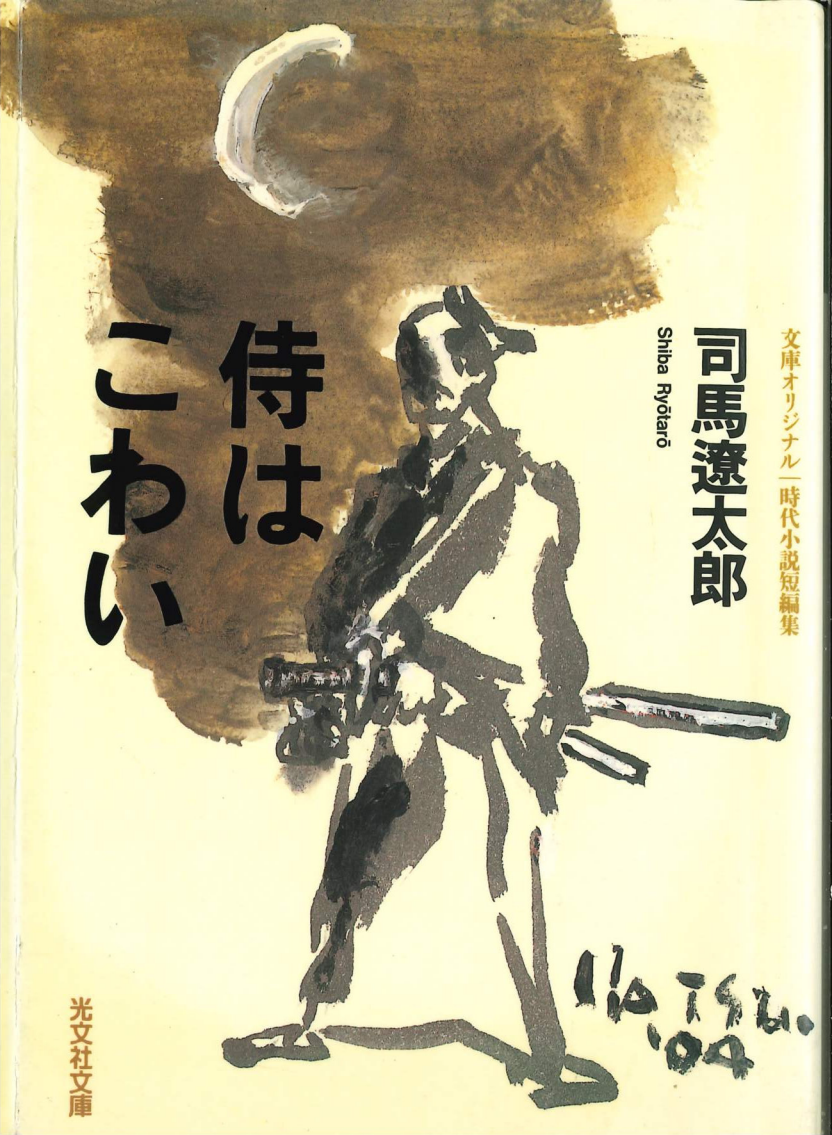
文庫オリジナル一時代小説短編集

侍はこわい

司馬遼太郎
Shiba Ryōtarō



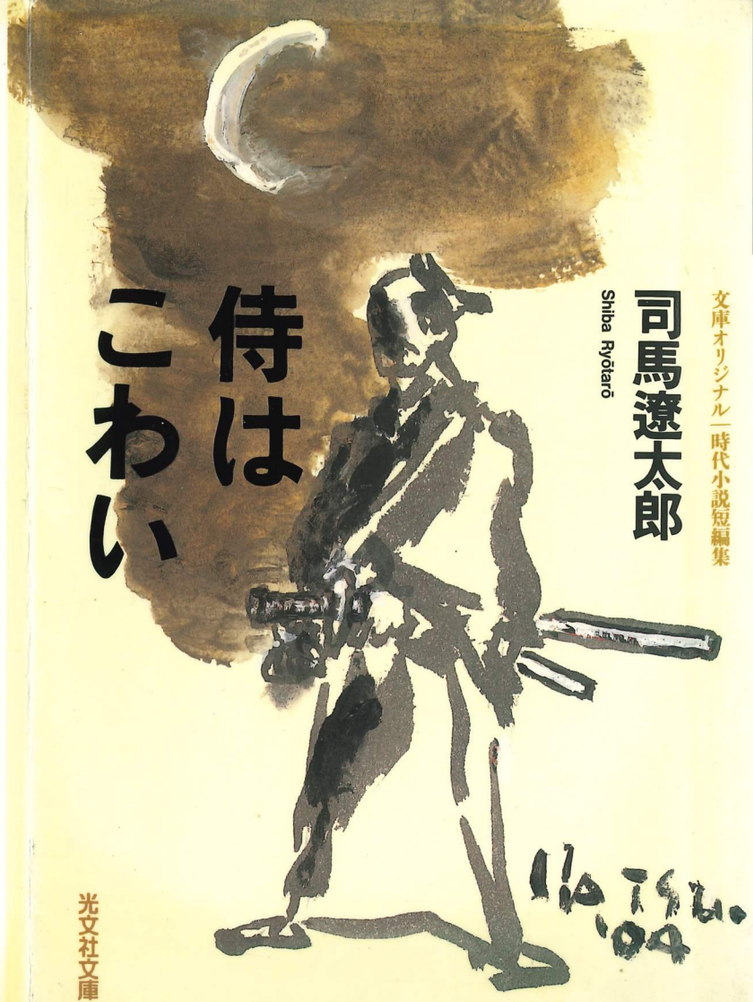
光文社文庫

司馬遼太郎　しば・りょうたろう

1923年大阪市生まれ。大阪外国語学校蒙古語部卒。「ペルシャの幻術師」で講談倶楽部賞、『梟の城』で直木賞を受賞。『竜馬がゆく』『国盗り物語』『坂の上の雲』『空海の風景』『翔ぶが如く』など構想の雄大さ、自在で明晰な視座による作品を多数発表。この他『街道をゆく』『風雲抄』『この国のかたち』などの紀行、エッセイも多数。'96年逝去。

写真提供＝講談社

カバーデザイン――間村俊一
カバーイラスト――吉田カツ
カバー印刷――近代美術



し 26-2

司馬遼太郎

侍はこわい

文庫オリジナル一時代小説短編集

司馬遼太郎

Shiba Ryōtarō

光文社文庫

光文社時代小説文庫

¥533

9784334738099

1920193005332

ISBN978-4-334-73809-9

C0193 ¥533E

定価（本体533円＋税）

侍はこわい※**司馬遼太郎**

壮大、そして人間を活写した史劇で読者を魅了し続けている司馬遼太郎は、小説の醍醐味を感じさせる短編や中編の傑作も発表している。本書の主役は男たちだが、各編に登場する女たちには、不思議な存在感がある。

「女性というものの、時代を超えた偉大さが淡い色調でたくみに描かれている」（「解説」より）。

すべて単行本未収録のオリジナル短編集！

司馬遼太郎の作品

城をとる話
侍はこわい

光文社文庫

文庫オリジナル／時代小説短編集

侍はこわい

司馬遼太郎

光　文　社

侍はこわい

時代小説短編集

司馬遼太郎

光文社文庫

光文社文庫

文庫オリジナル／時代小説短編集

侍はこわい

司馬遼太郎

光　文　社

侍はこわい　◎目次◎

権平五千石　7
豪傑と小壺　35
狐　斬り　69
忍者四貫目（しかんめ）の死　111
みょうが斎の武術　135
庄兵衛稲荷　179
侍はこわい　223
ただいま十六歳　253
解説　三好（みよし）徹（とおる）　285

権平五千石

一

長浜という町が、びわ湖の東岸にある。

天正のはじめ、それまで織田家の一将校にすぎなかった秀吉が、はじめて大名になり、この湖畔に居城をきずくことをゆるされた。高は十九万余であった。

にわか大名であるために、家来が要る。

地元の近江をはじめ、秀吉の出身地の尾張などから、郷士、浪人、百姓の子、などが風をのぞんでやってきて、仕官を乞うた。親の筋目のいい者はいきなり石取りの将校として召しかかえられ、人品のあやしい者は足軽にされた。年が二十に達していなくて多少の縁故のある者は、

「台所で飯でも食いやい」

という待遇になった。秀吉の親衛隊将校の見習とでもいうべき待遇で、当座は知行取りではないが、将来合戦があったときにその才腕勇気を試めされ、それしだいで将来どのようにでも出世できる、という待遇である。こういう仲間に、のちに大名になった者が多い。

加藤清正、石田三成、加藤嘉明、福島正則。……

尾張の津島という在所から出てきた平野権平という若者もそうである。

「素姓は？」

ときかれたとき、

「父は尾張津島の在で浪人をしておりまするが、かつて津島の奴原に田を領しておりました平野入道万休と申しまする」

と、郷里を出るときさんざん教えこまれたとおりの口上を申しのべた。真赤なうそではないが、多少のうそはある。入道万休は父ではなくて遠縁にあたる。しかし国を出るときに当の入道様に了解も得ており、その程度のうそはたれでもつくことだから、たいしたことにはならない。

とにかく、権平は秀吉の出身地の尾張者である。それだけでも有利だった。

「台所で飯でも食いやい」

ということになった。

はじめて台所でめしを食ったとき、その仲間の乱暴さと汚なさにおどろいた。

しかしむこうのほうこそ、権平の垢光りしたような不潔さに驚いたらしい。権平はぼろのような麻布に古綿をずっしり入れたものに木綿帯を巻きつけ、半袴をはいていた。

「薄ぎたないやつだ」

と、みな声もかけてくれなかった。

やがて権平は、みなの素姓を知るようになった。もっともめぐまれているのは、於虎、於市とよばれている二少年だった。どちらも途方もない乱暴者だったが、みななんとなく遠慮をしてかれらを立てていた。

（いやなやつだ）

と、権平はおもった。

於虎は、加藤虎之助清正である。かれは秀吉と同国どころか、同村の尾張中村の出で、亡父は鍛冶屋だったという。母親が、たまたま秀吉の生母といとこになるというので、いまではいわば御大将の御一門というわけだった。

於市は、福島市松正則である。尾張清洲の桶大工のせがれで、これまた秀吉の亡父弥右衛門と、市松の養父新左衛門が、異父同母の兄弟になるところから、御大将のいとこにあたる。御一門といっていい。

もっともこのふたりは、それを笠に着て威をふるっているわけではない。もともとのうまれつきが派手ごのみなうえに、背骨が弾機でできあがっているほどに活気があり、みなを代表してさまざまな世話もする。みなに立てられているのは、いわばそういう質にうま

れついているのであろう。

権平は、逆だった。

眼鼻だちがしょぼしょぼして、声もちいさい。無口である。どちらかといえば職人肌の男で、細工ごとがすきだった。自分の刀は自分で砥ぐし、衣服の繕いも自分でするし、袴ぐらいは半日で仕立ててしまう。みなが輪になって酒をのんでいても、権平だけはだまっている。つい、無視された。

それでも、友達はできた。

孫六という男である。父は三河うまれだが一向宗に凝って尾張に流れてきたとき、孫六がうまれた。加藤孫六嘉明という。

孫六は親切な男だった。権平が無視されているのを見かねて、

「権平、おまえは陰気でいけない。唄の一つぐらい覚えて唄ったほうがよかろう」

と、手にとって唄を教えた。

孫六は、唄のうまい男だった。この孫六もごく平凡な、どれほどの器量があろうともおもえぬ男だが、唄のうまさと如才なさで、仲間の者から、於虎、於市に次ぐ位置として立てられていた。

孫六は、手にとって城下のはやりの唄の一つを教えてくれた。

新領主秀吉を礼讃した唄である。

秀吉様の御陣立て、
いさみ進める若武者の
紫あやの母衣かけて、テンテコテン
おん大将の御装束、
金糸赤地の鎧召し、
鎧召し
銀のかぶとの赤紐しめさせ、
朝日かがやき、海山も、
……

というもので、歌詞は際限もなくつづく。今日は犬上郡栗栖村の雨乞い踊のうたとしてのこっている。

が、権平には覚えられなかった。どう唄っても節がつかず、ずるずると水洟を上下させているような唄にしかならない。

「おれは今様や音曲はきらいだ」

と、やめてしまった。

孫六のほうは、社交家だった。於虎、於市のあとについて、どこへあそびにゆくのでも一緒にゆく。

（ああいう所が、あいつのいやなところだ）

と、権平はひそかに思っていた。

孫六は、忠告好きらしい。

あるとき、権平に「家来をもて」とすすめた。なるほど考えてみると、いっぱしの若衆どもは、みな御扶持も貰わぬのに、一人か二人の小者を従えている。

「容儀のよいものだ」

と、孫六はいった。「それに身のまわりをさせるのに便利だし、いざいくさとなれば、二人三人がかりでやるから働きもちがってくる。ぜひ、召しかかえろ」といった。

「呉れてやる扶持がない」

と、権平はいった。

「御扶持のないのはみなも同様だ。そこは何とか、御米蔵番人と渡りをつけて、日に五合なり一升なりの米をかすめて小者を召しかかえている」

「それも面倒だな」

権平は、身のまわりは自分でやった。走りつかいなどは、孫六の小者に頼んだ。「猿、

猿」と孫六が呼んでこき使っている小者で、そのへんの農村からひろってきた子供である。

あるとき、猿は権平があまりに用を言いつけるので、

「わしはお前様の家来ではござりませぬ」

と、怒ってしまった。権平は用を言いつけても、物の一つも呉れてやらない。だから猿は、他の若衆の小者たちに、権平の悪口を言いまわっていた。「屁のようなおひとだ」と言っているようであった。「くさいばかりで田のこやしにもならぬ」という意味であろう。

そのうち権平の実弟で、長左衛門というのが、郷里をとびだして兄を頼ってきた。権平はやむなくそれを家来にした。

「権平はいじましい男だ。わが身の内を小者にしてこき使うか。あれでは、他日立身したとき、その弟をどう処遇するのだ」

と、於市の福島正則などが悪口をいっているということを権平は耳にした。

「弟を小者にして、なにがわるい」

と、権平は、相手が於市であるかのように孫六に食ってかかった。

「外聞がわるいだけだ」

と、孫六はいった。

「外聞など、どうでもよい」

「そうはいくまい」

孫六は、年若なくせに、ひねこびた智恵をもっていた。

「権平、おれはな、於市の悪口に賛成だ。弟などは知行取りになってからよびよせろ。小者などといういやしい身にさせておくと、将来、おまえが一国一城のあるじになったとき殿様の弟君はむかし小者をなされていた、と家中や領民がいうぞ。於市はそこをいっているのだ」

「於市は、一国一城のあるじになる気か」

と、権平は鼻であざわらい、「おれは大きなことをいう男はきらいだ」といった。

「権平、ここにいるたれもが、未来は一城のあるじだと思っているぞ。おまえは、そうは思っておらぬか」

「思っている」

権平にも、立身出世慾はある。

(筋の通らぬ男だ)

と、孫六はおもった。変人なら変人で、頭の髪のさきから足の爪のさきまで変人で一本通っておればそれなりにみごとなのだが、この男のあわれさは人並みな娑婆っ気があることだ、と孫六はおもった。

「しかし孫六」

権平は、まだ言っていた。「男の見せ場はいくさ場だぞ。おまえや於市のいっていることはおれにはわからん」

二

やがてみな、中国征伐に出た。

家中の者はこの若衆たちを「荒小姓」とよぶようになった。しかし荒小姓たちは、つねに秀吉の床几まわりに侍らされて後方にいたためにさほど、はたらきを見せる場所もなかった。

ところが秀吉は、その「上様」である信長から播磨一国を賜わったために、荒小姓たちも、百石から五十石までの基準でそれぞれ知行を頂戴した。

一人前の将校になったのである。みなそれぞれの縁者や郷村から若者をさがし出し、それに安具足をあたえて家来をそろえた。

権平もその点は、人なみにした。弟の長左衛門にはこのうちから二十石を分けてやった。ごく、穏当なことである。

その直後といっていい。

京の本能寺で、信長が、その部将明智光秀に殺された。軍を中国路から旋回し、山陽道、西国街道をかけのぼり、山城の平野に出、その山崎付近で光秀の軍と遭遇し、奮戦してこれを破った。

この戦場で、戦勝の直後、秀吉が駕籠を山崎山麓の街道にすすめ、前線を視察してまわったことがある。権平らも駕籠わきについて進んだ。

前線の道路わきに、秀吉の将中川瀬兵衛が腰をおろし、カブトをぬいで汗をぬぐっていた。瀬兵衛は摂津茨木の城主で、織田家では秀吉と同僚の部将である。たまたま光秀の乱があったために秀吉の傘下に属し、これを討った。秀吉はこの瀬兵衛の休息しているわきを通るとき、引戸をあけて首を出し、

「瀬兵衛、苦労」

と笑いながら声をかけ、引戸をしめて通りすぎた。瀬兵衛はあきれ、

「筑前（秀吉）め、もう天下をとった気でいやがる」

と、声高に言い、つばを吐いた。その声を権平は駕籠わきできいた。

（なるほど、殿様が天下をとるのか）

と、おどろいた。播州から無我夢中でこの戦場までかけつけたのだが、そのあいだに秀吉の運命が大きくかわっていた。秀吉の運命がかわれば、直属の家来である権平らの運命も大きくかわるであろう。

明智討伐後、秀吉は、織田家の天下を相続するためにすさまじく活躍した。秀吉の軍団は、西と東に駈けた。

秀吉にとって最大の敵は、織田家の筆頭大名である柴田勝家であった。

勝家は越前北庄に居城し、故信長から北陸経営をまかせられ、その実力は、与力の諸大名の所領をあわせると百七十八万石をもち、兵四万四千を擁している。

時に、北国は雪である。

このため勝家は中央への進出が遅れ、かろうじてその前線部隊はびわ湖北岸の山岳地帯にまで進出し、そこで布陣している。

秀吉もこの山々に対抗陣地をきずき、持久戦の態勢をとりつつ、自分は後方の伊勢、美濃方面の敵に対して作戦指揮をしていた。

すでに柴田方は勝家自身が越前を発し、この湖北の陣地に入っていたが、全線に対して、

「仕掛けるな」

と、命じていた。秀吉も自軍にそう命じている。仕掛けたほうが負け、ということは、だれの目からみてもわかる均衡状態だった。

天正十一年四月二十日昼、たまたま美濃大垣城にあった秀吉に対し、急報がとどいた。

「敵が動いた」

という。敵の先鋒大将佐久間盛政が、主将勝家の禁をやぶり、砦を出て秀吉方の砦を襲撃した。このため、秀吉方の最前線の砦をまもっていた中川瀬兵衛の守備陣は潰滅し、瀬兵衛は死んだ。

「瀬兵衛、死んだか」

秀吉は、もう城門へ駈けだしていた。瀬兵衛への哀傷があったわけではない。敵から仕掛けたことをよろこんだのである。「わが大勝、うたがいなし」と叫びつつ、馬にとびのり、湖北にむかって駈け出した。

そのはやさに麾下の者はろうばいしつつ秀吉のあとを追った。

美濃大垣から、湖北賤ヶ岳山麓の木ノ本までざっと七十キロある。秀吉は午後二時に大垣城をとびだし、夜の九時には木ノ本に入っていた。

秀吉とともに駈けて木ノ本の陣地にとびこめた者は、わずか十騎であった。

平野権平は必死に駈けたが、なにぶん年来の貧乏で貧弱な馬しかもっていない。伊吹山の山麓をかけているときにすでに前脚を折って、口から泡を出した。

その横を、加藤孫六や加藤虎之助、福島市松らが流星のように駈けすぎてゆく。

（ちえっ、おれは馬がわるい）

と、馬をいたわって起こし、その息にあわせてそろそろ歩ませ、ときどき駈け、ようやくのことで遅参ながらも、木ノ本に入った。着くと、荒小姓たちはみな着陣していて、秀吉の左右にいた。

「遅かったな、権平」

と、福島市松が大声でいった。権平はひっそりとその列のなかに入った。

（於市め、いらざることを言う）

権平は、根にもった。もともと権平はめだたぬ男なのだ。市松さえ大声でいわなければ秀吉は、権平がいるかいないか、気づきもしなかったろう。

それでも権平は、他の者からみればおっそろしく早かった。大垣にいた秀吉の直属部隊一万五千が、ことごとく木ノ本に到着したのはそれから二時間後である。

秀吉の意外に早い着陣を知って敵はろうばいし、戦略的退却をはじめた。その機を秀吉はとらえ、部隊を繰りだして追尾し、やがて敵も踏みとどまって応戦し、激闘になった。夜間戦闘であった。

明けて五時。全軍、一睡もしていない。七時、秀吉は台上に床几をすすめ、敵情をみた。

なんと、敵の主力が動揺している。

「いまだ」

と思ったが、手もとに予備隊がなかった。

やむなく近侍の戦士団をかえり見、

「そのほうどもがゆけ。敵を崩せ。働きはこの台上から見ているぞ」

とわめいた。

みないっせいに駈けだした。於虎、於市、孫六、権平、みな徒歩で駈けた。

権平は敵中に駈け入るや、すさまじい働きをした。夢中で槍をふるい、敵の槍をはねあげ、かいくぐり、突き伏せ、突き伏せるごとに家来に首をとらせ、後方へ走らせた。

権平は、疲労と緊張でときどき眼先がまっ暗になったが、とにかく体を動かし、槍に触れる者は突き伏せ、手足に触れる者は組み伏せた。これを弟の長左衛門が機敏に立ちまわって協けた。

秀吉は台上から見て、手をたたき、大声をあげ、かれらを激励した。

荒小姓たちは、いずれも華麗な武者ごしらえをし、それぞれ好み好みの指物をひるがえしていた。福島は紙の切裂撓の指物、加藤孫六は背に紫の母衣を背負い、加藤虎之助は朱で蛇の目を描いた白羽織に紙の四手バレン、片桐助作且元は銀の切裂エツル、糟屋助

右衛門は金の角取紙のエツルを背負っていたが、権平はなにも背負っていない。具足の上に粗末な紙子羽織をはおったままで働いている。

「あの指物なしの者はたれぞ」

と、秀吉は左右にきいた。ひどく貧乏くさい姿が気になったのである。

「平野権平でござりまする」

「そうか」

秀吉はちょっと拍子ぬけしたようにうなずいた。

この荒小姓どもの果敢な突撃で敵は一時に崩れ、いわゆる賤ヶ岳の戦勝の因を作った。

その夜、秀吉は、荒小姓七人の名を指折ってかぞえ、

「あの七本槍の者をよべ」

といったので、この者たちは「賤ヶ岳の七本槍」とよばれるようになった。むろん、平野権平も入っている。

即夜、お墨付がくだされ、権平はなんと一躍三千石になった。孫六も三千石、ほかみな三千石、ただ一人の例外は、福島市松の五千石である。これには加藤虎之助が激怒し、軍奉行の杉原伯耆のもとに駈けこんで、

「市松めと、わが武功とはどれだけの違いがあるぞ。御ゆかりを申すなら、市松も御血つ

づき、われも御血つづき、であるのに、なぜ市松が五千石で、わしが三千石か」

と、どなった。秀吉は隣座敷できいていたが、苦笑し、

「於虎めは惣じてうつけ者だ。だまっておってもそこは心得ておるのに」

と言い、虎之助をよび入れ、「石高の訂正はならぬが」といって、主計頭の称を許し、とくに鉄砲五百挺、与力の侍二十騎をあずける、ということで福島市松とのつりあいをとった。

が、権平らはそのままである。

やがて秀吉の天下が平定した。

権平は、五千石になった。

三

権平は、大坂城下で屋敷をもち、妻をめとった。妻はおあいと言い、越中野々市で一万石を食む土方河内守雄久の娘である。

子がうまれた。

つぎつぎにうまれた。そういう家系らしく弟の長左衛門長重も子が多い。ついでながら長左衛門はすでに秀吉の直臣になり、二千石を食んでいる。その下の弟の右京長治も長兄のつながりで秀吉に召し出され、千石の旗本になっていた。

おあいは無口な女で、子を生むことに専念しているようであった。しかし十三年たち実家の土方が加増されて二万二千石になったという話をきいたとき、ふと、

「あなた様は、ご立身なされませぬな」

と、おもいだしたようにいった。

(それもそうだな)

権平は、はじめてそのことに気づいた、といえばうそになるが、由来、そういうことは考えぬようにしていたため、妻からいわれてあらためておどろいた。

賤ヶ岳の七本槍のときの同僚は、ことごとく大名になっている。加藤清正は肥後熊本の城主で二十五万石、福島正則は尾張清洲の城主で二十四万石、あの孫六の加藤嘉明が伊予で十万石、脇坂安治が淡路洲本で三万石、片桐且元が一万石、糟屋直雄が一万二千石、みないまを時めいている。

「どういうわけでございましょう」

と、おあいはふしぎそうにいったが、権平にわかるはずがない。

なにしろ権平は、槍の権平といわれるほどの武辺者で、戦場ばたらきがかれらより劣る、

という理由はなりたたない。また、過失があったということも皆無であった。むしろ過失といえば、加藤清正や福島正則はその矯激な性格のために過失だらけであった。

（いや、むしろ過失がなさすぎるせいかな。思いあわせてみると、あのときの七人の仲間は過失のない律義者の順で石高が小さい）

とおもった。なにはともあれ、武功よりもむしろ、秀吉は、権平には侍を統御する器量に欠けるため大名にしなかったのであろう。それならばなんとなく権平にはわかるし、それはそれでよい、とも思っていた。人は応分に生きるべきだと権平は思っている。

「むかし、孫六という友人がいてな」

と、権平はおおいにわかるように話を嚙みくだいてやった。

「おまえ派手でない、それは損じゃ、せめて唄の一つもうたうべし、と賢しらに申しおった。つまり、そういうことかな」

「その孫六といわれる方は、いま何をしておられます」

「加藤左馬助嘉明よ」

えっ、とおおいは驚いた。咳きこむように、

「加藤様ほどのお方がむかしのお友達なら、いちど、なぜあなた様だけお知行がすくないのか、たずねてごらんあそばせば？」

「なるほど、な」

権平はそうすることにしたが、じかに会うのも気重だし、あらかじめ、用むきを書きしたためて、使いにもってやらせた。

加藤嘉明はそれを読み、なんとなく気にかかっていたことなので、秀吉にとくに拝謁を乞い、むかしの友人のために弁じようとした。

秀吉も、意外な顔をした。わすれていた、という驚きである。

「なるほど、権平はまだ五千石であったか」

とつぶやき、なぜ自分は権平を大名にしなかったかについて理由を考えようとしているふぜいであった。しかし、ややあって、

「理由はないなあ」

と、音をあげるようにいった。まったく理由がない。そのくせ、とくに気の毒だという気もおこらないのである。

「つまり、権平はそういうやつだ」

と、秀吉は笑いだした。なにか、権平に加増してやるのが惜しいような気がするのである。加増してやっても、あの顔つきなら物よろこびもすまいと思うとくたくたと心が萎えるし、それに加増しなくてもあの男なら怒りはすまいと思うと、つい無視する気になり、

歳月がすぎてしまった。

「そういうことよ」

秀吉は不得要領なことを言い、加藤嘉明も不得要領にうなずいて、退出した。

数日して、加藤嘉明の屋敷に、権平がぶらりとやってきた。

嘉明は、このむかしの友人の神経をいたわるために、応対は大げさな大名式をやめ、権平をすぐ邸内の茶室に通した。

茶をのむわけではない。

たがいに手酌で酒をのむのである。ふたりともごろりと寝ころがり、肘枕をついて語りはじめた。

「孫六、お前も変わらんなあ」

権平はうれしそうにいった。

嘉明は、苦笑した。こちらは大名になってすっかり変わったのだが、今日だけは近侍を遠ざけ、二人だけの時間と空間を、むりをして作りあげたのである。

（そういうこちらの心づかいのわからぬ男だから、こいつは出世をしないのだ）

と、嘉明はおもった。

「そういえば孫六。おぬしがまだ若衆のころ猿、猿とよんで使っていた小者がいたな。あ

れは達者か」

「達者だ」

「お前も大名に出世したにつき、猿にも多少はめぐんでやっただろう。百石取りにでもなっておるか」

「いますこし上だ」

「五百石か」

「いや」

嘉明はくびをふった。権平はいらだってきて、すわり直し、

「千石か」と、つばをのんだ。

「いや、家老になっている。六千石だ」

と嘉明は言いにくそうにいったとき、あんのじょう、権平の顔が蒼ざめた。猿が、自分より高禄ではないか、と思うと、とたんにひどく厭世的になり、（ばかげている。自分はなんのために生きてきたのだ）と思い、そうおもうと、床柱の竹筒に活けられている紅梅までが灰色にみえた。もう、この座にこれ以上すわっている気がしなくなり、

「孫六、おれは用を思いついた」

と、ニジリから這いだし、庭をまわり、門に出、馬にも騎らずに歩きだした。

秀吉は、悪いと思ったらしい。晩年、譜代の少数の大名にとくに豊臣の姓をゆるしたが、このとき、旗本ながら特例として権平にも豊臣の姓を用いる名誉をあたえた。が、石高はふやさず、依然として五千石で、そのかわり従五位下遠江守に任官させた。これによって公式の場での権平の呼称は、従五位下豊臣朝臣長泰、ということになる。

が、権平は、

（こんなもので、よろこぶおれか）

とおもったのであろう、自分の呼称はいつも権平だ、として、遠江守などとはあまりつかわなかった。

秀吉が死に、関ヶ原の乱になった。

権平は、たまたま家康について会津の上杉征伐にむかっていたので、物理的に東軍につくようになった。東軍が勝ち、

（はて、こんどこそは）

と期待したが、家康の天下になっても相変わらず五千石だった。家康は、この権平を江戸に住まわせ、旗本寄合席とした。

おなじく東軍について家康に天下をとらせた加藤清正が倍に加増されて肥後一国をもら

い五十四万石、福島正則が安芸と備後で四十九万八千石、孫六の加藤嘉明は二十万石、これはその後会津四十余万石に封ぜられている。

どうみても、世間は権平ひとりを置きざりにして前へ前へと進んでいるようであった。

さらに十五年経ち、大坂の陣がおこった。

家康は、関ヶ原ののち豊臣家を六十万石程度の一大名の位置にしてしまったが、この機に根こそぎにつぶそうと思い、天下の諸侯を部署して大坂攻城にとりかかった。

この直前、江戸にある徳川家の寄合旗本平野権平は、なにを思い立ったかいそぎ駿府にゆき、家康に謁を賜わらんことを申し出、ゆるされた。

なにごとか、と家康がきくと、「御暇を下さりませ。牢人になって大坂に入城し、秀頼様のためにひといくさしとうございます」といった。家康の敵になる、というのである。

家康は啞然とした。

権平には権平なりの理由がある。むかしの同僚の両加藤をはじめ福島などが家康のもとで大大名になり、しかも秀吉の遺児を討伐しようとしている。

（あれが、武士か）

と思うのだ。というより、なが年、かれらの栄達と栄華を、五千石の位置からながめていた権平は、そのじわじわと鬱屈した反感とそねみと悲憤と自己嫌悪を、こんなとっぴょ

うしもない行動でばくはつさせようとしたのであろう。この、若いころから目だつこともなく、およそ映えばえのしない男が、はじめて演出した派手やかな自分というのが、これだった。

家康は、この権平という男の経歴や性格をよく知っている。豊臣家ではおよそ不遇だったこの男に、べつに前時代への愛惜も秀吉の遺児への忠誠心もあるまい。そういう動機から出た申し出でないことは、なんとなくわかるような気がし、

「権平、いくさなど年寄の冷水よ」

と、笑いながらなだめ、たくみに話題をかえて賤ヶ岳のころの昔ばなしをさせ、子供をすかすようにして江戸へ帰してしまった。

権平は三代将軍家光の寛永五年まで生き、七十歳で死んだ。五千石は、長男の権平長勝にぶじ世襲された。

この男が死ぬまでに、加藤嘉明家はその子の代になるや、幕府が待ちかねていたように口実をもうけ、領地没収、同清正、福島正則の家も、同然の目に遭ってつぶれ、もとのもくあみになった。

が、平野家は、つづいた。相変らず五千石のすえおきのままつづき、幕末になって十何代目かの権平が、どういうわけか大和田原本で一万一石に加増され、徳川諸侯のうち、最も小禄の大名になった。

その当時、丹波守長祥という人が、

「家祖権平様は人のまねの出来ぬことをなされた。ご自分は半生五千石のすえおき、子孫も二百年来五千石のすえおき、しかしこのまねのできぬ芸で、平野家は安全につづいた」

といった。

権平はなるほど、奇妙な男らしい。

豪傑と小壺

三国一の豪傑

「稲津さま。なぜ、そのようにご遠慮あそばします。さあ、お膝の前のお盃をおとりくださいませ。佐阿は、こう、御酒器を捧げているだけでは、かいなが懶うございますわ」
「もっとも。もっともであるぞ」
佐阿の横合いから、父親の川路将監が、老いしわがれた戦場声を出して、
「松井家中随一の豪傑といわれたそちではないか。おかしな遠慮はすまいぞ」
「はえ」
将監の組下、稲津忠兵衛は、六尺ちかい体を仔猫のように縮めて、気のぬけたような返事をした。
燭台の灯が、暗い。その影で、今宵の相客である朋輩の等川源吾が坐っているのだが、それがそっと指の先で忠兵衛の尻をつついて、
「遠慮も度を越すと、みぐるしい。さ、早う頂くのじゃ」
「つ、仕る。しかし、手が、手が……」
「ほう。そういえば、手が震えておるな」

御旗奉行の川路将監は、あきれたように、膝の上でぶるぶる震えている忠兵衛の手を見た。

その間も、佐阿は、銀の酒器を持ちながら笑を嚙み殺すために真赤になっていた。音に聞えた稲津忠兵衛という豪傑を見るのは今宵がはじめてであったが、なるほど噂さにたがわず、なんともひどい面相であった。鼻梁がまるでない。眼尻が糸のように細く垂れ、頬骨がこぶのように盛りあがっているあたりは、勝名浜でとれるもっそう蟹にそっくりであった。家中の若侍が、酒に酔うと「忠兵衛寝たか」という謡をうたう。佐阿もその噂さを聞いたことがある。「忠兵衛寝たか、寝れば岩くれ、起きれば蟹殻、立って踏まえば生き仁王」というのだが、いまこう、柄にもなく含辱んでいる図は、蟹が泡を食って、泡をふきながら、自分の入る穴をおろおろ探がしている様子にも似ていた。

「頂かぬか」

源吾が、もう一度たしなめたのをしおに、忠兵衛も意を決したのか、八ツ手葉のように大きい両手で盃を摑んだ。とくとくと酒が注がれる。受けている銀の盃が、がちがちと震えている。そのとき、

「あっ」

将監と佐阿と源吾の三人が、一様に声をのんだ。——忠兵衛の指の間の盃が、よほど緊

張をしたせいか、ぐしゃりと鳥追笠の形に潰れてしまったのである。

（まあ——。大変な馬鹿力）

吹き出すよりも、佐阿はまじまじと忠兵衛の顔を見つめてしまった。忠兵衛は、もう泣かんばかりに辱じ入って、

「い、因果な、生れつきでござる」

と、背を丸めて、塩たれた。

もっとも因果というのは忠兵衛がそう思うだけで、稲津忠兵衛ほどの剛力の者は、ここ豊後杵築の松井領はおろか、全九州を見渡しても、まずあるまいと云われたものである。

忠兵衛は、細川参議忠興の家老松井佐渡守康之の近習役を、十六の年から勤めている。ある冬の晴れた日、杵築城の馬場で佐渡守自らが采配をとって、馬ならしが行われた。佐渡守が伯楽から新たに買い入れた五頭の悍馬を、近習の若侍が交替で調教するのである。

「待てまて。その栗毛は、忠兵衛が攻めて見い」

出番目に引き出されてきた栗毛をみて、佐渡守があごをしゃくった。額に流星のような白毛の入った、見るからに兇暴そうな奴で、琵琶股の筋肉を隆々と波うたせて稲妻のように躍り出てきたが、たちまち手縄持ちの足軽を突きころばして、竿立ちになった。

「ほう、これは逸物じゃな。しかしなんと、癇のつよい」

一同、声をのむ中を、忠兵衛はと見れば、のっそり席を立って馬に近づいた。タテガミを摑んでぐいっと引きよせ、そのまま鐙に足をかけようとしたまではよかったが、元来、忠兵衛は、大剛のわりには馬術が得意ではない。怒って身を震わした馬のために五メートルも向うに投げだされ、そのうえ後脚で肩のあたりをいやというほど蹴られて、どうと尻もちをついた。それでもかまわずに忠兵衛は、馬にとびかかる。乗ったと思うや、馬が嫌って投げ出す。やがて小袖も袴もボロボロになり、全身血と砂と汗にまみれて凄惨な姿になったが、依然として忠兵衛は無表情のまま馬に飛びかかった。

「あははは、これは奇特な余興じゃ、馬乗りでは無うて、忠兵衛と栗毛との大角力が見られるわい」

佐渡守は、大笑いして膝を叩いた。細川家の松井佐渡守康之といえば、元亀天正の戦乱の世を通じて猛将でとおった男である。過ぐる朝鮮ノ役には、釜山上陸以来、巖山、昌原、登来、昌安など大小二十数カ城を攻め落し、敵首を獲ること一万五千、朝鮮人から虎驃将軍と仇名されたほどの合戦上手だ。帰国後、太閤秀吉から直々の面謁をゆるされ、戦闘報告ののち、秀吉が例の人を蕩かすような機嫌で佐渡に言ったのは、

「ようやった。われほどの武辺者を、予は見たことがない。引出物として、豊臣の姓と桐の紋をくれてやろう」

「有難き仕合せでござる」

「思えば、われほどの男が細川ごとき一大名の家老に収まっているのは、天下の為にならぬ。石見半国も呉れてやる」

「それは、お断り申す」

さっさと引き退ってきた男である。家老の身で、主家の細川家の石高を凌ぐのは不遜だというのが佐渡の断りの理由であった。戦さがうまいだけの男ではない。しかし、おのれの立場を考えるだけの智恵の深さも持っているのだが、なぜか今日にかぎって、悍馬と闘っている血まみれの忠兵衛を止めようとはしない。見かねて老臣が佐渡の袖を引き、

「殿。早うお声を掛けなされ。あれでは忠兵衛が一命を落しますぞ」

「案ずるな」

佐渡は笑って、

「あの男が、馬ごときに殺されはせぬわ。――お。見ろ。あれを見ろ」

佐渡守の指がさす所へ、左右の者の眼が一せいに注いだ。そして、一様に青くなった。あまりのことに歯の根が合わぬのか、がたがた慄えている者もある。見れば忠兵衛は、馬には乗っていなかった。もう乗ることを諦めたのだろう。そのかわり、馬の方が忠兵衛に乗っていた。馬の両脚をおのれの両肩に担ぎこみ、馬のあごの下に蟹のようにとぼけた顔

を突き出して、ゆうゆうと馬場を一周しはじめていた。

「あははは、稲津忠兵衛とは、何と、化物であることかい」

佐渡は、うれしそうに笑った。彼が忠兵衛と馬の格闘を止めなかったのは、ひと魂胆があったのだ。おそらく忠兵衛が馬を持てあまして、いずれこうなるであろうというかねて予想の結果を持っていたのだ。

「この話、きっと全九州に拡まる」

佐渡の魂胆というのは、それである。慶長四年、秀吉が死んですぐ、細川忠興は丹後十二万石の旧領に加えて、豊後国速見郡杵築六万石を与えられた。当時、忠興は伏見と大坂の天満に屋敷がある。やむなく新知の六万石は佐渡守に与えて、杵築領の政治をまかせた。ところが九州は名負ての気の荒い土地であったし、新たにやってきた京侍の実力を、土地の百姓でさえ馬鹿にしている。その上、かつてはこの土地を支配していた大友家の残党が職を失って東部の山岳地帯に山塞をかまえて山賊同然の非道を働き、隙あれば百姓を扇動して新しい主人の松井佐渡守の足もとをすくおうとしている。

時も時、秀吉が死んで、天下の風雲が新たに動きだそうとしている頃のことだ。わずか二千騎ほどで九州の一角に駐屯している佐渡守としては、大いに領地の内外に細川軍の軍容の強さを宣伝して、敵にチョッカイを出させる虫を封じておく必要があった。

たまたま、部下に稲津忠兵衛という鬼のような大力男がいた。当時は、たった一人の豪傑の働きのおかげで、一ト合戦の勝利を拾う例は、数かぎりなくある。後藤又兵衛が黒田家を立退いたときに、一万石の高禄で予に仕えぬかという引手が数多あったという時代だから、又兵衛などは小指で殺しかねまじいこの無名の豪傑稲津忠兵衛の宣伝価値は、大いにあった。佐渡は、忠兵衛の噂さをひろめた。果然、

「又兵衛も強かろう。しかし、たかだか五人力じゃ。杵築の稲津忠兵衛の力は五十人ぶんはあるぞ」

「ほう、そんなに強いか、ならば、肥後の加藤家の渡辺瀬兵衛とではどうじゃ。瀬兵衛は馬三頭を引いて戦場に出、乗りかえては、いつも兜首の十や二十はとるというがの」

「あはは、稲津忠兵衛なら、馬などには乗らず、馬を背中に乗せて戦場を駈けずりまわるわ」

というような話が、九州十二道を歩く旅人の口から口へと伝わって行った。

ところが、当の忠兵衛はまだ二十一の若者である。彼の幼少のときに秀吉が天下を平定して合戦のタネが絶えた上、朝鮮ノ役にはまだ弱小で死んだ父親だけが従軍したから、戦場らしい戦場を一度も踏んだことがないのである。本試合に出たことのない二軍選手のようなものだが、それがかえって忠兵衛の剛勇を神秘的なものにもした。

「あいつの初陣が楽しみじゃ」

馬商人が名馬を見てよだれをたらすように、佐渡の口癖になった。そうしたある日、佐渡はふと思いついたように、忠兵衛を呼んで、

「忠兵衛は、まだ独り者であったな」

「はえ」

不得要領に顔をあげて佐渡を見あげる忠兵衛へ、

「よいわ、よいわ。馬に乗るより女に乗るほうがたやすかろう。女房を貰えば、戦場の働きにも、自然欲が出る。いちだんと駈引に味わいが付こう。初陣のことよりも、まず女房を貰え。わしが世話をしてとらそう。旗奉行の川路将監の娘、佐阿はどうじゃな」

「いえっ」

と云ったきり、忠兵衛は声が出なかった。旗奉行川路将監の娘といえば、家中きっての美貌として若侍のあいだに噂さが高い。忠兵衛らのいる城内のお長屋とはほんの眼と鼻の先に屋敷があったから、時々佐阿の姿を垣間みては、がらにもなく胸を焦がしていたのである。

「驚くことはない。忠兵衛はなんと申しても三国一の大剛の士。佐阿には過ぎたる夫じゃ。——したが、こればかりは主君の一声のみにては埒があかぬ。日を決めて、川路にそちを屋敷に招かせ、佐阿にもそちを見せた上、ゆるりと事を決めたほうが無理が無うてよい」

「い、いや……」

「不服かな」

「ど、どう仕りまして。佐阿どのなら、いなやはござりませぬ。し、しかし、この忠兵衛の顔を御覧くだされ。殿、この顔を」

忠兵衛は、夢中になって自分の顔を前につきだし、泣くように振りたてた。

「馬鹿。武士の顔に良悪しがあるか！」

とは云ってみたものの、さすがに佐渡は、突き出された忠兵衛の顔を見て、汚物を嗅がされたような不快な表情をした。もともと松井佐渡は戦さの名人とは云われているものの、少年時代は足利義輝の小姓も勤めたこともある京侍のあがりである。物の美醜に敏感な心根を持っていたとしてもやむをえない。

「ゆ、ゆえに、等……」

「おう、等川源吾か。あれに介添えを頼むというのか。源吾なら、そちとは幼な友達の上に、神酒徳利と云われたほどの仲の良い朋輩じゃ。弁も立つ。才覚も利く。座を都合よう取り持とう」

そう云ったまま、佐渡も鈍重な忠兵衛との応待がさすがにうるさくなったのだろう、自

分から云いだしたくせにさっさと奥へ引っこんでしまった。

あとに残された忠兵衛は、冷たい板敷の上に平伏したまま、小刻みにふるえて、だらしなく涙をこぼしていた。足腰が起たぬのだ。まさか、川路の佐阿ともあろう娘が、この自分の許へ来ようとは夢にも思っていなかった。体の中に突如、数万尾の真紅な金魚が入りこんで、血の中を滅茶苦茶に泳ぎはじめたような錯覚に落ちた。

そのままの姿と精神状態で、稲津忠兵衛は、冒頭の見合の当日、等川源吾に付添われて川路家の畳の上に坐っていたのである。あわてて、というより、佐阿に嫌われまいとする恐怖のあまり、明の鋳工の刻印の入った大事な銀の盃を摑みつぶしたのも無理はない。

――さて、

「困るのう――」

川路将監は、武士のくせに、茶道具や酒器などを集めては自慢をするのが好きな男だったから、露骨にいやな顔をしたものである。

「も、申しわけ、ござりませぬ。お、おゆるし……何とぞ、お許しなしくだされイ」

云いながら、稲津忠兵衛は、墓の後じさりのようにジリジリと平伏したまま押しさがり、ついには、どしんと後ろの襖に尻をぶっつけた。

「あ、襖が。こんどは襖じゃ！」

将監が、驚いて両手をあげた。襖は、室町の頃の画工、長谷川等伯筆といわれる「猿猴、月ヲ獲ルノ図」だ。が、忠兵衛は、将監の制止もきこえない。脂汗を流したまま、平あやまりに謝りつつ、とうとう、万金の襖をベリベリと圧し潰してしまった。その音に、半狂乱の忠兵衛もやっとわれに還ったのだろう、

「わあっ」

と、死に絶えそうな悲鳴を残して、雲を霞と屋敷から消えてしまった。

あとに、人質のように残ったのは、朋輩の等川源吾である。

「不快じゃ、飲み直そう」

と坐りなおした川路将監の酒の相手を一刻ばかりさせられた間、将監の叱言に対して、主客に代って謝りづめに謝らされた。

「何じゃ、あの化物は。殿の酔狂にもほどがある。大体、力がいくらあっても、よい武士にはなれぬぞ。なれるものなら、手に甲冑を着せても役に立つ。武士の要諦は、智能であるわい。その智能はどこで養われるかと申せば、こういう茶道具などをたしなむ心映えからじゃ」

「まことに、左様で」

源吾は、仕方なしに、将監がくどくどと云う我田引水説に、米つきバッタのように合槌

をうつしか手がなかった。

「当家は他の大名家とは異り、大殿様（細川忠興）といい、佐渡守様といい、京の名家から発している。お両方とも、故太閤殿下でさえ耳を傾けられた茶道の大徳じゃ。その家来たる稲津忠兵衛が、上を見習わぬばかりか、他家へ来て秘蔵の道具をこわすなどとは、不忠のいたりではないか」

「まあまあ。お父上様」

佐阿が見かねたのだろう、横あいから口を出して、

「等川さまがなされた粗忽ではございませぬ。みんなあの、忠兵衛どのと申す豪傑の為した仕業」

「大きに、そうであったな」

もともと主君の佐渡守が口を利いたこの醜男との縁談を心よく思っていなかったのであろう、父娘は顔を見合わせて、どっと笑った。

「ほんに、等川さまこそ、今宵はよい御迷惑でございました。これにお懲りなされずに、度々、あの、お遊びに来てくださりますように」

と頬を染めて、体をくねらせたものだから、源吾のほうこそどぎまぎした。等川源吾は忠兵衛とは異り、小兵ながら京の能役者にでもなれそうな秀麗な容貌の男なのだが、忠兵衛同様弱輩だけに、女の媚態にはまだ初心い。

石垣原の合戦

「そうか。縁を遁しおったか」

松井佐渡守が、その後数日を経て等川源吾から一分始終を聴いたのは、明日は豊後灘の見える石垣原の野で大友義統を迎え討とうという出陣の夜であった。

城内の大広間に床几を据えさせ、その上に腰をおろしながら、小姓たちに鎧の着付けを手伝わせていた佐渡守は、

「ひょっとすると――」

と、独りごとを云って、首をかしげた。

「あの忠兵衛という男は、案外、勝負の運に弱い男かもしれぬな」

鬼佐渡といわれたこの男ほどに戦さの場数を踏んでくると、人間生活のすべての現象が、運ひとつに見えてくるものらしい。いくら強くても、戦場の大混乱の中にまぎれて名ある敵に出合わねば、なんの武功にもならず、禄高も加増してもらえない。ばかりか、名もない雑兵の放った流れ弾に当って、あえなく死ぬこともあるし、その死骸のそばへ折よく

通りかかった敵の雑兵が鎧通しで首を掻いて、運よく士分にとりたててもらえることもあったわけだ。生涯を戦場で暮してきた佐渡は、人間の運不運に対して鋭敏な嗅覚をもつようになっていたし、また運のない武士はいくら優れていても、所詮使いものにならぬことを知っていた。

「それで何か。忠兵衛は、将監の道具をひっ潰したまま、逃げてしもうたと云うのか」

「いや」

源吾は、おかしそうに手を振って、

「ただで逃げたのではござりませぬ。あとでわかったことでございますが、将監どのの玄関のわきに高さ二寸ばかりの小壺が、忘れたように置き転がしてございました」

「ほう。何のまじないであろう」

「いやなに。あの男は、あれだけの大兵のくせに、妙に胃が弱く、閑さえあれば老人のようにセンブリを服んでおりまするが、壺というのはそのセンブリ粉を入れたものでござります」

「汚らしい物じゃな」

「それでも心根は可愛らしうございます。忠兵衛の奴にすればつねづね将監どのが茶道具の茶わんなどを愛玩なされておるのを思いだし、たったいま潰した明の銀器と襖の身代りにもと、逃げがけの駄賃に置いたものでございましょう」

「センブリ壺を、のう」

佐渡守は、出陣の前夜という緊張した時間も忘れて、この野放図な話に腹をかかえて笑ってしまった。笑い終ってから、この稲津忠兵衛という途方もない不器用者に、しみじみとした愛情を抱きはじめていたのである。

翌朝、松井佐渡守康之は、二千の麾下をひきいて、石垣原に押し出した。千切れ雲がたった二つ、青い豊後灘の沖合に浮んでいるだけの絶好の合戦日和であった。慶長五年九月のことである。この頃、美濃関ケ原では天下の大小名が、西軍の石田三成加担八万、東軍の徳川家康加担七万とそれぞれにわかれて、新しい支配者を決めるための凄絶な死闘を展開しようとしていた。東軍のうち早くから家康に通じていた細川家では、当主の忠興だけが主力部隊を率いて関ケ原に参加し、忠興の夫人ガラシアは大坂屋敷で西軍の兵に囲まれて自刃、忠興の父ですでに隠居中の幽斎は丹波の居城で籠城、のこる家老の松井佐渡守は、はるか分領の九州の地で、西軍の大友勢を相戦に決戦を交えることになった。いわば、稲津忠兵衛の参加したこの石垣原の戦は、天下分目の関ケ原の地方公演のようなものであった。

その日の忠兵衛のいでたちは、黒革縅の具足に西伯牙風の桃形兜、三間柄の片鎌槍を

小脇にかかえ、黒鹿毛の馬に足が地に届くばかりに乗り据えて、小山がゆるぎ出たかと思うようなものものしさであった。

「おう忠兵衛」

原を見おろす丘陵地帯に陣地をかまえていた松井佐渡は、すこし遅れて到着した小部隊の中に入っていた忠兵衛を見ると、融けるような笑顔をつくって、

「立派じゃ。そうしておると、古の関羽張飛もこうであったかと思うぞ」

馬をとびおりた忠兵衛を、鞍の下まで招びよせて、

「昨夜、きいた。川路の娘に振られたそうじゃな」

「はえ」

「明の銀器をつぶした代償に、センブリ壺を置いてきたと聞いたが、一体、あの壺は、いくらで購うた」

「十、十六文でございましたかな」

「ばかめ。銀器は、金五枚はするぞ。まあよい、女の代りぐらいは、いくらでもある。今日はぞんぶんに手柄をすることじゃ。男の仕合せはそれからやってくる。——そうじゃ、今日はわしの馬廻りに居ても、一番槍、一番首の手柄はたてられまい。この合戦にかぎって先手組に入れて仕そう。よいな」

「はえ」

「うれしいであろう」

「はえ」

「精のない男じゃな」

佐渡も、シンからじれったくなり、早うあっちへ消えてうせろというように、牛を追うような手付をした。

午前八時になると、野にかげろうが立ちはじめ、原をはさんで、大友軍は北、松井軍は南と、それぞれ長大な横隊をつくった。敵陣をにらんでいるだれの眼も充血している。欲が戦士たちの血を掻きたてているのだ。首を一つ獲るごとに十石はふえる。女房に晴れ着の一つも買ってやれるし、自分には妾の一人も囲えるかもしれぬ。しかも、今日の戦いは天下分目の戦いであるという。

「もはやこれで戦いの種は無うなるぞ。手柄を失えば子々孫々までの貧乏ぐらしじゃ」

そういう、自分の運を賭けた緊張感がだれの眼にもギラギラと光っている。

「忠兵衛」

「はえ」

「この鞍の下に来い」

佐渡は、またぞろ忠兵衛をからかいたくなったのか、それとも開戦前の将士に無用の緊張をほぐしておきたかったのか、

「みんな、忠兵衛のふぐりを見い。ふぐり占いをしてみよう。ダラリと垂れておれば今日の合戦は吉、縮みあがっておれば凶じゃ。さあ、忠兵衛、ふぐりを出すのじゃ。一同に見せい」

忠兵衛は具足の草摺を上げて、袴を押し下げ、うっそりと黙ったまま、股間の物を衆人の前に曝した。その長大なふぐりは、小憎らしいほど悠然とし、垂れのびていた。それを一人の老武者が、これはこれは、とおどけた表情でのぞきこんで、

「なるほど、大吉に相違ない。見事なほどに垂れのびておるわ。それにしても、殿、このふぐりは、あわれ、まだ女子の味を知らぬげに見えまするな」

佐渡の方をむいて、爆けるように笑った。ゆらい、男のふぐりというのは、心の恐怖を敏感に表現するものらしい。戦いの前にはどんな豪傑でもふぐりの縮みあがるものであったが、松井佐渡守がおどろいたのは、この忠兵衛という男には、恐怖の本能がまるでなかった。

戦いが、はじまった。

はるか境川の東岸の野に陣を布いている大友勢の旗指物がにわかに動きはじめ、同時に、巨獣のすすり泣くような法螺貝の音がきこえた。

それを合図に一せいに、敵味方五千の武者が、原の中央に向って駈けだした。両軍の間の草の原がみるみるちぢまってゆく。

いかなる勇者でも、人間であるかぎりは死への恐怖がある。敵味方の引きつった顔が見える間合にまで接近すると、足が鉛をはいたように重くなった。だれの歯の根も、ガチガチと慄えている。恐怖という、両軍の間の空気の壁を、武者たちは、あえぎながら肩で苦しそうに押してゆく。

「えいおう、えいおう」

間断なく、かれらは武者声をあげるのは、敵をおどすより、自分の恐怖を散らそうがためだ。

そのとき、一騎だけが、ツイと松井勢の中から駈けだした。よほどの勇気が要るものだ。二千人の恐怖の壁を、たった一人で突き破るのである。あとは、その男が破った空気の裂け目へ、大勢が雪崩をうって飛びこんでゆけばよい。遭遇戦の勝機は、ただそれだけで生れる。一番駈けの価値はそこにある。

「忠兵衛、やりおったわ！」

松井佐渡守は、駈けながら、えびらを打って叫んだ。彼の眼鏡に狂いはなかった。

「それ、稲津忠兵衛を討たすな！」

叫ぶ佐渡の視野のはるかむこうを、芭蕉葉の旗指物をつけた黒具足の忠兵衛が、つんのめるように駈けてゆく。ところが、大友勢の右翼に同行していた鉄砲組がそのとき一せいに折敷いて、勢いづいた松井勢の側面から猛烈な射撃をあびせた。

「あっ」

誰もが、小さく叫んだ。忠兵衛の馬に弾が当ったのだろう、忠兵衛がころげ落ちた。そのあとすぐノッソリ起きあがるのが見えた。兜を手で払いのけて一さんに駈けてゆく。やがて、草のむこうに見えなくなった。

あとは地響きをたてた武者の格闘だった。小半刻もつづくと、そのあたりを駈けまわっているのは、松井勢の武者ばかりになった。佐渡守は、一隊に敗兵の追撃をさせ、全員を松の疎らな丘陵に集結させて、戦功の調査にかかった。ふと気づくと、忠兵衛がいなかった。

「あの者は、どうした」

左右を顧て、云った。

「あるいは、弾に当って討死いたしたのかも知れませぬな。いかに豪傑でも、鉄砲にはかないますまいでな」

誰かが云った。佐渡の、忠兵衛への偏愛ぶりを心よく思っていない空気が、家中のだれにもあった。佐渡は、等川源吾をよんで、

「源吾。そちは朋輩じゃ。死体など、さがしてやれい」

「かしこまって候」

源吾は、腰につけた血だらけの首を二つ、草の上にほうり出して出かけた。

夕方になっても、忠兵衛は見つからなかった。源吾は、足軽組の者五十人ばかりを借りうけて、死体の一つ一つを点検した。日も暮れようという頃おいになってから、一人の足軽が叫んだ。

「おう、稲津さまは、こんな所にござらっしゃるわい」

草に覆われた空の野井戸の中である。源吾が走り寄ってのぞいてみると、稲津家伝来の桃形兜のてっぺんが光ってみえた。源吾は、ふっと皮肉な笑いをうかべて、

「引き揚げてやれ」

と、あごでしゃくった。足軽たちに抱きあげられて出てきた忠兵衛は、ぐったりと気絶していた。兜がごぼりと凹んでいる所からみて、落馬したあと、大友軍得意の十匁目の鉄砲玉にうたれて気絶をしたまま野井戸に落ちこんだものであろうと思われた。足軽たちに水を掛けられて、やっと息を吹きかえした忠兵衛は、自分の置かれている事情に気づく

と、ゆで蟹のように真赤になり、大口を開いたかと思うと、虎のような声を出して号泣した。

「六十余州に、わしほどの不運なさむらいがあろうか」

みんな、忠兵衛がこれほどなまなましい感情を露わにしたのは始めて見たものだから、なんともいえむず痒い感動に襲われて、それぞれ可笑しさに尻をつねりながら、苦しげな顔をした。報告を等川源吾から聴いた松井佐渡守は、不快な表情をうかべた。

(忠兵衛はやはり、運の憑かぬ男であったのかな)

佐渡守は、戦いの勝負師である。なま半可な豪傑よりも、運に恵まれた部下をよろこぶ。この男の永い戦場経験からきた哲学では、運不運は天の意思で、有能だが運がつかぬというタイプの男に重要な仕事をさせると、思わぬ不幸が全軍に及ぶことがある。佐渡が不快な表情をしたのは、それを思ったからだ。もっとも、忠兵衛への愛情そのものを捨てたのではない証拠に、ただひとこと、等川源吾へ、云った。

「捨てておくと、忠兵衛は恥じて腹を切る。構えて死ぬなと申しておけ」

——まだまだ合戦の機会がある、とは云わなかったのは、佐渡守はすでに、戦闘員としての稲津忠兵衛を捨て去っていたのであろう。

運はいたずらもの

「忠兵衛、居るか」

暗い稲津忠兵衛の長屋に入ってきたのは、等川源吾である。

源吾はすでに忠兵衛と棟続きの長屋に住んでいない。身分も、いまは朋輩ではない。石垣原での二つの首のおかげで馬廻役百五十石になり、外堀のそばに屋敷も与えられて、歴とした上士になっている。

「まだ寝ているのか。体をわるくするぞ」

石垣原以来、忠兵衛は呆けたようになって、毎日、雨戸をたてきったまま、病と云いたてて外出もしなくなっていた。

落胆ではなく、世間の、あれほどの期待と、主人の愛情に対して恥じていた。無口な男が、一そう無口になって、暗い部屋の中で、ただひたすらに再び合戦の行われる日をのみ念じていた。その日まで、死骸のように過ごすことだけが、この男の生きる唯一の才覚だった。

「申し聞かせに来た。このたび、わしは川路の佐阿どのを娶ることにした。その方に異存

はあるまいな」

源吾の言葉に、忠兵衛の青い頬が一瞬赤味がさしたが、やがて負け犬のように眼を伏せて、こっくりとうなずいた。

「それで安堵した」

事実ホッとしたらしい源吾は、ほかに話題のないまま、彼等の大殿細川忠興の壺狩について、べらべら喋りだした。

壺狩というのは、当時諸大名の間で流行していたもので、最初は、忠興の茶道の議論敵金森出雲守可重が、所領の飛騨国ではじめたのがこの流行のモトになった。

いうなれば、名物さがしだ。今日、値をつければ五千万円はするだろうという西本願寺の寺宝一文字茶碗も、もとをただせば朝鮮人の飯盛茶碗であった。こんにちの国宝、重要美術品といわれている茶碗や茶入（小壺）のほとんどは、中国、朝鮮の日常の雑器の日本に流れ込んできたもので、紹鷗や利休、織部などといった権威ある鑑定人が「これは非常な逸物でござる」と折紙をつけさえすれば、雑器は一躍「名物」になる。名物になれば、名もない朝鮮茶碗が、城一つにでも替えがたいほどの大層な値段をよぶ。利休は、その鑑定にからんで不明朗な操作をしたために、秀吉に嫌われて切腹を命じられたという説があるほどだ。ところが、朝鮮や中国の飯盛茶碗や壺がそうザラには日本に流れてこない。日本の田舎陶工が作って、田舎の百姓家で使っているガラクタの中で、ひょっとすれば佳いものがありそうではないか、と眼をつけたのが金森出雲守可重である。可重は、領国飛騨の百姓家の台所などを根こそぎに探がさせて、ついに、茶入にはもってこいの小壺をみつけ、鑑定家の古田織部にみせて名物になり、万金をもってしても購いがたいほどの値うちをつけた。茶道好きの細川忠興が、これを見て黙っているはずがない。

源吾が云った。

「丹後でも、大規模な壺狩がはじまっているそうだ。分領であるこの豊後でも、丹念に探せと、佐渡守様まで御指図が来ているという。壺一つを黄金の値いに直しても、小城を攻めとるより大きな手柄になる」

「ああ、朝から飯を食うのを忘れていた。ひどう腹が減ったわい」

忠兵衛は、源吾の話などには何の興味もなさそうだった。ノッソリと台所へ立つと、板の間でごとごとと飯櫃のふたをとる音をたてはじめた。しばらく飯を嚙む音が聞えていたが、やがて紙障子のむこうの源吾に、ボソリと云った。

「わしが川路どのの家に置いてきた小壺じゃがな。あれはどうにもならぬかな」

「壺？　ああ〳〵、おぬしが十六文で買うたあの汚いセンブリ壺のことか」

「そうじゃ」

「あれは小便壺にもなるまい」

源吾はあきれて帰ってしまった。

それから、一年たった。大坂城には、まだ淀君、秀頼の母子はいたが、すでに一大名の格にまで落ち、家康の天下はいよいよ固くなり、このままでは、当分、合戦の煙がたちそうにない世情であった。合戦がないかぎり、忠兵衛は、死骸の位置からおのれを抜けださせる機会はなかった。

佐渡守は、もう六十二歳になっている。この冬にひいた風邪が春になっても一向にとれず、城中に引き籠って薬餌に親しんでいたが、ある日ふと忠兵衛のことを思い出して、

「将監をよべ」

と云った。一年ばかり前、等川源吾が伝えた例のセンブリ壺のことだ。病中退屈のおりでもあり、一度見てみようかと思ったのである。枕もとまで伺候した川路将監に、低い声で云った。

「忠兵衛のセンブリ壺は、まだ保存いたしておるか」

「はて。どこぞ物置にでもあるかも知れませぬ。なにぶん、癪の種ゆえ、見ぬことに致しておりまする」

「それほど嫌なら、壺を忠兵衛に返せ。襖と銀器の損料は予が請負うてやろう。壺は、明日、この枕もとに持ってくるように」

もっけの幸いと、将監は大喜びで引きさがり、翌日、壺を届けてきた。佐渡は、壺をひと目みて、ぷっと吹きだした。

「これはひどい」

二寸ばかりの背丈で、黒い釉薬がはじけて壺全体にぶつぶつとこびりついているあたりは、なんと忠兵衛の顔つきにそっくりで、いまにも生きて、もくもくと動きだしそうであった。一たんは畳の上に投げだしてみたが、じっと眺めてみると、なんとなくぶきみな生動があるようである。

「いちがいに捨てがたくはあるな」

念のため江戸屋敷にいる主君の細川忠興に送ってみたところ、それが天下の茶道界を震撼させることになった。

忠興は、鑑定家の古田織部に見せた。もっとも鑑定家といっても、今日のように大学教授や博物館の職員ではなく、歴とした伊勢松阪五万石の大名である。利休門下の十哲の一人といわれ、織部流茶道の流祖にもなっている。家康に属しながら、大坂ノ役のときは西軍に通じたという疑いをうけて、切腹させられた男だ。利休といい、織部といい、無名の雑器に折紙をつけて一躍万金の宝物にするような魔術師の仕事をしていると、ふしぎと後

がよくない。忠興は、織部を招んで、伏見からとりよせた酒を馳走しながら、云った。

「先日の小壺は、いかがなものでござった」

「あ。あの茶入」

織部は、急に座をずらし、襟をかきあわせたのち、荘重な口調で云った。

「あの肩衝（怒り肩をしている壺のよび名）は、古今の名器にまさるとも劣りませぬ。ご秘蔵なされますように」

この一声で、忠兵衛のセンブリ壺は天下の名物になった。

忠興は、さっそく京、大坂、堺まで江戸の道具商を派遣して、壺を包む高価な裂をもとめて、袋をつくらせた。そして、壺の名を「稲津肩衝」とつけた。早速この話をきいて使者を寄越したのは、金森出雲守であった。壺を適当な価格でゆずってくれという。忠興は鼻で笑って、

「黄金一万枚ならのう」

「へっ、一万枚――」

使者は青くなって帰った。黄金一万枚といえば、金森家の飛騨十万石の底をはたいても出そうにない価格である。

しかし、その使者よりも青くなったのは、当の所持者であった。稲津忠兵衛だった。壺

が名物の位を得たという報せが豊後杵築に伝わったのは、正月の二十二日。松井佐渡守康之が六十三歳の生涯を終えたのは、その日の夜に入ってからである。息を引きとる前に稲津忠兵衛を招んで、壺の名誉を伝え、ため息をつくようにして云った。

「わしは朝鮮に攻め入って二十幾つの城を攻め落し、故太閤はそれを嘉して陪臣の身ながら石見半国を授けようとなされた。石見半国といえば、兵の四千は養えよう。しかし黄金一万枚の稲津肩衝ひとつで、兵の六千を一年は養える。悲しいかな、天下抜群といわれたわしの一生の武功も、センブリ壺ひとつに及ばなかったわけじゃ。合戦には運がなかったが、こんどのそちの手柄は、それほどに大きい」

忠兵衛は、いつものように「はえ」とは返事しなかった。平伏したまま、ものいわずにただ涙を畳の上にこすりつけていた。そのまま、うなだれて佐渡の前を退出し、川路将監の屋敷の前までさしかかったとき、ちょうど忠兵衛がここを通るであろうと見込んで待ち構えていた等川源吾が、

「話がある。中へ入ってくれ」むりやりに、舅の屋敷に連れこんだ。座敷には、将監と佐阿が顔をならべていた。将監は、忠兵衛が入ってくるのを見るなり、

「忠兵衛、なにをとぼけた顔をしておる。おのれは騙り者じゃな。稲津肩衝の手柄を独り占めにしようと思うても許さぬ。あれの最初の所有者こそそこもとであったかもしれぬが、

二度目の所有者はこの将監じゃ。それに、センブリ壺のことを殿（佐渡）に申しあげた手柄は婿殿の等川源吾であったぞ。このことしかと忘れまいぞ」

「はえ。ご加増でも為し下されることがあれば、某よりも、殿のお前で川路さまや源吾どのの手柄を云いたて申そう」

力なく答えて、忠兵衛は長屋に帰った。部屋に入ると、忠兵衛はどしんと仰向けざまに倒れ、蟬の臨終の声のように、細く長く身に沁み入るように哭きだした。

「なんと、わしは武運のない男であろうか……」

忠兵衛にすれば、この壺の名誉ほど、おのれにとって悲運な報らせはなかった。あれほど大剛の評判をたてられながら、いざ合戦のときになって銃丸のために気絶をし、しかももはや天下に合戦の種は尽きようとしている。余人ならば知らずその忠兵衛が小壺をもとに手柄をたてたとあっては、人前に出られぬ恥辱の種を蒔いたことになる。なんと運のわるい男であるかと思った。その夜、城中で松井佐渡守が息を引きとった。翌朝、主人の死を聞くと、もはや自殺の禁止は解けたものと解し、忠兵衛も殉死の形をとって腹を切った。

それから、わずか四年を経て、大坂ノ役が起った。死なず生きていれば、佐渡守が期待した忠兵衛の腕が戦場で試せるわけであったし、石垣原の恥辱も十分にそそげるわけであったろう。稲津忠兵衛には、あくまでも武運がなかった。

そのかわり、壺は残った。いつの頃からか、世間の数寄者たちが、忠兵衛の人生を憐れんで、壺に「人生」という異銘をつけた。この壺は徳川時代に入ってから、細川家の家政の不如意を救うために他家に売られ、その後大名家を転々とするうちに値もうなぎのぼりに騰った。安永八年以後雲州侯松平不昧の手に入り、いまなお松平家に秘蔵されて、時価、一千万円という呼び声もある。出世運は、持主の忠兵衛をとびこして、むしろ無心の壺に憑いたわけである。

狐斬り

一

寛永年間、因州鳥取の池田因幡少将の家中に、深尾角馬という刀術の名人がいた。

角馬には、

「牡丹の角馬」

というあだながある。

ぼたんの栽培がすきで、自慢でもあった。春のぼたんの季節になると、毎日けいこは早仕舞いにして、門弟や家中の者に屋敷を開放し、花畑にむしろを敷いて見物させ、茶菓をふるまった、というはなしがのこっている。花を愛するほどだから、おそらくやさしい心根のもちぬしだったにちがいない。

しかし、男ぶりは悪かった。

「牛の角馬」

というあだながあったほどである。家中の評判では、「牛が擦り寄るほどに似たりし」とある。め牛がおすかとおもって集まってくるほどに似ていた、というのである。

このひとは、生涯国詰で、しかも二百石馬廻役の役目もあって他国に出たことがなか

ったから実力のほどはわからないが、主人の少将光仲が江戸城中で柳生但馬守と雑談したとき、

「拙者の家中に深尾角馬という者があり、父理右衛門から伝えた丹石流と化顕流居合術とを加味して一流をひらいて井蛙流と唱えております。兵法では、藩の指南役もおよび申さぬ」

「ほう、井蛙流と申されましたな」

但馬守は目をみはった。

「左様な流名をつけるなどは、太刀筋を見ずとも、よほど極意に悟入したる者のように思えまする。お大事になされ」

なぜこの流名が但馬守を感動させたかは、筆者もわからない。第一、井蛙流の命名の理由もつたわっていないのである。角馬が田舎ごもりの自分を自嘲して「井ノ中ノ蛙」と称したものなのか、あるいは、井戸の中の蛙の奇妙な運動をみて、わが剣に感ずるところがあったのか、よくわからない。

しかし、角馬の底知れぬ妙技については、いくつも咄が残っている。

あるとき、屋敷にあそびにきた旗奉行木村左大夫と世間ばなしをしていたが、やがて左大夫が、

「兵法に呼吸ということをよく申しますが、どういうものでありましょう」

「はて」

深尾角馬は微笑して答えず、たくみにほかの話に変えた。左大夫は気になり、雑談の途中でもう一度おなじことをきいた。角馬は当惑顔で、

「口では答えられませぬ。兵法はしょせん、使うて体でわかるものでござる」

ほどなく、軒さきからスズメがなににおどろいたのか、飛びこんできて、対座しているふたりの真中におりた。

角馬はあわてず、扇子をとりだして半びらきにし、ふわりとスズメをおさえた。スズメは、ねむったように動かなかった。

「さいぜんのおたずね、これでござる。拙者の呼吸にて、スズメの呼吸を制しておりまする。スズメはうごけませぬ」

やがて、

「呼吸をはずしてやりましょう」

スズメは、呪縛を解かれたように扇子をはねかえしてぬけ出し、天へとびたった。

さきに、柳生但馬守が角馬の流名をきいてほめたという話を書いたが、角馬自身はこの将軍家指南役の刀法を、さほどには感心していなかったふしがある。

但馬守には、こんな話がある。

ある日、将軍家光が、南蛮人が貢物にくれたインド猿に撓をもたせ、近習の者にも撓をもたせて、猿を相手に打ちあいをやらせた。ところが猿はひどく敏捷で、シナイを掻いくぐっては縦横に駈けちがい、容易に打たれない。ついに居合わせた近習全員が出て追いまわしたが、猿の体にシナイを触れることもできないばかりか、飛びつかれてひっくりかえる者もある。

おりから伺候した但馬守がこの騒ぎをみてあきれ、

「これは何事でございまする」

「座興じゃ。但馬、ちょうどよい。あの猿を打ってみよ」

あまり気がすすまなかったが、命をこばみがたく、シナイをとった。

但馬はシナイを左手に垂れてしずかに猿に近づき、間合い三間のところまで進んで、じっと猿を見た。

さきほどまで元気にさわいでいた猿は、にわかに恐怖の表情をうかべた。

やがて、おそれのあまりふんをもらし、きゃっと叫ぶと、飛びのいて庭のモミの木のうえにのぼってしまった。

家光はひざを打ち、

「さすがは但馬じゃ」

とほめたというのだが、このはなしが殿中の茶坊主の口を通して諸大名の詰間へひろがり、自然、それぞれの国許まできこえた。

深尾角馬もこのうわさをきいて、

「さすがに、但州様は名人におわす」

しかしながら、とつけくわえた。

「猿のごとき畜類にさえ、討たんとするおのれの意中を覚られて逃がしてしまわれたというのは、但州様のために口惜しいことである。かの殿はまだ無我の境地を悟るところまで立ちいたっておられぬのであろう」

手きびしい評である。

なるほど深尾角馬が、スズメに警戒心をうしなわせ、ねむらせたうえでフワリと扇子でおさえてみせた境地とくらべれば、但馬守のほうが一枚はおとることになるかもしれない。

二

「因州の牛殿と手合わせしたい」

といいながら、久世長十郎という諸国遍歴の無法者が備前岡山をへて鳥取城下にやってきたのは、山陰の雪がとけはじめた春のなかごろのことである。

かれは、すぐには仕合を申し入れず、ひとまず家老林又右衛門の屋敷に滞留した。又右衛門とは、間接の縁がある。

久世長十郎は、紙屋伝心斎を流祖とする直心流の使い手で、すでに諸国でその名が高い。そのうえ、旗本寄合席久世丹波守の遠戚の者であるという。

兵法者にはめずらしく名門の出なのである。身分は一介の牢人にすぎないが江戸の久世家の縁者ということで、どこの城下へ行っても優遇されてきたらしい。とくに林又右衛門に対しては、久世丹波守の直筆の添え状をもっていた。

又右衛門は来訪をよろこび、

「わが家同然と心得て、ゆるゆるとご滞在くだされ」

五日ほど滞在するうち、又右衛門はひどくこの若者が気に入ってしまった。主人光仲が帰国しだい、推挙して仕官の労をとろうと思った。その旨を長十郎に告げると、さいわい、かれも鳥取に腰をおちつける気になったらしい。

「しかし、禄に望みがござる」

「承っておこう」

「五百石」

つよい語調でいった。

これには好人物の又右衛門も閉口した。池田家はただの成りあがり大名ではなく元亀天正のむかしから織田、豊臣、徳川の三代の風雲のなかをきりぬけてきた武功の家で、家中の士には譜代重恩の者が多く、そういう家系の士でさえ、五百石取りといえば数がすくない。たかが刀術ができるからといって、高望みすぎると思ったのである。しかし、

「ばかな」

とはいえなかった。相手はただの兵法修業者ではなく、旗本大身の家の縁者なのである。江戸へもどって、藩のいらざる告げ口をいわれるのもつまらない。

「家中にもいろいろと事情がある。禄のことについては、おまかせねがえまいか」

「しかし」

久世長十郎にも、それだけの理由がある。

「それがし、江戸におりましたるときに本家丹波守の口添えにて筑前黒田家に仕官するはなしがあり、そのとき黒田家の内々の意向では、五百石ということでござった。が、それを拙者はことわった」

「ほう」

「縁戚の口添えで仕官するなどは、いかにも口惜しい。なることならば、腕ひとつで身上をつくりたいとおもい、懸命に刀術をみがき、ここ数年は諸国の高名の兵法者と仕合をして、一度も敗れをとったことがござらぬ。かくてわが身も五百石相当のことはあろうと思い、貴殿をたよって参ったわけでござる。もし五百石に一石でも欠ければ、江戸の一族の者に長十郎の腕はそこまでのことか、とさげすまれるのは無念でござる」

「左様か」

又右衛門は、ここでことわればよかったのである。しかし、老人はこの高慢な青年に、ふしぎな魅力を感じてしまっていた。

色が白く、血色がいい。容貌はさすがに三河以来の名族の血をひくだけあって高雅であり、心に物おじする所がない。

(これは、男じゃな)

又右衛門は、一藩の国政をあずかるとはいえ、しょせんは田舎そだちの老人だから、こういう押し出しの若者に惚れやすくできている。

「それには、よい考えがござる」

久世長十郎は、逆に又右衛門老人に知恵までさずけた。

「ご家中随一の使い手といわれる深尾角馬どのとの仕合をつかまつりましょう。深尾どのに勝つほどの長十郎、ということになれば、上への御推挙もたやすく参るのではございませぬか」

長十郎はむろん勝つときめている。

「もっともじゃ」

又右衛門は、家中の角馬の刀法などは軽く評価していた。世間せまい田舎の通弊で、自家の花よりも他人の花のほうが赤くみえるものらしい。

(しかし、あの牛めは、応ずるであろうか)

又右衛門は、それをおもうとにがい顔になった。

深尾角馬は、門弟に対して他流との仕合をかたく禁じ、自分も藩の指南役の丹石流篠弥兵衛と稽古仕合をしたことさえない、ということを又右衛門は知っているのである。

しかも角馬は兵法をもって藩公に仕えているのではなく、代々の役目は国詰の馬廻役であり、門弟をとりたててはいるが、教授料もとっていないのである。つまり、それで世に立っている専門家ではないから、たとえ仕合の申し入れをことわったところで、なんの恥にもならなかった。

「こまったな」

「おこまりになることはございませぬ。そこを取りなされるのが国老のお力でござる」

又右衛門は、機会をみて、わざわざ酒肴を用意し、屋敷に深尾角馬をよんだ。

（来たな）

角馬はおもった。すでに直心流の久世長十郎が家老屋敷に滞在して家中の有志や、又右衛門の家来を相手にさかんに稽古をつけているというわさは耳に入っていたし、いずれこうなるだろうとは覚悟していた。

席につくと、林又右衛門は、久世長十郎を紹介した。角馬は過度なほどに謹直な男である。一介の牢人に丁重なあいさつをしたのだが、長十郎は、ただ、

「お相伴つかまつる」

と微笑し、みじかく頭をさげただけであった。

（なるほど、格がちがう）

又右衛門はおもわず声を出してつぶやこうとしたほど、あざやかな対照だった。

しかし、長十郎も、内心おどろいていた。

（因州の牛というわさはきいていたがこれはまるで牛同然の男じゃな）

牛といっても、深尾角馬は、肥大漢ではなく、たけは人並より小さかった。痩せぎすで皮膚が黒い。顔だけが牛のように大きかったから、長十郎の目には異様というよりこっけいだった。

あるじの林又右衛門は、ふたりの座を如才なく周旋して、

「兵法ばなしをききたい」

と水をむけた。

「ほこるほどの兵法ではござらぬ」

長十郎はほどほどに謙遜しながらも、名古屋の城下で無外流の道場をひらく山辺流斎という者と仕合をして一太刀で勝ったはなしや、西国のさる城下での仕合で遺恨をうけ、追ってきた門弟二人を斬ったはなしなどをした。

角馬はだまっていた。面白くないのかとおもえばそうでもないらしく、杯をうまそうにすすっては肴をたべている。

「すこし、何か申したらどうか」

と又右衛門がいうと、

「拙者の兵法のはなしなど、おもしろうはござりませぬ」

「ところで」

又右衛門は座をくつろがせるために、おんなばなしをした。

「ちかごろ、よい奉公人を得たそうじゃな」

めかけのことである。角馬は顔を赤くした。

「なかなか美形じゃという評判をきく」
「よう仕えてくれまする」
やっとそれだけいった。この男がこれだけ当惑するのは、よほどその女を愛しているものとおもわれた。
角馬は、早く妻に死にわかれてから、ながいあいだやもめぐらしをしていた。はなしに出た小里という女は、角馬が懇意にしている庄屋が世話して自分の養女として奉公にあがらせたのである。
小里が深尾屋敷にきてから、角馬がひどく変わったという評判があった。
わるい評判ではない。いままで、稽古中は、門弟にひとことも無駄口をきいたことのない男で、そのために入門する者の数がすくなかったが、小里がきてからはときどき、へたな冗談口もきくようになったのである。
「お師匠さまも、ひとなみになられた」
と、のちに高名な剣客になった高弟の石川よも右衛門、白井源大夫、鈴置四郎兵衛などが、道場の発展のためによろこんだ。若い鈴置などは、
「小里様は、弁財天さまじゃ」
とおどけたという。

もっとも、小里が、
「弁財天」
にあたいするほど、心映えのよい女であるかどうかは、わからない。
小作りな顔だちで、容貌だけは庄屋がすすめただけに人並み以上だったが、心の働らきがにぶく、それに、ひどく衣装好みだった。
この城下にも、春秋二度は、京のあきんどの手代が都ぶりの小袖、帯などをもって旅まわりをしてくる。いつのまにかそういう商人が深尾屋敷をよい得意として出入りするようになっていた。
角馬は、すでに五十を過ぎている。容貌が醜悪なうえに年のひらきがありすぎるために小里にひけ目だったのか、小里の浪費を黙認するばかりでなく、あきんどに、
「こんどくるときは、都ではやりじゃという髪飾りなどをもってきてやれ」
この時代、江戸や諸国の城下町ではまだ遊女でも髪にかざりを用いる者がなかった。角馬のような武骨者がどこできいたのか、都ではかんざしというものを用いる風がおこっていることを知っていた。
せまい城下のことである。
林又右衛門もこのことはウワサで知っている。なにげなくからかってみたつもりだった

が、意外にも角馬は、牛のような大ぶりの顔をあげ、おもおもしく、
「おなごと申すのは、牡丹を丹精するのとおなじでござりまするな。いたわってやればやるほど、色あい、葉のつや、花びらの露のふくみぐあいが佳うなるものでございまする」
角馬にすればかるい冗談口のつもりだろうが、地顔が大真面目で口が荘重なためにこの艶ばなしも冗談にはならず、へたな絵師の極彩色のあぶな絵でもみるようななまなましい実感があって、かえって口火をきった又右衛門が顔をしかめたほどだった。
「さて」
又右衛門が本題に入った。
「こういう酒席で申すのも妙じゃが、これなる久世長十郎どのが、いちど貴様の太刀筋を拝見したいと申している」
太刀筋拝見、というのは他流仕合を申し入れるときの慣用語だった。
「いかがなものであろうか」
角馬はむろんことわった。しかし国老の客に対してニベもないとおもったのか、
「ときどき、道場に遊びに参られよ」
と長十郎にいった。

三

その翌日、長十郎はさっそく、林家の若党を供につれて道場にあらわれた。
角馬は、道場の高弟数人にひきあわせたうえ、白井源大夫と鈴置四郎兵衛に木刀をとらせて、井蛙流の型をみせた。一流を開いた道場で、他流の者にこういうものをみせるのは異例のことといっていい。
当然、長十郎はよろこんだが、ついずに乗って、
「ご当流の極意のなかで、驪竜剣と不識剣というものがあるとうけたまわっています。みせていただけますまいか」
聞いたとき、門弟がいっせいに鼻白んだ。
兵法の極意は徹底した秘密主義なものだ。師匠から皆伝免許をあたえられるとき、「相伝の太刀」は親子兄弟といえどもみせないという誓紙を出すしきたりになっている。このことについては徳川家康でさえ、奥山流の皆伝を奥平休賀斎から受けたとき、熊野誓紙に起請文をしたため「梵天帝釈四天王、別しては摩利支天、熊野三山、惣じては、日本国の大小神祇も照覧あれ」として極意の太刀を洩らさぬことを誓い、もしこのことに

そむけば神罰をこうむってもいい、という意味の文章を奥平休賀斎にわたしているほどである。

だから門弟一同が気色ばんだのも当然なことだし、長十郎の申し出は、非常識を通り越して、ゆるしがたい無礼といってよかった。

若い鈴置四郎兵衛などは度をうしなって立ちあがり、

「それを知りたくば、たったいま木刀をとって立ちむかわれよ」

「のぞむところ」

立ちあがった。

それが長十郎のたくらんだ挑発の手だったのである。角馬はそれと察して、

「ひかえろ、四郎兵衛」

と制し、長十郎に、

「国老からの肝煎りでもあるゆえ、いずれはお見せつかまつらねばなるまいが、きょうのところはお引きとりくだされ」

「これはしたり。武士たる者が、いったん挑まれて起たずに当道場からひきさがったとあれば、それがしの名折れでござる。ぜひ仕合っていただこうではないか」

「左様か」

角馬はしばらく考えていたが、やがて門人にいいつけて、シナイを一本もって来させ、

「ぜひもない。それがし、これにて座興をいたす」

シナイを空中にほうりあげ、やがて垂直に落ちてくるのを、トンとてのひらの上で受けた。シナイは立っている。曲芸のサラまわしのようにユラユラとてのひらで平衡をとりながら、

「久世どの、ほんの座興じゃ、これをお笑いあって、門人の無礼をおゆるしくだされ」

と門人のほうにむきなおり、たれかれなしに打ちかかってみよ、と命じた。

門人は、師の角馬が気でもくるったのかとあきれてながめている。

「早う」

「はっ」

ひとりが進み出た。一礼していきなり上段にかまえ、しばらくそのままためらった。そのスキに角馬はシナイを立てたままスルスルと近づいてきた。

「打たぬか」

スキがない。

気圧されたように門人はジリジリとさがる。角馬は笑いながら、

「どうじゃ、どうじゃ」

と囃すように近づく。道場を半周したころ、たまりかねた門人が、

「やっ」

とふりおろそうとしたとき、それよりもはやく角馬のシナイはふわりと倒れかかって、門人の面を打ってしまった。

「つぎ」

角馬は門弟たちを見渡した。

白井源大夫は面をとられ、石川よも右衛門は小手をとられた。ふたりとも免許の腕なのである。しかも角馬のシナイはただ倒れかかるだけで面を打ち、小手を打った。底知れぬ芸といえたが、久世長十郎は冷笑した。

(なにか、仕掛けがある)

角馬が門弟と肚をあわせたうえでの芸とみたのである。

(なんと卑劣なおとこか)

こういう子供だましで他流の者に自分の強さをみせ、仕合を思いとどまらせようとしているのだ、とおもった。

「いかがでござる」

角馬が不器用な笑顔をむけてきた。

「当道場の門弟はごらんのとおりの未熟で、貴殿と太刀打ちなどは、とうていおよびませぬ」

「愚弄なさるか」

「いやいや、もってのほか。座興でござる」

四

小里は、朝は卯に起きて、よるは戌に寝る。角馬を寝所にむかえるのは、きまって三日おきだった。

角馬はながくやもめぐらしだったために、身のまわりの世話はすべて児小姓にさせ、食事の世話は小者がし、屋敷のとりしきりは内弟子がしていたから、小里には生活というものがなかった。角馬と寝るだけが小里の暮らしだった。

自然、小里にとっては、三日おきに通ってくる角馬は「おとこ」にすぎない。この男が中国屈指の兵法の達人などとはとうてい思えないし、また、家中きっての謹直な男ともおもえなかった。

小里にすれば、閨房での角馬は、

「牛」

ですらなかった。犬に似ていた。小里の足の指のつけ根にたまった垢を愛し、それをなめ、十本とも賞味しつくしたうえで、小里の全身を愛撫した。小里はいつのばあいも体を固くしてそのことに堪えていた。

小里は、邑美郡美和村の庄屋達右衛門の縁戚で、在郷のそだちとはいえしつけのある中農の家のむすめだったから、はじめは、そういう角馬を怖れ嫌悪した。しだいに馴れて、男とはこうしたものかと我慢するようになったが、軽侮する気持にはかわりがない。

そのことを、小里は美和村に宿さがりしたとき、養父の達右衛門に訴えると、養父はのけぞるようにして笑い、

「男とはそうしたものよ。なるほど、わかった。深尾様はなにさまああいうお方ゆえ、日がら一日兵法で明け暮れておられる。しかし弓のつるも張りづめでは用をなさぬ。あれでは人間の心はもつまいとわしは見ていた。そうか、深尾様にはそういう裏があったか。わしは、むしろ安堵したぞ」

「安堵？」

「あの方の兵法は、きっと、なまものではない」

「わかりませぬ」

夏になった。

ある朝、深尾角馬が登城したあと、小里はなすこともなくて、ひとり茶をたてていた。角馬の登城日は三日おきだが、この日は道場は休みになっている。若党も中間も供についていって、屋敷はひっそりとしていた。

そのとき、門の番をしていた小者が、ひとりの若い武士を案内して、庭の厠へゆくのが座敷からみえた。武士が厠へ入ったあと、小里は小者を沓ぬぎ石までよび、

「どなたですか」

「勝手にお屋敷うちに案内して申しわけございませぬ。あのおひと様は痢の気があると申され、通りがかりながらも厠を借用いたしたい、と申されますので、ご案内つかまつりました」

「どなたです」

「ひと月ほどまえ、道場のほうに見えました久世長十郎様でござりまする」

「ああ」

聞いている。

城下のうわさでは、あるじの角馬も久世の兵法におそれをなして仕合を避けているということではないか。小里は、にわかにその若い兵法者に興味をもった。

「よい薬がありまする。こちらへご案内いたしますように」
主人角馬のゆるしなく座敷にあげるわけにもいかないから、ぬれ縁に不意の客のための敷きものを敷き、炉の茶釜をはずして、薬湯を煎じはじめた。
やがて長十郎が、小者に案内されてきた。長身白面で、さすがに名家の血をひくだけに気品があったが、どこかに崩れた影がある。あいさつのあと、じっと小里を見つめた。女をはだかにするような情の粘い視線だった。小里はわけもなく赤くなり、あわてて用意の薬湯をすすめた。
「これは」
長十郎は無造作にとりあげたが、しかしすぐ下へおいた。兵法者の心得というべきもので、みだりに他人の薬を用うべきものではない。小里はそんなことは知らないから、
「いかがなされました」
「これは頂戴しがたい」
「まあ」
小里は怨ずるように唇を小さくひらいた。
「お気に召さぬのでございましょうか。せっかく煎じてさしあげましたのに」
といいながら、不必要なほどに体をまげ、長十郎の眼をのぞきこんだ。長十郎が、その

眼をみて小里に何かの感情をもったとしてもむりはない。まだ二十六歳という血気の年なのである。
「では、土瓶ごと頂戴し、屋敷で服用いたします。土瓶は後日、かえしに参る。いまは、とりあえず渋茶をいっぱい、所望しとうござる」
「おやすいこと」
立ちあがりかけたが、小里はすぐすわった。すわるなり、われにもなく容易ならぬことを口走ってしまった。
「どびんは、かならずかえしてくださいますか。それも、久世様ご自身で持参してきて頂きとうございます」
「これは、きついご下知じゃ。いかにも、それがし手ずからにお持ち申す」
微笑すると、長十郎は、小里の眼には能役者のように美しくおもわれた。それが小里を狼狽させ、
「いつ？」
なぜそんなことをいったのか、自分でもわからない。
「明日にでも」
「明日はいやでございます。三日ののちにお持ちくださりませ」

小里の小さな策謀だった。三日のちというのは角馬の登城日で、屋敷はきょうのようにからになる。

三日のあいだ、小里は気もそぞろになって日を待ちかねた。

当日、約のとおり長十郎は、どびんをふくさの布でつつんで持ってきた。小里はその顔をみるなり、自分でも気づくほどに頬をそめ、声がふるえた。

「持参した」

長十郎は、親しみをみせて、わざと言葉をぞんざいにした。小里は、すねてみたかった。

「好きませぬ」

いそいでつけ足して、

「なぜあの日、この場でおのみくださらなんだのでございましょう。わたくしの煎れたものに、毒が入っているとおもわれたのでございましょうか」

「いやいや、帰宅後、ちゃんと服用してあの薬物のために回復しております。しかしあのときは」

長十郎はちょっと言葉を切り、じっと小里を見た。次に自分が吐くことばの効果を見とどけるためである。

「用心したまでござる。ご当家のあるじは、なかなかに詐略に長じたおひとゆえ、ゆだんはならぬ、と思ったのじゃ。しかし、旅寓にもどってあの薬湯を一服したとき、小里殿の真心がわかり申した。お詫びいたす」

「わたくしの真心が？」

「左様」

小里は、利口な女ではない。まして世間知った女でもない。長十郎のこのひとことが小里を変化させた。夜、角馬に抱かれながら、まぶたのなかで長十郎の影をえがくようになった。

――それから十日ばかり経ったある夜のことである。

小里が寝所で寝支度をととのえていると、廊下を渡ってくる足音がきこえた。角馬らしい。

ところが足音は寝所の前までくると、ぴたりととまった。

「旦那さま？」

「そうじゃ」

「どうなされました」

不審におもって小里が紙障子をあけると、角馬は、自分がもってきた手燭を廊下へ置こうとしている所だった。

「灯が、あぶのうございます。お消しなされませ」
「すこし、所存がある」
角馬は部屋に入ってきて後ろ手で障子を閉め、小里の顔をみた。小里は、はっとした。いつも寝所に入ってくるときのゆるんだ顔ではない。
「そちの心、ちかごろ不審じゃ」
「えっ」
蒼白になった。
「灯を消せ」
「あかりを、でございますか」
「消すがよい」
室内が暗くなると、例の廊下の灯のために障子がぼっと明かるくなった。
「当屋敷には、狐が出る」
「狐が」
「いまに出る。あの障子に狐の影がうつるゆえ、それまでわが膝に伏せておれ」
「お、おそろしうございます」
といってみたが、狐のはなしなどどうせウソだろうと思った。

「こう、来ぬか」
小里を押し倒した。やがていつものように小里の体を愛撫しはじめたから、小里はほっと安堵した。
四半刻（しはんとき）ばかり経った。安堵が小里をいつになく夢中にさせた。愛撫されるままにさきほどの狐の話をわすれ、つい角馬に抱かれながら長十郎の影をえがいた。それが癖になっていた。
「小里」
角馬が、耳のそばでひくくささやいた。
「はい？」
小里は夢から醒めたように眼をひらいた。
「狐が出ている」
あごが、障子をさした。
そこに、ありありと狐のすわっている影が大うつしに出ていた。
「あっ」
小里の声におどろいたのか、影は逃げようとした。
「ここで静かに伏せておれ」

角馬はふわりと立ちあがり、狐の呼吸をとらえて、奇妙な手おどりを踊りはじめた。

（気でもお狂いなされたか）

小里が見るまに、狐の影も、角馬の手のおどるにつれて、ゆらゆらと動きはじめ、やがて角馬が狐を踊らせているのか、狐が角馬を踊らせているのか、さだかとは知れぬ、奇妙な空気が部屋に満ち、小里は狐よりも、むしろ角馬の体をつつんでいる妖気に戦慄した。

そのあいだも、角馬の足は、徐々に狐に近づいている。

小里は、息をのんだ。

（どうなさるのか）

とおもったとき、そのとき、角馬の腰の脇差が目もとまらずに一閃し、障子をざくりと斬り裂いていた。

血が飛び、紙障子が濡れた。

「行ってみよ。狐が死んでいる」

角馬は脇差の血をぬぐい、別のふすまをあけて出ようとした。

「ど、どこへ参られます」

角馬はそれには答えず、

「死骸を始末してやれ。そちの心中に巣食うていた者じゃ」

「わたくしの心の中に？」

小里は立とうとした。しかしひざがふるえて立てなかった。斬られたのは、久世長十郎ではないか。

（まさか）

這うようにして障子に近づき、桟に手をかけた。

ひらいた。

あっと声をのんだのは、そこに狐の死骸もなく、血痕もなく、まして久世長十郎の死体もなかった。なにもなかった。

つめたい廊下の板敷に、角馬が残して行った一穂の手燭の灯が燃えているだけだったのである。

（……？）

小里には、一体なにごとが自分の上におこっているのか、のみこめなかった。

五

角馬はその足で庭へ出、垣根の竹を一本抜き、夜の屋敷町へ出た。雨がふっていた。

闇のなかを、竹杖で足もとをさぐりながら西へ歩き、継福寺の前へ出て、石段をのぼった。

門をたたくと、寺男が出てきた。全身ぬれねずみになって立っている角馬におどろき、

「深尾様ではござりませぬか。この夜ふけにどうなされました」

「尊董（住職の意）にお会いしたい」

「すでに御寝なされております る」

「火急である。お起こし申してほしい」

継福寺は、池田家の菩提寺である。

住持は、楚禅という。藩主の帰依があつかった。

角馬は、この老僧と一度しか口をきいたことがなかった。数年前、殿中の廊下ですれちがったとき、楚禅がよびとめ、

「貴殿が、深尾角馬どのか」

楚禅の眼には、この卓抜した兵法者に対する好奇心がアリアリとみえた。

「棒振りは上達したか」

「棒振りとは」

「怒るでない。わしの眼からみれば棒振りよ」

角馬はだまった。相手の臭味がやりきれなかった。

「一度、寺にも遊びに来られよ」

「そのうち」

と一礼してすれちがった。

禅理を兵法にとり入れることはこのころの流行だった。兵法者には無智で無茶な者が多い。一流をひらくとき、流儀の名や極意の太刀の名を懇意の禅僧につけてもらったりするのである。

が、角馬はそれをきらっていた。この木強な男は、禅坊主特有のてらいが鼻につき、かれらのほとんどはニセモノだと信じている。だから、この継福寺が近所であるのに、山陰随一の禅客として名の高い楚禅を訪ねたことは一度もなかった。

茶室へ案内されると、小半刻（一時間）も待つほどに、役僧が入ってきて炭火を入れ、釜をかけて、出て行った。

それっきり、たれも来なかった。

角馬は、ひとり炭桶から炭をついで待ちつづけたが、二更、三更、四更と夜がふけても、楚禅は来なかった。

（おのれ。――）

しかしこの夜分に訪ねてきたのは、自分の勝手なのだ、とおもいかえした。

（やむをえぬ）

もともと行儀のいい男なのである。脇差の柄の上にかるく身をもたせて、身うごきもせずに正座しつづけていた。

終夜待たされ、夜が白らむころになってから、やっと楚禅が入ってきた。よほど横着な男らしく、よく寝た顔をしている。

着座するなり、角馬の顔を下からなめるような姿勢でのぞきあげ、

「おなごのことじゃな」

（あ）

図星だったのだ。

「うわさはきいていた」

うわさというのは、久世長十郎が角馬の留守をねらってときどき来訪し、小里と通じているということであった。

角馬はそのうわさを城中の茶坊主からきいた。まさかと思い、屋敷の小者に訊きただしてみた。やはり、事実ではなかった。

「一度は厠を借り、一度はどびんを返しに参られただけでござりました」

角馬はその言葉を信じたが、信じられなくなったのは、あの夜からの小里の態度だった。からだを抱いていてもそれ以前とはまるでちがっていた。小里の魂が体から抜け寝所の宙をさまよってたれかの影を追っていた。（長十郎じゃな）小里が長十郎を想うていると知ったとき角馬はからだじゅうの血の色が黒くかわるほどに嫉妬をおぼえた。自分の容貌が牛といわれるほどに醜い。幼ないころから持ちつづけてきた、この負け目が、角馬の嫉妬をはげしくした。

が、角馬の性格では、小里を責めたり手討ちにしたりすることができなかった。もともといんにこもるたちといってよかった。

小里に狐をみせたのは、角馬が出来る精いっぱいの小里へのあてつけだった。

むろん、狐は小里の幻覚にすぎない。兵法とは相手の精神をいじるわざである。一流をひらくほどの達人ならば、女ひとりの心を催眠させて思うままの幻覚へみちびくことはわけはなかった。

「深尾どの、茶を進ぜようか」

「ご造作はいりませぬ」

「お苦しみの様子じゃな。拙僧に、どうせよと申されるのか」

「それを」

角馬は、必死の顔をした。

「教えていただきたい。それがし、剣をまなんですでに久しうござる。一流をひらき、いささかの境地に入りえたと思うておりました。ところがそれは、うそでござった」

「たしかにうそであった。たかが、おなごのことで、もろくも崩れ去っているのじゃからな。お手前は、よほど業の深いうまれつきとみえる」

「業？」

「生来、人なみはずれて愛情がふかいと申すのじゃ」

「どうすればよろしうござる」

「おなごを忘れるがよい」

と楚禅はいかにも陳腐なことをいった。角馬は失望した。角馬がききたいのは、そういうことではない。半生をかけて練りあげた自分の境地が、女への愛情でもろくも動揺したということについてである。

「それがしの兵法とは、たった一人のおなごのために崩れるほどもろいものでござった。それはなぜでござろう」

「しょせんは、おぬしの兵法は棒振り兵法、畜生兵法にすぎなんだということになる」

「無念な」

角馬は眼をつぶった。ひざをつかみ、唇をかんだ。唇から血が流れ出た。

楚禅はからかうように、

「無念がることはない。お手前は兵法、兵法と、まるで大そうもないことのように申されているが、その兵法が、かえって悟道をさまたげるシコリとなり、業となり、煩悩となっている。兵法などはわすれてしまえ」

「わすれる？」

角馬ははじめて夢からさめた者のように眼を大きく見ひらいて楚禅を見た。そこに、黒衣をまとった貧相な老人がすわっているのをみた。

「ばかな。生涯かけてここまできたものを忘れられるものではござらぬぞ。それではわしの一生は、無に帰してしまう」

「無に帰するがよい。人は本来、無一物なものじゃ。はだかでうまれ、はだかで死んでゆく。なにを惜しむことがあろうか」

「忘れられぬ」

「この痴けめ」

楚禅はいきなりコブシをかため、角馬のコメカミを打とうとした。が、そのときは角馬の手は自然に動いて、楚禅のからだを手マリのように茶室のすみへ叩きつけていた。

「ぶ、ぶれいな」
楚禅は腹でも打ったのか、身動きもできない様子だった。
角馬は起ちあがって、
「おぬしら坊主は、口舌を動かして世を渡る徒ゆえ、こともなげに、捨てよ忘れよという。わしは、わしの剣を半生のあいだ骨をきざんで築きあげた。おぬしら長袖者に作る者の気持がわかるまい」
「け、けんとうちがいなことをほざくわ。おぬしの強いばかりの畜生兵法を捨てよというたのじゃ」
「おう、畜生兵法でよいわな」
不意に角馬は、右手をあげ、脇差の柄のあたりにおろした。
「げっ」
楚禅は斬られるとおもったのだろう、ニジリ口からころぶように逃げだした。
(やはり、なま坊主であったわ)
山門を出たときはすでに夜が明け、雨があがっていた。城下は朝霧の中に沈んでいる。
角馬はその足で林又右衛門の屋敷を訪ね、仕合を受ける旨、口上した。時は明日の辰ノ刻、検証役は林又右衛門、場所は、又右衛門の下屋敷の中庭。

六

仕合は、一瞬で済んだ。
久世長十郎は、角馬の木刀のために頭を梨割りにわられて即死した。
又右衛門は、わめきながらおどりあがった。
「角馬、気でも狂うたか」
むりもなかった。仕合はあらかじめ稽古仕合ときめられていた。木刀を相手のからだから紙一重でとめるのが、常法である。が、角馬はそれをしなかった。いきなり上段にかまえ、位押しに間合をちぢめて行って三間のところで、
「やあ」
と威圧した。長十郎は一瞬、マブタを垂れた。それがこの男の最後の表情だった。あとは、血まみれになってころがっていた。
「こ、ころしたな」
「もはや息はありますまい」
「やしきにて、沙汰を待て」

相手は、牢人とはいえ、江戸の大身の旗本の縁者である。長十郎の横死をきけば久世丹波守が、幕閣に働らきかけて池田家のためにどういう不利な工作をしないともかぎらない。

「謹慎つかまつる」

薄笑いをうかべ一礼した。角馬にすれば、予定の行動だったのである。自邸へひきあげるとすぐ、おもだつ門弟をあつめ、

「本日、主家に迷惑のおよぶ仕様をした。一刻ののち、切腹をする」

門弟がざわめくと、

「さわぐな」

と制し、

「介錯の太刀は鈴置四郎兵衛がもて」

中庭に切腹の場をつくるあいだ、角馬は使いを継福寺にやって、楚禅をつれてこさせた。

「それなる濡れ縁へござれ」

楚禅のために座をつくり、角馬は中庭にすすみ出て声をかけた。

「楚禅どの。兵法者の死にざまがどのようなものか、とくとご見物あれ」

高言のとおり、角馬の切腹はみごとなものだった。

まず、三宝の上の短刀を押しいただいて腹にあて、しずかに左から右へ掻き裂いた。こ

ろはよしとみて鈴置四郎兵衛が太刀をふりおろそうとすると、

「待て」

自若としていった。

「切腹にはこういう古人の口授がある。後学のためにみておくがよい」

両手をうしろへまわし、左右の足のおやゆびをつかみ、やがて木の枝をへし折るような音をたててねじ切った。その音をきいて、一同蒼白になった。角馬は声も乱さず説明した。指を骨折させておくと、首を打たれるときに背後へのけぞる醜態をふせぐことができるというのである。

「打て」

首が落ちた。

この日、角馬が年来丹精していた牡丹がことごとく枯れたと伝わっている。

忍者四貫目（しかんめ）の死

そのころ、京のちまたでえたいの知れぬうわさがながれた。――さる男が、京へやってくるという。甲斐から来るという。

男は、武田信玄に飼われている忍者だといわれた。それもただの忍者ではなかった。忍び名を「知道軒道人」といい、伊賀者や甲賀者のあいだでも、すでに伝説化さえされている名人だというのである。その奇妙な名が、禁廷の公家のあいだにまでもささやかれるようになったころには、諸国でひでりや戦乱の多かった元亀三年の夏も、ようやく暮れはじめようとしていた。――公家は意地がわるい。当然なことだが、京のあたらしい主人となった織田信長に好意をもっていなかった。かれらは、「知道軒が」と、ささやいた。「信長を殺しにくるというのじゃな」

「さもあろう」と、たれもが相槌をうった。「あの信長なら、ただの死にざまはできまい」

*

この「うわさ」には、たしかな信憑性がある。第一に、刺客を放つ信玄自身が「間忍の名人」といわれた男なのだ。かれほど、諸国の武将のなかで、伊賀者甲賀者を大量に使い、たくみに用いた男はいない。

もう一つには、「うわさ」が、叡山の僧から流されていたことである。叡山延暦寺の僧団ほど信長のために手ひどく痛めつけられた集団はなかった。

去年の九月、叡山の僧千六百人が、信長に虐殺されている。

叡山が、信長の敵である越前の朝倉、近江の浅井と密約をむすんで、織田家打倒の策謀をめぐらしたために、織田勢に攻められ、僧侶が殺されたうえ、堂塔伽藍を焼かれた。いのちからがら逃げのびた僧は、甲斐へ走って信玄に泣きついたのである。

信玄には奇癖がある。坊主が好きだということである。好きなだけでなく、みずから坊主になりすましてもいた。法服をまとい、金銀で僧階を買い、「法性院大僧正」と号していた。この大僧正は、これで信長を斃して天下をとる名分ができる、と思ったろう。「仏天のために怨敵信長を誅戮せん」と返事し、「山を焼かれたのなら、叡山延暦寺を甲斐に移してもよいぞ」とまでの好意をみせた。が、これには叡山の使僧も有難迷惑した。信玄は、甲斐天台宗を新設して、開祖にでもなろうと思ったのだろうか。とにかくその信玄が、京に軍をすすめるに先だって刺客を放ったというわさには、たれしもが、当然に思う本当くささがあった。

うわさとは、妙なものだ。

肝心の殺される当人の耳に入るのは、ひどくおくれるものらしい。たまたま領国から上洛してきた徳川三河守家康が、信長に耳うちして教えた。「お抜かりはないと存ずるが、ご用心めさるるに越したことはござるまい」

「ふむ？」

信長はだまった。

「そうか」

よほどの衝撃をうけたらしく、顔色が変っていた。

余談だが、このときの衝撃が、信長をして極度に伊賀者をきらわせる因をつくり、のち天正九年には、伊賀へ大軍をさしむけて「化生の者をことごとく誅殺せよ」という異常な虐殺をやらせた、といわれている。

家康が辞去すると、信長はすぐ中庭の濡れ縁に出て、手を三つたたき、

「草」

*

とよんだ。織田家では、父信秀の代からカカエの伊賀者のことを「草」とよんでいる。「草」とは、昼夜となく屋敷の庭の茂みにひそみ、主人の下知を待つ者だ。

「おらぬか」

「はっ」

背の五尺にみたない侏儒のような男が、茂みのなかから濡れ縁の下まで、がまのように這い出してきた。

「蚊羅刹、おん前に」

信長はいかにも賤者をあつかうようにその者のほうへは眼をむけず、

「知道軒のうわさを存じているか」

「おそれながら」

知っている、といった。

「刺せ」

とのみ、信長はいって、しばらくだまり、やがて、「もし、刺せなければそちを石責めにする。首尾よう参れば、士分にとりたて、馬乗足軽の十人もつけて物見役にしてつかわそう」

蚊羅刹の頭上から路用の金銀が落ちてきた。蚊羅刹は土にひたいをこすりつけ、やがて

顔をあげたときは、すでに信長の姿はなかった。蚊羅刹は、内心、（ちっ）と舌をうった、（忍者の使いようも知らぬおん大将じゃ。いずれ知道軒ならずとも、たれぞに殺されようわ）

蚊羅刹はそのまま京を発った。いったん近江へ出、夜をこめて甲賀の山々を越えて伊賀の国境いに入ったときは、夜が明けていた。伊勢の山々にのぼる朝日をみながら、

（このまま、逃げるか）

なんども思案した。金はあった。世間もひろい。蚊羅刹ほどの腕があれば、どの大将もひろうてくれよう。信長のように、頭から忍者の使いようを知らぬ大将にやとわれていても、先のたのしみはない。

（知道軒を刺せ、と。ばかな）

蚊羅刹はあらためて信長を軽侮する思いがする。武田家の知道軒を刺せるほどの忍者は、信玄についで「間忍の名人」といわれる家康のもとにさえいない。――第一、

（伊賀者が伊賀者をころすなどは、忍祖御色多由也いらい、きいたこともない）

わざわざ忍祖をもちださなくても、犬は犬を食わぬ。

（あほうな、はなしじゃ）

伊賀者は、金銀でやとわれはするが、主従の縁はむすばない。蚊羅刹も、信長に対して

並みの武士のような忠義の心はもたなかった。伊賀者の根拠は、あくまでも傭われた家にはなく、その供給地である伊賀盆地にあった。

伊賀盆地の村々には、「上忍」と称する郷士がすんでいる。諸国の武将は、必要とあれば、伊賀の上忍のもとに使いを出し、「下忍なん束」という注文をする。上忍は、いくぶんかの周旋料をとって、手飼いの下忍を派遣するのだ。用がおわれば下忍たちは伊賀へもどって来、老い朽ちれば、上忍の屋敷で飼い殺しのまま死を迎える。ときに、おなじ上忍に仕える下忍仲間で、一人は越後上杉家にやとわれ、他は甲斐武田家に傭われる場合さえあった。かれらが相討つはずがないのは当然のことではないか。

*

（ちっ）

蚊羅刹が何度めかの舌うちをしたのは、その翌夜、伊賀喰代の郷士祝部源大夫屋敷のまっくらな納屋のなかだった。蚊羅刹は、わらの上にうつぶせに伏せていた。下で、わらに埋もれた白い体が、わらを舐めるように動いている。ときどき、うめき声をあげた。上忍祝部源大夫の養女サグメである。女はあえぎながら、

「まことかや、甲斐へ行きやるのは。――」

「相変らず、わるいくせじゃ。かようなときに、口を」

蚊羅刹は舌うちをして、

「きいて給もるな。興がさめる」

サグメとは、伊賀へもどるたびに体のつながりをもっていた。この夜も、喰代ノ里につくと、蚊羅刹が幼いころから育てられた源大夫屋敷の裏口から入り、サグメの寝所に忍び入って納屋へ連れ込んだ。サグメは多淫で、下忍のたれかれとも、かかわりがあるという。――納屋へ連れこまれたときも、わらの上に寝かされてから、眼をこすって、

「なんじゃ、喜平次かや」

喜平次とは、蚊羅刹の実名である。サグメは、村の者の夜這いかとおもったのだろう。

蚊羅刹は闇の中で女を見ながら、

「サグメ様も、すこし肥られましたな」

「おまえは痩せた。久しゅう会わなんだゆえ、見ちがえたわな」

サグメは、纏うたものをぬいだ。――そのサグメに、蚊羅刹がわらの上で寝物語ったことを、サグメは、いちはやく養父の源大夫に告げたものか、翌朝、源大夫の居間にうかがったとき、源大夫は言葉もかわさぬ前に、ひくい声で、

「知道軒を討つのか」
「いや。左様なつもりは毛頭ござりませぬ」
「どうする」
とは、口ではいわない。口中に歯がなかった。源大夫の、老いた狐狸のような冷たい眼が、口ほどにものをいう。蚊羅刹の背に、汗がながれた。当然なことだった。——ここ二十年来武田家に傭われている知道軒道人コト祝部三左衛門は、源大夫の実弟である。同時に源大夫の下忍であり、蚊羅刹喜平次からすれば、兄弟子にあたるのである。源大夫は、
「織田弾正忠（信長）から、なんぼ貰うた」
「それは」
といおうとしたとき、すでに源大夫の手が下腹のあたりにのびていた。蚊羅刹の腹をなでさすりながら、
「だいぶ冷えている。重かろう。すこしは荷をおろしてゆくがよい」
蚊羅刹の胴巻をひきずりだし、中から金の粒を二つばかりつまみとって、ポイと胴巻を蚊羅刹の膝もとへ投げた。
「あすは、甲斐へ発て」
「えっ」

耳を疑った。源大夫は、実弟を刺そうとする蚊羅刹を黙許するつもりなのか。——源大夫は懐ろから入れ歯を出して口にはめ、
「三左衛門（知道軒）などは、殺そうと生かそうと、わしはかまわぬ。あれは甲斐の大坊主に憑かれてしもうた男じゃ。ひょっとすると、伊賀のおきてを破って坊主に仕官でもしておるのかもしれぬ。その証拠に、ここ十年も、上忍であるわしがもとに仕送りもして来ぬ。弾正忠が殺さずとも、わしが刺客をさしむけてもよいぞ」
（そうか）
蚊羅刹は、ふと榎の老樹を想った。この屋敷の西にある榎のそばに五町歩の山田がひろがっている。
山田は、知道軒三左衛門が、その父から譲られたものだ。死ねば、源大夫のものになる算段なのである。——が、蚊羅刹は、それはおくびにも出さず、いかにも小心の体をつくろい、眼をおびえさせながら、
「しかし」
といった。源大夫は、「はん？」と蚊羅刹の顔をのぞきこみ、この男にはめずらしく、にッと笑って、
「よいよい。われの腕では知道軒の術にかなわぬというのであろう。金を出せ」

「は？」

「弾正忠から貰うた金じゃ。もそっと出すがよい。あの者の術をやぶる法を教えてくれる」

＊

蚊羅刹喜平次が、田楽法師に化け、源大夫に周旋された二人の下忍をつれて、甲斐国古府中に入ったのは、元亀三年八月のなかばである。伊賀で傭うた下忍は、一人を上野ノ吐根といい、一人を名張ノ四貫目といった。吐根はまだ若かったが、四貫目はひどく老いぼれた忍者だった。年をきくと「享禄三年に細川家にやとわれ、播磨国東条で柳本攻めに加わったことがある」というから八十は越えているのではあるまいか。四貫目というアダナは、一日にナマ米を四貫目食いだめできるという奇妙な能力から出ている。

「まだ食えるか」

「米を買うてきなされ。啖うてみせまするわな」

馬のように長い顔をほころばせた。存外元気者だし、甲州の忍者の世界でもこの男は顔がきいて、情報の収集にはおどろくほどに役にたった。

まず知道軒三左衛門とはどんな男なのか。どんな顔ツキでどんな能力をもつ忍者なのかを、蚊羅刹は知らない。兄弟子とはいえ、二十年も甲斐にいる男を、若い蚊羅刹が知るはずがないのだ。

「造作はござらぬ。わしがしらべて進ぜる」

四貫目は、武田家の伊賀衆から、あれこれとききだしてきた。それによると、住まいは、信玄の居館である躑躅ヶ崎館の中だという。

蚊羅刹は鼻でわらって、

「知れたことを。信玄手飼いの忍者なら城内にいるにきまっている。城内のどこじゃというのをきかなんだか」

「厠じゃ」

「かわやじゃ？　雪隠か」

「いかにも。信玄の垂れる糞とともに暮らしている。さぞ臭かろう」

ククと笑った。

ただの厠ではない。この厠の図面を、武田家滅亡後、遺臣大倉藤十郎という者が家康に献上したときに「信玄はこの厠を案出したことの一事をもってしても名将と知れる」と感嘆せしめたほどのものだ。武田家ではこの厠を、山という。山には草木（臭き）がある

という意味というが、どうだろう。

堅牢な独立家屋がふた間に仕切られ、ひと間は浴室であり、他は厠である。浴室のユカ下から湯が流れ出て厠の不浄を洗いながすようにできている。忍者知道軒は、信玄の糞の落ちてくる厠の下に二十年も住み、信玄を敵国の忍者からまもる一方、時に応じて、厠の中で密命をうけるというのだ。

「ほほう」

「二十年も住みながら、武田家の忍者でさえ知道軒の姿を見たものはない。厠から出るときには、さまざまに姿を変え、顔を変えて人前に出るゆえ、たれもどの者が知道軒かは知らぬ。かげろうのごとく姿あらわさざる者を良忍というゆえ、よほどの達人でござろう」

「およその顔つきは、源大夫様からきいている」

「いやいや。兄弟とはいえ二十年も会うてみえぬ。まして相手は変装の名人じゃ。城内の伊賀者さえ顔を知らぬ。——あるいは」

「なんじゃ」

「討てませぬな」

「討つわ」

と気負ってみたものの、躑躅ヶ崎館を警護する忍び衆は甲賀者だけでも百人はいる。相手はまして、人相もさだかでない。知道軒を討つほどなら、信玄の寝首を掻くほうがたやすかろう。

「しかし、それほどの名人か」

「わるいことは申しませぬ。もともと弾正忠様の申し付けこそ間違うておる。むりなしごとじゃ。馬乗足軽十人の物見役などはあきらめて織田家を逃散なされ」

「馬乗足軽十人などはどうでもよい。仕掛けて逃げたとあれば、伊賀でめしが食えぬようになる」

「さすれば——」

と老人は、一案を講じてくれた。躑躅ヶ崎館で討つよりも、京で、信長の宿所に侵入してくるのを待つほうが早かろう、といった。蚊羅刹は、さもあろうかと思い、三人の忍者は、わずか三夜を走りぬいて風のように京へ立ちもどった。

*

この蚊羅刹喜平次という男のことは、伊賀の忍術伝書「忍秘記」に出ている。が、信長になにをどう繕って復命したのか、わからない。とにかく、四貫目と吐根という下忍を

使って宿所を警戒することになった。

信長は、室町将軍義昭のために第館を造ってやったが、信長自身は、依然として寺院を宿所に用いている。このとき、たまたま、本能寺にいた。

本能寺はまだ落慶早々といっていい寺で、構内もひろく、堂塔伽藍も多い。夜になると、警戒の武士を四百人にふやし、犬を放ち、かがり火を真昼のように焚いて、いかに名人知道軒でも、すねの毛一本も侵入できないとおもわれた。

蚊羅刹は、鬼門にあたる毘沙門堂のあたりを終夜うろついている。知道軒がもし侵入するとすれば鬼門からだという自信が、蚊羅刹の頭にあった。――祝部源大夫がおしえてくれたのだ。

（三左衛門には妙なくせがあって、城館に忍び入るときは、かならず鬼門から入る）

忍者の法として、むかい風のときにのみ侵入する。追い風ならば、自分のにおいや物音が風に乗って邸内に入るではないか。鬼門は北東角である。知道軒は、南西より風が吹く夜以外は侵入しない、ということになる。おかげで源大夫は、知道軒の侵入する場所と時刻をおしえてくれたようなものだった。

（顔は、丸顔で反っ歯が二枚あり、まゆ毛がない。とは云うても二十年前のことだ。老けもしたし、造作も変えていよう）

が、四貫目は、蚊羅刹が鬼門の塀にはりついているのが、いかにも不満だった。なかばあきれて、

「忍びのわりには律儀じゃな。源大夫どのが教えたと申しても源大夫どのが、知道軒の忍び入るのを見たわけではあるまい。わしはほかを見まわる」

蚊羅刹はそれも道理だとおもい、四貫目に忍び手形を渡し、境内のどこへでも行けといってから、ふと吐根に気づいた。この若者は、伊賀から甲斐へゆく道中も甲斐から京へもどったときも、ほとんど数えるほどしか口をきかない。いつも下唇をだらりと垂れ、眼はねむったように細く、魯鈍かとさえおもう。吐根は二人にただ影のようについてくるだけで、ときどき、そばに居ることすら忘れることがある。

「吐根はどうするのじゃ」

「わしかえ」

吐根はニッと笑い、あごで老人を指した。四貫目についてゆくというのだ。蚊羅刹は、吐根にも忍び手形を渡してやった。

ふたりは、境内のほうぼうをまわっては、ときどき蚊羅刹のもとにもどってくる。

数日たった。知道軒はついに来なかった。あすは信長が尾張清洲の居城にもどるという夜、さすがに本能寺の警衛陣にも、ほっとした安堵の色が流れた。

「風説よ」

とわらいとばす武士もある。風説にしても、織田陣を疲れさせるために信玄がまきちらしたものであろう、むかしから虚実のわからぬ大将なのだ、とたれしもがいった。

「知道軒というのもおおかた、実在の者ではあるまい」

という者もいた。

(無知な)

と蚊羅刹はおもった。知道軒は厳然として実在する。実名は祝部三左衛門であり、源大夫の令弟であり、喰代の山田には、持田さえあるではないか。——が、不意に、別なことを考えて、蚊羅刹は、がく然とした。

(はたして、祝部三左衛門が知道軒道人だろうか)

三左衛門は、源大夫のもとから甲斐へ行って二十年になる。仕送りして来なくなってからでも十年になるのだ。生きているという証拠はない。第一、武田の知道軒が伊賀の三左衛門であるというのは源大夫自身の思いちがいかもしれない、と考えて蚊羅刹はにわかに狼狽した。

「四貫目」

闇にむかって、低くよんだ。こたえはなかった。蚊羅刹は地を這って闇を見すかしながら、舌を巻き唇をつぼめ、合印(あいじるし)の鈴虫の声を鳴いてみせた。こたえがなかった。どこぞを見まわっているのだろう、歩きはじめたとき、

(あっ)

と足もとをみた。草の中に黒い物体が横たわっていた。犬だった。抱きおこして口を嗅ぐと異臭がした。毒殺されている。

(忍びが、入っている)

蚊羅刹の手足が、一時にひえた。

「なにをしてござる」

(えっ)

ふりかえると、足軽の装束をつけた四貫目が立っている。

「どこにいた」

「見まわってい申した。ところで、吐根をごぞんじないか。一刻ばかり前にはぐれたまま見あたらぬ。——ところで」

と四貫目は、顔を、なめるほどに近づき、

「吐根は、武田の忍者じゃ」

うそではない、と四貫目はつばをのんだ。吐根は伊賀の上野の出身だという。ところが

八十歳になる四貫目が、名はきいていても顔はみたことがない、おそらく武田に飼われていたものだろう、といった。

「なぜ、早う教えてくれなんだ」

「おぬしの上忍の源大夫どのがえらんだ者をわしが苦情をいえまい。そのようなことより早うなされ。いまごろは、弾正忠の御座所に忍び入っておるかもしれぬぞ」

「報らそう」

駈けだそうとする蚊羅刹の袖を四貫目がとらえ、

「待ちやれ。おぬしはそれでも伊賀者か。番の者に報らせて騒ぎになれば、たとえ吐根がつかまったところで、一類のおぬしは打ち首になる。われらでさがそう」

「道理じゃ」

ふたりは足軽装束をぬぎ、忍び装束にきかえると、そのまま闇に消えた。境内に犬の声がしない。おそらく吐根が、ことごとく毒殺したものだろう。犬のいないことが、かえって二人を幸いさせた。信長の寝所のある書院までの間にたむろするどの武士も、ふたりの伊賀者の移動に気づかなかった。

*

それから四半刻ばかりののちである。

武田の忍者「知道軒道人」は、本能寺の鬼門の塀につかの長い忍び刀をたてかけると、風のように黒い天を飛んで塀の外へのがれ出た。

すぐ、堀があった。

（織田家はあまい。蚊羅刹などという並みの武士よりも愚鈍な忍びを、ようまあ抱えていてくれたものじゃ）

そのころ、蚊羅刹は、黒書院の中庭のすみで、心ノ臓を一突きにされて倒れていた。

知道軒は石垣にはりつき、やがてずるずると堀のなかに身をしずめた。とっぷりと水に頭まで沈めると、節ぬき竹をとりだして口にくわえ、しずかに呼吸をはじめた。逃げのびるために、しばらく様子をうかがうつもりなのだろう。

（これで法性院大僧正の御意にもかなおう。信長は刺せずとも、織田勢の心胆をさえふるいあがらせただけで、用は一まずすんだ）

夜があければ、本能寺の警備陣は驚愕するだろう。

信長の寝所近くで手飼いの伊賀者の死体があり、境内の諸所で犬が死んでおり、さらに、鬼門の塀のかわらが、三枚、きれいに裏返されている。

（どうやら、まだ気づかぬようじゃ。さて、甲斐へもどろう）

水底をあるき、やがて堀のむこう側につくと、知道軒は浮きあがった。知道軒は、石垣をつかんだ。

両手にクナイを持って石垣のスキ間にうちこみ、かきあがるようにして地上にあがったとき、

「知道軒か」

黒い影の手から、剣が一颯した。知道軒の脳天は二つに裂け、やがて体がずるずると、もとの水中にもどった。

堀ばたの影が、ゆっくりと顔のおおいをとった。吐根であった。十六のときから三河の家康につかえ、のちに五千石の旗本になった服部半蔵（はっとりはんぞう）は、若いころからいくつかの功名をつみかさねた。

このときの手柄もそのひとつである。家康が信長の身を気づかい、伊賀の祝部源大夫を通じて信長に半蔵を貸したのである。

知道軒道人は、いうまでもなく、四貫目であった。伊賀での忍び名を四貫目といい、武

田家での忍び名を知道軒といった。源大夫でさえそのことを知らなかった。むろん、知道軒が祝部三左衛門などではない。三左衛門は、十年も前にすでに世から消えている。

みょうが斎の武術

家主藤兵衛

土の上に五年も臥せていれば剣術の達人になれるというフシギな方法を考えついた男が、幕末のころの大阪鰻谷にいた。

家主藤兵衛への届出には「和州浪人・久富源五郎」ということになっていたが、長屋の連中は、たいてい「みょうが斎はん」とよんでいた。もっとも、名のいわれはわからない。土の上に寝ているから茗荷斎なのか、それとも、百万遍念仏のように土の功徳ばかり説いているから冥加斎なのであるのか、いずれにしても、この「みょうが斎」にちなんだわらべ唄が、いまなお、大阪のふるい俚謡のなかに残っている。題を「がえごろむし」という。がえごろというのは蛙子のなまりで、江戸語でいえば、おたまじゃくしのことである。

がえごろむしは水のなか
よねちのいとはん蔵のなか
みょうがさいは土のうえ

いっしょに寝たら子がでけた

よねというのは、道頓堀二ツ井戸に店屋敷をもっていた町年寄米子屋智兵衛のことである。娘の名を、歌という。お歌が、剣客久富源五郎に想いを寄せていることが巷間につたわって、こんな唄ができたのだろう。

「えウ。いとはんが、あのみょうが斎に。ほんまかいな」

女房のおりつからそのことをきかされて、真青になったのは、家主の藤兵衛のおどろきは、当時の大阪という背景がわからなければ理解しがたい。

大阪は江戸とちがって、いわば町人の共和国だったのである。城代、両町奉行というものはあったが、市政の実権は、町人からえらばれた惣年寄、惣代、物書、町年寄、町代といった連中がにぎり、町内の城主はいわば町年寄であった。士分にあたるものに、町人がある。町人というのは、家屋敷をもっていなければその資格がなかった。それ以下の者には納税の義務さえなく、まして町政に発言できる権利もない。以下の者というと、借家人で、この借家人の身分にも、上下二通りある。表通りにすむ者を表借家人とよび、裏通りの者を裏借家人という。久富源五郎という者が、いかに屈強の剣客であり、浪人とはいえ武士のはしくれだとしても、これは大阪ではとおらない。単なる裏借家人にすぎなかったからである。

「あいつが」

藤兵衛は、歯ぎしりした。「せっかく可愛がっていてやったのに、飼犬に手をかまれたようなもんやないか」

「ちょっと待っとくなはれ」と、おりつはあわてて、「好いたほれたは、いとはんの方で、みょうが斎はんは何も知りはらしまへんで。きょう、二ツ井戸のお店に参上ったら、いとはんのお乳母はんがわたえを奥へよんで、いとはんが恋わずらいやちゅうコッちゃ。古風な話でな。なんとか、とりもってやりたい、せめて一目でも会わせてさしあげたい、そういうことで、家主の藤兵衛はんに一肌ぬいでもらいたい、といわはるのや」

「いったい、どうせえ、というねん」

「いいえ手間はない。ここの家で、じょうずに二人を落ちあわして、ひとめでも……」

「あかんあかん」

藤兵衛は、きせるの首を畳のうえにつきさして、真赤になった。

「いやしくも、やな。相手は町年寄にもなっているみそやの米智はんや。こっちゃの剣術使いは、お前、たかが裏借家人やないか。おまけに食うにこまって、町内の用心棒ということで合力銭をもろうとる男や。まるで身分がちがう。そんな恋の仲立をして、もし米智

はんに知れたらどうするのや。わいらは、家主として裏借家人の束ねを怠ったというかどで、町内に居辛うなるがな。それにしても、あのお歌はんといういとはんは、なよなよして、物もよう言わんようなおとなしい娘はんやけど、シンはえらい好色もんやな」

「おなごはな」

おりつは物知り顔にうなずいて、「おなごはそんなもんや。シンの燃えやすいたちほどおとなしい。にえくりかえったお鍋のふたを、うしろ手で、こっそり知らん顔でおさえたはる。わたえのようなハッサイ（おてんば）そだちは、そのつど煮えこぼれがこぼれてるさかい、中身はあっさりしたもんや」

「ありがたいもんやな」

「べつに礼いうて貰わんでもええ」

「ええかげんにさらせ」

「冗談はべつにして、わたえも頼まれた身や。米智米智というても、お扶持をいただいているわけでなし、なにもお主家みたいにご遠慮もうす義理はあらへん。おなごというのはな、色恋ひとすじに生きている。年をとれば、若い娘の色恋の世話をしてこそ、おなごの冥加や」

「そういうもんかいな」

藤兵衛は毒気にあてられたようにぽかんとしていたが、やがて、「よいしゃ、二十年連れそうた女房の冥加仕事や。わいも手伝うたる」と、たちあがった。

「どこへ行かはる」

「源五郎どんのところへな」

藤兵衛は家を出て、竹屋町のすじを南へまがった。長屋は袋小路になっている。袋小路のむこうに願成寺の森がみえ、森のうえの秋空が、夕陽に茜はじめていた。久富源五郎ことみょうが斎のすまいは、その袋小路のつきあたりにある。

「いるかえ」

そっと格子をあけると、すぐ足もとに二坪ほどの土間があった。開けたまま、藤兵衛は踏みこめなかった。その土間で、みょうが斎がながながと寝ていたからである。

なんとも妙な光景だった。土の上に木枕をおいて頭をのせ、上半身はでれりとした裸形だった。腰のあたりに、辛うじて紙衣の上ぶとんをかるく掛けているにすぎない。

丈は五尺五寸ほど、顔がまるくて童くさいが、もう三十は越しているだろう。薄眼をあけて、じっと藤兵衛をみつめていたが、しばらくして、わずかに唇をうごかした。

「縁談か」

「ほら。ようわかるな。なんでわかった」

「お前のからだが、女くさい。つい先刻まで女ばなしをしてきた匂いが、まだこもっている」

「気色のわるい。まるで八卦見のようなことを云うやないか」

「そこが、てんねんじねん（天然自然）流剣法の摩訶不思議な功力でな。……だいたい在来の剣法というものはな」

「まってくれ」

藤兵衛はききあきているらしく、あわてて押しとどめようとしたがおそかった。源五郎はうとうととまどろんでいるような表情でしゃべりはじめた。

「在来の剣法というものは、道場に神号をかかげ、祭壇をつくり、神酒をそなえて、おのれが神になることをのみねごうた。これは大ちがいでな。剣法というのは、犬猫畜生にならねばかなわぬ。犬や猫こそ、剣術つかいの理想じゃ。たとえば、猫をみよ」

「猫もええが」

「まあ聞け。たとえば、猫をみよ」

「米智のいとはんの一件や」

「猫は、やな。猫は敵のまだ襲わざるに、いちはやく予見して遁げだす。獲物をみれば呼吸をしずめ、気を眩まし、一尺の近さまで接近して電光石火にとらえる。就眠中、人が近づけば、毛の尖で相手の害意の有無をさとり、屋根より蹴落されても、軒先で一回転してかるく地上に立つ。人も大昔は、猫のごとくであった。習わずして、猫の性をそなえておった。着物を着、住居にすむにおよんで、猫のさがを失うた。剣法というのは、うしなわれた猫のさがをとりもどす術で無うてはならぬ。猫をよびもどすには、まず土のうえで寝る。土気を吸う」

「米智のお歌はんちゅうのを知ってるか」

「どこの猫や」

「あほ、人間のはなしや」

「猫は、やな」

「猫きちがいめ」

藤兵衛は、かんしゃく持ちで通っている。このときもよほど腹にすえかねたのか、極道息子を叱りとばすような見幕で、閾ごしに足をあげて源五郎の腹を蹴りあげた。ところが、空を蹴った。みょうが斎源五郎は、いつはねとんだか、上りがまちのうえに、ちょこんとすわっていたのである。腰のあたりに、下帯だけは巻きつけている。

「どうや。これが、てんねんじねん流の極意や。そもそもおれ自身からして、いつのまに跳ねとんで、いつのまにここに坐っているのか、さっぱりわからんねや」

「わいは、なにもお前ずれと試合をしにきたのやないわい。色深いはなしをもってきたんや」

藤兵衛は、むかいあって坐った。むろん上座である。家主で町人だから、裏借家人に対して、ちょうど主君のような位置をとる。

「源五郎はん、まさかお前はんは、この藤兵衛の恩はわすれてはいまいな」

「なんや、藪から棒に」

「いまから六年前の冬のこっちゃ。道頓堀川の太左衛門橋の下で、お武家風の男が、菰もかぶらずに真昼間から寝ていた。それがお前はんや。あわれに思うて、連れてかえって、この藤兵衛店にすまわせた。はじめて白い飯をくわせたときは、世の中にこんなうまいものがあるのかと、お前はんは六杯もおかわりした。なにせ、郷士のうまれとはいえ、お前はんは和州十津川郷という大山奥の郷士でな、粟稗のほかは食うたことがない。さいわい剣術がでけるというので、町内にごろつき浪人でもまぎれこんだときの用心にもと、表通りの町人衆が寄り合うて、合力銭を出してお前はんを飼うことにした。こんにち、五体を動かしていられるのも、この藤兵衛の老いぼれのおかげや。聴いてるか」

「聴いてる」

「じつはな、どういう虫の居加減か、米智はんのいとはんが、お前はんを見染めたらしい」

「そうか」

源五郎は、興味なさそうに答えた。

「ひと目、お前はんに会いたいという。それはええ。いと安いこっちゃ。あしたでも、お稽古の帰りにわいの家へ寄ってもらい、お前はんも来てもらえば済む。それだけのこっちゃ。しかし、済まんのはあとのことや。そのさき、好いた惚れたをやられては事が面倒になる。町内の秩序が保てん。お前はんがわいに恩義を感じてくれるなら、このさい、一つだけのことを守ってもらおう。よいか、お歌はんには、かまえて惚れるなちゅうことや」

「ああ、それだけのことか。惚れまい」

「それをきいて、安堵した」

ぞんがい事が簡単にはこんだと藤兵衛がよろこんで帰ってゆくと、源五郎はそのことはすっかり忘れたような顔付で、表へ出た。出るなり、ひょいと軒のひさしをつかんだ。そのまま腕一本に力を入れると、眼にもとまらず体が宙にはねあがり、屋根瓦の上に載った。やがてスラスラと屋根の上を逼い奔り、ごろりと身を横たえたとたんに、ころころと体が落下してくる。加速度のついた源五郎の体を屋根が吐きだすと、きらりと閃めくように空中で半回転してストンと地上に降り立つのである。そのあとは、夕暮まで、木刀の素振を

三千回やる。これが、源五郎の案出したてんねんじねん流の修業法なのである。

この奇妙な流儀は、慶応二年に刊行された安藤寺橋南詰備後屋忠兵衛版元の『なにわ百撰』という当時の大阪案内記以外には、どんな記録にも出ていない。当時の剣術諸流派からは一顧もされなかったのであろう。

もともと、日本の剣の操練法はふるくは鹿島香取の神宮から出たという。その体技をさらに合理化したのが、鹿島神流の杉本備前守、天真正伝神道流の飯篠長威斎、一羽流の諸岡一羽、神陰流の上泉伊勢守らであった。後世の諸流のほとんどは、これらを源流にひいている。すべてはその改訂か亜流にすぎないわけだが、みょうが斎久富源五郎が考えついたフシギな剣法は、そのいずれの真似ごとでもなかった。

ゆらい、剣法というのは、理屈はともあれ、要は神経の反射を過敏ならしめることなのである。人間がだんだん文明化するにつれて、この能力が退化する。この退化本能をよびさますことが、剣法唯一の道であると源五郎は考えた。

源五郎が生れたのは、畿内の秘境といわれる十津川郷であったから、外界との交渉にとぼしく、就くべき剣術師範もいなかった。彼は自分の直感でさとったこの本能覚醒法をてんねんじねん流と名づけ、大阪に出てきてからも他の既成流儀を学ぼうとしなかった。

昼は寝ている。源五郎にいわせると、それが、動物の天然自然なのである。夜になると、

木刀を振り、屋根にのぼり、町を走った。これが町内の人たちにひどく重宝がられた。

「なんやら知らんけど、用心にええわい」

源五郎が住みついてから、町内三丁四方に盗難とボヤがなくなったという。泥棒仲間でも、鰻谷一帯は鬼門とされた。

「妙なやつが、夜さりじゅう、どかどかと走りまわっているらしい」

「ほなら、わいが行ってみたる」

と云って、仕事自慢の男が、薬草問屋御所屋喜兵衛の店へ入ったことがある。裏口から入って、ぶじ仕事をすましたあげく裏口から出た。

「どんなもんじゃい」

思ったとたん、あっと声をのんだ。ピタリと、泥棒の左袖にくっついて、気配を殺して肩をならべている男がある。駈けだそうとしたら、男も駈けた。町内を出ようとすると、男が、わずかに袖を引いて、出させようとしなかった。まるで呪縛にかかったように、暁方まで荷物をかついだまま、鰻谷の町内を大走りに走らされ、ついには、発狂したように

「も、もう、かんにんしとくなはれ。荷物はかえしまっさかい」

「そうか。それなら、御所屋までもどろう」

店の裏口から走りこんで、荷物をほうりだしてから、恐怖があらためて甦ったのだ

ろう、腰がぬけた。肘で漕ぐようにして道路まで出てきて、

「おっお前はんは、人か」

「狸にみえるかいな」

「わッ」

なにを勘ちがいしたのか、鳥目を投げだしてにげだしてしまった。賽銭のつもりだったのかもしれない。

藤兵衛が帰ってから、しばらくすると日が落ちた。みょうが斎は屋根あそびを終え、木刀振りの日課もすんで、いつものとおり町内を走りはじめた。走っているかと思うと、急にとまる。ふいに、とんぼ返りもうつ。はげしくうしろむきに走ることもある。筋肉を練るというよりも、いかなる方向からくる刺激に対しても、敏感に反応しうる神経を養うのがその理屈らしい。その夜、町内を走っていた彼の足は、米智の店屋敷の前まできたときに、つと止まった。刻限はすでに、四ツの下刻をすぎていた。

米子屋お歌

お歌は、十九になってもまだ嫁いでいなかった。末娘で、父の米子屋智兵衛が孫のように可愛がっていたためと、子供のころから蒲柳の質で、二年に一度は、乳母のお千賀が夜なべで看病らねばならぬ患いをしたためだった。しぜん、婚期がおくれていた。

そのせいか、おとなしいくせに、ひどく依怙地な駄々をこねる。それが、まるで気まぐれなのである。あるとき、急につけたて（簡単な絵）をならいたいと云いだして、お千賀が智兵衛にとりつぐと「それは結構。末嬢さんも気がまぎれてよろしいやろ」ということになって、絵道具の一さいを買いそろえ、たかがつけたてに、大阪でも一流の四条派の絵師平野正伸を招んで習わせた。ところが正伸が来た翌日、お歌は部屋にひきこもって終日ものも云わなかった。たまりかねて、お千賀が口を割らせると、眼に一ぱい涙をためて、「あの絵師の鼻が気にくいまへんのや」と云った。やむなく、絵師は一日で断ってしまったことがある。その後、書や謡もならったが、三回とはつづかなかった。「あの先生の眼が牛眼でいやらしいこと」といった。謡の先生のばあいなど、ただ「眉毛のうすいのが気味わるい」というだけでことわってしまった。

そのくせ、ふしぎと、三味線や、琴、お針などを習おうとは云わないのである。お千賀は、やがてその理由がわかった。お歌は、自分では気付いていないかもしれないが、男がほしかったのである。べつに淫らがましい意味ではなく、なんとなく男と接していることだけで、お歌のからだのシンにあるものが、やすらぐのであったろう。絵や書や謡をなら

いたいのではなく、それらを通して、自分の気に入った男の像を求めたかったのだ。それに気付くと、お千賀はいっそうお歌があわれになった。——ただ、

「剣術をならいたい」

と云いだしたときだけはおどろいた。

「それも、裏のみょうが斎さんでなくてはいやです」

みょうが斎の顔を知っているのかときくと、一度通りで遭ったことがあるという。

「しかし、あの人はお頭がおかしいと云いまっせ。それに、あの人の剣術はふつうのもんやおまへん。剣術なら、天満の道場からええ先生を招んだげまひょ。な」

「いやです」

と、お歌が幼児のように乾いた顔で云った。

(勝手にせえ)

と腹がたった。お千賀は、いまでこそ商家の乳母をしているが、もとをただせば、天満の同心侍の女房である。亡夫は剣術などは無縁の金方同心だったが、それでも剣術とはどんなものかぐらいは見覚えていた。あんな、自然薯みたいな男のやっているふざけた独の遊びが剣術であるとは、とうてい承認できないのだ。

「ほなら、嬢はんの勝手にしなはれ。お千賀は、よう頼みまへんで」

「みょうが斎はんへは、あたしが頼みます。そのかわり、日をきめて、お千賀はんが会わしとくなはれや」

「さあ」

「あしたがよろしやろ。藤兵衛はんのお家にします」

「嬢はん」

「口答えはきらい」

そういういきさつで、話がきまってしまったのである。

藤兵衛が話をもってきたのは、その日の夕のことだ。夜の日課を終えた源五郎は、前記のとおり四ツの下刻に、米子屋智兵衛の店屋敷の裏口に立った。芋掘百姓の着るような裾無に縄の帯をしめ、三尺八寸の蛤刃の木刀を腰にぶっさしている。

夜番のじじいが、拍子木をたたきながらやってきた。たたずんでいる源五郎をみて、

「あ、先生はん。腹痛だっか」

心配そうに提灯を近づけてきた。町内では、この夜番のおやじだけが源五郎を尊敬してくれていた。なにしろ、源五郎の夜間活動のおかげで、おやじの手間がずいぶんはぶけているのである。

「ここのお歌はんに用があってな」

「まさか夜這いやおまへんやろな」
「背をかせ。踏み台になれ」
夜番は、すなおに踏み台になってくれた。源五郎を乗せながら、
「先生はん」と首をねじまげた。「薩摩や土州のさむらいが大阪に入って来よるというウワサだっせ。こら、えらい騒がしなるでえ。そうなったら、さむらいちゅうたら、この町内で先生はんただ一人や。あんばい、頼んまっせ」
「そうなったら、てんねんじねん流や」
「どないしまんねん」
「逃げるがな」
「えッ」
と云っているまに、源五郎は板塀のむこう側へ跳びおりてしまった。
暗い。庭の植込をわけて、灯のついている離屋の前へ出た。障子の内側へむかって、源五郎は、まず声をかけた。「ちょっと、お邪魔します。くれぐれも云うとくが、泥棒やないでえ」
「どなただす」
「みょうが斎久富源五郎だす。その声はお歌はんだすな。拙者をごぞんじやと聞き及び申

したので、遠慮のう、参上つかまつった」
「まあ」
障子をあけて、濡れ縁に立ったお歌は眼をみはった。泥棒やない、と断ってもらったところで、この時刻にこの風体では、ただの市民とはいえまい。が、じつは、お歌の姿をみて、源五郎のほうが内心驚いていた。灯りを背にうけて立っているお歌のすがたは、何かの化身かとまがうほど美しかったのである。
「お、お歌どのでござるな」
源五郎は息をのみつつ、永らく忘れていた武士のことばで、辛うじて声を押しだした。
「じ、じつは、夕方に藤兵衛はんが拙宅に訪ねられて、明日の一件をお話しなされたのや。そのとき、構えて惚れるな、と藤兵衛はんは申された。拙者も答えて、かまえて惚れまへんと云うたのやが。——し、しかしながら」そこまで云ってから、源五郎はついに絶句した。汗がぶつぶつと丸いひたいに吹き出ている。手拭で顔をぬぐってから、
「し、しかしながら、あとで藤兵衛どののその一言が気になり申したのや。かまえて惚れるなという一言、はたして守れるかどうかは、ことと次第にもよるでな。じつを申せば、拙者は、お歌はんという女性を知り申さなんだ。武士の言葉は金石のごとしと申すゆえ、まずその女性をみてから拙者の一言が守れるかどうかを、確かめたいという気になり申し

た。そういうわけだしてな。かかる次第で、ここに参上仕ったわけだす」

「へええ」

お歌は、露骨に顔をしかめた。なるほど、この男はお千賀のいうように頭がおかしい。容ぼうは山里育ちに似ず、存外まとまった目鼻だちをしているし、それに武士というのがお歌には新鮮でめずらしかったのだが、この人間ばなれのした非常識では、お話にならない。が、それでも、お歌には多少の好奇心が残っていた。はじめて自分を見て、その藤兵衛との約束を、守れそうかどうかということである。これはお歌の自尊心に関することだった。彼女はそのことを訊ねた。源五郎は渋団扇であおぐような手付をして、

「あいや」

と云った。お歌は、思わず失笑した。なんというぶざまな動作の男だろうと思った。源五郎は云う。「とうてい、はや、守れそうにござらぬ。武士の一言は金石のごとし。惚れては藤兵衛どのに違約する。ゆえに、明日は、拙者、参上つかまつらぬ」

「けっこうだす。そうときまったら、帰っとくなはれな」

「いや、もうすこし」

「なんのご用だすえ」

「いや他意はござらぬ。いまちっと、ながめさせてくださらぬか。どうやら、拙者は」

「お引きとりやす。そうでないと、人をよびますえ」

「そうかい」

源五郎はガッカリした様子で、しばらくお歌をながめていたが、やがて四ン這いになると、ゴソゴソと植込のむこうへ身を消していった。

「けったいな、剣術つかいはん」

お歌は部屋にもどると、こらえかねていたおかしみが、一時にみぞおちから突きあげて白いのどを膨脹させた。背をまげ、たたみの上に手をついて、クツクツわらった。やがて、蛇のようにあごをあげて、耳をすました。裏廊下をへだてて奥にねているお千賀に聴かれはしなかったかと思ったのである。お千賀は、お歌の子供のころからぎょうぎにうるさかった。――が、そのとき、笑いおさめてから、つと、瞬きをとめた。遠いかおりを嗅ぐような表情をしたのである。

（そうや。あの男のかっこう。……）

庭の繁みへ消えるときに、にょろにょろと、毛なみに脂づいたけものが胴をくねらせて隠れてゆくような格好を、あの男はした。それは奇妙なまなましさをもった印象だった。お歌はその印象がよみがえったとたんに、なぜか変に胸の鼓動が早くなり、顔に血がさしのぼった。うずくような気はずかしさを覚えた。なぜかはわからない。しかし、あの妙な

魅力をもった男と、二度と会ってはならないと思った。むすめの防禦本能というものであったろう。

高麗屋心斎

この話は、慶応三年の秋の暮ちかいころのことである。京は、大阪からわずか十三里北東方にすぎない。そこでは、勤皇倒幕の風雲がいよいよけわしく、京では会津中将支配の新選組が、壬生から堀川にうつり、さらに伏見奉行所に移駐して、毎日、ちまたでは剣戟殺戮のうわさがたえなかった。一方、内裏ではすでに、討幕の密勅を薩長芸の三藩にくだしたという。

全国を包んでいるこの騒然たる物情のなかで、大阪だけは別世界の観があった。鰻谷の町内では、この秋の紅葉狩は、摂津の箕面にしようか、それとも大和の竜田にしようかなどと、のんきな詮議に余念がなかった。たまにわけ知りな男が口を出して、

「竜田や箕面どころかい。京や田舎では、天朝はんにしようか公方はんにしようか、で、血まなこになっとるちゅうで」

「ほっとけ」

みんながわらった。侍の支配力のうすいこの土地では、さむらいのこわさがわからない。

「どうせ、さむらいのやるこっちゃ。やらしたれ。こっちは、天下の町人や。働いて儲けて、その金で春と秋に山遊びするのに、どこの国から苦情が出ようかい」

「侍と云や、藤兵衛長屋のみょうが斎はんもたしか侍やったなあ。何しとるねやろ、こんな侍の書入れどきに」

「きょうび、ぼやぼやせんと、京か江戸で走りまわったら、ええ日当出るのとちがうか」

「出るちゅうこっちゃ」

「ほんまに、なにさらしとるねやろ」

そのみょうが斎源五郎は、あいかわらず犬猫になる修練に余念がなかった。

「おれの人生には目的がない」

源五郎は、はっきり云いきっていた。主取りをねらっているわけでもなく、また剣名をあげて流行道場を開こうというつもりでもなかった。「それなら、もともと、北辰一刀流とか小野派一刀流とかいうような銘柄の通った流儀をなろうて、免許の一つもとるがな」

「ほなら、なんのためや」

店子の行末を案じて、藤兵衛などがときどき膝詰の説教をすることがある。

「我流の武術を練っているのはな。目的はなんでもない。十津川の山奥にいたとき、犬猫

猿のたぐいにまで人間がさがれば、だれでも剣術の達人になれると考えた自分の思いつきが、はたしてほんまかどうか、自分でたしかめてみたいだけのこッちゃ。それだけのこッちゃ」

「それを、よし確めえたところで、なにになる。そんなもんでは飯がくえるかい」

「飯は日に三度、椀に二杯ずつあればええ。それ以上の飯をほしがろうとするさかい、人間のなやみや争いが生じてくる。世の中ぜんぶが犬猫の境涯におちてしまえば、気楽なもんや。極楽やがな」

「世の中の人みんなにその犬猫をすすめて歩くつもりか」

「人にすすめるほどの親切はないわい。自分だけ、ひっそり、犬猫になれればええと思うている」

「弟子もなく、師匠もなく、か」

「師匠はあるがな。犬と猫や」

と、手がつけられなかった。そのくせ、手許に犬猫を飼い寄せておくという所がない。それどころか、他所の犬猫が近よってくると、血相を変えて追っぱらった。藤兵衛がその矛盾をなじると、

「わからん男やな。現実の犬猫が、なんの剣術の役にたつか。ただの薄汚ない四ツ足やないか。ああいう物を愛おしむのは、我利我利慾のつよい人間のするこッちゃ。わしのいう犬猫とは現実の犬猫やない。わしの胸の中に棲んでいる映像の犬猫や」

「そんな物が棲んでるのか。けったいな男やな」

「かまわんといてくれ」

相変らず、土間で昼寝をしている。そのころ、大阪の剣客といえば、天満に道場をもって大阪城代支配下の与力同心に剣術を教えていた北辰一刀流の宮部源蔵、讃州藩のお蔵役人で心貫流の古法に通暁した瀬川安之助、高麗橋のはり医の出身で、高津神社裏に隠棲している高麗屋心斎という老人の三人が、剣の実力をうたわれていた。ところが、これらの三剣客よりも、鰻谷の藤兵衛長屋にすむみょうが斎のほうが段ちがいに強いという噂さが、ほんの一部ながら、根強く伝えられていた。

「ふん。根も葉もないこッちゃ」

源五郎自身、笑って信じない。第一、この男は他人と勝負をしたことがなかったから、比較の根拠があるはずがなかった。たぶん、町人たちのあいだで、源五郎の神秘的な生活が尾ヒレをつけて拡まったために出来たうわさだろうと思われた。しかし、くらべられた天満道場の宮部源蔵はすてておけなかった。自分より強い者がいるというのは、たとえうわさにしろ、商売のうえから面白い話ではない。源五郎がお歌と会ったほんの数日のちの

ことだ、弟子の一人を長屋へ訪ねさせて、

「いっぺん、天満の道場へ顔みせとくなはれ。一手教えていただきたいと、先生も云うたはります」

と云わせた。源五郎は、鼻の先でことわった。「拙者と勝負？　あほうな。わしは勝負をするために武術を練ってるのやない。犬猫になるためにやってるンやで」

ところが、そのあとですぐ、高津神社裏の高麗屋心斎という老剣客が訪ねてきているのである。隠居の閑つぶしで、鰻谷のみょうが斎という男に多少の興味をもったのだろう。

この老人は、根が町人あがりだから刀はさしていない。宗匠頭巾に茶人羽織をはおり、根竹の杖をついて、どこからみても往年畿内で名をなした剣客とはみえなかった。

東の空には城がみえる。城のある上町台から、ゆるやかに秋の風が吹きおろしていた。老人は風に足を運ばせるような歩き方でゆっくり平八土橋をわたり、鰻谷の町に入った。藤兵衛長屋の突きあたりに、源五郎の家がある。格子の前に立つと、老人は声もかけず、ふわりと格子をあげて戸をひらいた。

土間一ぱいに源五郎が寝ていた。老人はだまって枕もとにまわり、息を吐きかける距離にまで眼をちかづけて、源五郎の顔をのぞきこんだ。

顔が、薄眼をひらいて、名人をみた。が、すぐ興なさそうに眼をとじた。老人はその顔に手を触れた。西瓜の品定めでもするようにぴちゃぴちゃと叩くと、顔がゆらゆらと揺れた。顔だけが、別の物体のようだった。老人は右拳を上げ、思いきって頬を打った。ぐじゃりと鈍い音がした。反応がなかった。こんどは、背をむけて、顔の上で尻をまくった。静かに音が流れて、かるい臭いが顔の上に吹きかかった。が、顔は変化も起さない。老人は、ふと思いついて、自分のふところを探った。むろん冗談だが、短刀で、この顔だけを切り離してみたらどうだろうかと思ったのだ。ところが、その老人の意中をとっさに察して、ヒョイと顔が笑った。

「わるい料簡や」

「えッ」

老人は、うしろから袈裟がけに斬られたように息をつめた。おそらく、この男と刀槍をとっての立合いをしても一刀で斬り倒されるだろうと思った。

「負けた」

「何がや」

「とても、わたえらの及ぶところではない。せやけど、あんたはえらいことをやらはったなあ。鹿島香取以来の剣の道を、畜生の世界にまで引きさげた」

「畜生が、人より卑いかいな」と、みょうが斎は歯をむいて笑い、「拙者はな。みんなが

御幣をかついで勿体ぶっている剣術というもんの神主づらを剝いでみたかっただけや。ばかげた漢語をならべてコケオドシをやっているが、しょせんは、剣の道とは犬猫になる法にすぎまい。——ところで、貴方さんはどなたや」

「高津神社裏に住む小野派一刀流の高麗屋心斎だす」

「ああ、さよか」

興もなさそうに、源五郎はごろりとむこうへ寝返りをうった。ふん、神主剣術かい、と云いたげな顔だった。

「ひと言、疑問をたずねますが」

高麗屋心斎は、いんぎんに云った。「あなたはんは、こうして犬猫になりきる修法をなされていて、行末いかがなさるおつもりでござりますいな」

「藤兵衛とおなじことを云いよる。行末行末と、俗人間というもんは、判でついたように同じ疑問をもつらしいな」

「後学のために伺いたいのでござります。いったい、人生というものをいかがお考えだす」

「酔生夢死やな」

「理想は」

「酔生夢死するこっちゃ。理想というもんを持ちたがるさかい、人間世界が住み辛うなる。もう一眠りするから、帰ってんか」

「うッ」

もう一度試してみたいと思ったのだろう。高麗屋心斎は、手にもった根竹の杖を源五郎の顔めがけて打ちおろした。その拍子に、源五郎の顔は、眼をつぶりながら、わずかに横へ移動した。杖はむなしく土を打つ。あわてた心斎は、こんどは杖をすくいあげるようにして、源五郎の右横面を打った。顔はヒョイと下へさがる。杖が空へ跳ね、その跳ねた位置から、心斎は力まかせに振りおろした。

「ほい」

口をぽかんと開いたのは、心斎である。根竹の杖が、手もとからみごとに切り落されていた。いつのまにか、源五郎は寝たまま、反射的に脇差を抜いていたのだ。

「おそれ入った」

「悪戯せんと、早う帰りさらさんかい」

「へ、へえ」

心斎は遁げるようにして格子の外へ出ると、汗が一時に襦袢をぬらした。

「おそろしい奴ッちゃ」

この高麗屋心斎の敗北が、多少潤色されてたちまち大阪中にひろまり、みょうが斎久富源五郎の名が一時に高まった。もっともそこは土地柄で、剣客の名としてよりも、むしろ通力をもつ生神様として喧伝された傾向がなくもない。

「猫神はんやそうやでえ」

そういって、わざわざ格子をあけて賽銭をほうりこんでゆく者もある。遠く河内、大和あたりから聞き伝えてきて、弟子にしてくれと頼みにくる者もあったが、源五郎はいちいちニベもなく断った。

「やくたいもない。犬猫になるのに、師匠も弟子も要るか。お前の家にも土間ぐらいはあるやろ。そこで寝てたらええ」

「それだけでは、貴方さんみたいに強うなりまへんやろ」

「天秤棒でも持ち出して、夜通し、走りながら振りまわれ。それと、浮世の望みをぜんぶ断つこッちゃな」

「それでも、犬猫にならられへんかったら、どないしまほ」

「もとの人間になるだけのこッちゃ」

これでは取りつくシマもなかった。ところが、このみょうが斎の盛名一時にあがるのをみて、胸をときめかした者がある。米智のお歌である。

「わたしも、犬猫になりたい」

「嬢はん！」

お千賀が仰天してしまった。

「米智の嬢はんともあろうお方が、なんという情ないことを云わはります」

「そやけど、みょうが斎はんは有名やもん」

お歌は、急にあどけない顔をした。こういうときには、つとめてあどけない顔をするという娘の智恵が、十九歳のお歌には十分に備わっているのである。お千賀は、「なるほど」と笑って、みごとにだまされてしまった。

「みょうが斎はんは、急に有名にならはりましたさかいなあ。もう大阪三郷で知らん者はおまへんですやろ」

有名人にあこがれるのは、娘の通有性だ。犬猫になりたいというのも、べつに大した意味ではなく、役者に騒ぐような気持で、みょうが斎のことを云ったのか、と思ってホッとした。ところが、そういうお千賀の才量とはまったくちがう世界のことを、お歌は顔を赤らめながら考えていた。

（ほんまに、みょうが斎はんは、けったいなん……）

あの庭の繁みにごそごそと隠れていったときのふしぎな動作を、あざやかな記憶の中で

思いうかべているのである。しなやかで、いなせで、生命の律動そのもののような生まなましさがあった。お歌は、それを思いだすたびに、乳房の下で動悸がうつ。

「そうや。みょうが斎はんと藤兵衛はんの家で会うという話、あれは立ち消えたままになってましたけど、もう一ぺん起しまほか。こうなったら、わたえも楽しみや。さっそく、藤兵衛はんの都合を伺って来まッさ」

「それどころかい」

やってきたお千賀へ、話が済むなり、がなりたてたのは藤兵衛である。

「女どもの遊びに、家主の禿頭が出張っている時世時節かい。お千賀はん、あんたがいくら女でも、おとつい、薩摩のだんぶくろ侍が大阪城に入ってきよったのを、知ってるやろ」

「知ってまンがな」

「お城の与力はんや同心はんは、ポカンと口を開けて、薩摩が入って来よるのを見迎えてたそうや。もっともそれはまだ可愛らしいほうで、同心町あたりでは夜逃げをする侍もいたという。それはええ。どうせ大阪の侍というのは、そんなもんや。ええがな。逃がしたりいな。ところがやな。きのう、越前の三岡八郎（のちに由利公正と改名。五カ条の御誓文を起草した人物）という若僧が、大阪城の大広間に、大阪中の大町人を集めよった。あんたとこの米子屋智兵衛はんも行かはった。鴻池善右衛門はんや住友吉左衛門はんらも、むろん頭株でまじったはる。そこで、頭から狐憑のお婆はんがご託宣のべるみたいに、その若僧が、なにをぬかしたと思う」

「さあ、知りまへんな」

「二百万両の金を、頭割りで寄進せえ、ちゅうねや。えらいこッちゃ。薩摩や長州やいうたところで、たかが田舎大名やさかいな、これから東海道を攻めのぼって、三百年天下を治めた公方はんを討つとなると、先立つものはまず金や。その金が目当で、官軍の兵隊が五千もどっと大阪城へ入りよった。つまり、金戦をしに来よったわけや」

「それで、旦那衆はどうしやはりました」

「仕様ないがな。十日のうちに蔵から出して大阪城へ運ぶということになった」

「ほならなにも、藤兵衛はんが旦那衆の疝気を病んで、女の遊びに出張れるか、などと騒がはること、ないやおまへんか」

「それがちがう。薩摩の奴らが、ついでに妙な智恵をしぼりよった。金を捲きあげただけでは足りん。もっと、おどしあげな、あかん、と思いよった。むりもない。大阪の人間は先祖代々侍をバカにしとるさかいな。また、バカにされるような侍ばかり居よったわ。ところが、薩摩らは、そんな蔵屋敷の役人や大阪同心とはちィと違うぞ、というところを、

ピシリと見せしめたいと思うたらしい。そこで、城詰の無聊を晴らすため、てら、なんてら名目を付けよって、天満宮の境内で薩摩と大阪居付の武芸自慢の者との仕合を興行さらすことになった。それがお前、明後日や。えらいこッちゃ。町人の棲家の大阪では、ろくな武芸者は居よらへん。宮部はんや瀬川はんやちゅうたかて、武芸の本場の江戸へ持って行きゃ、三文の値打もないがな。そこで、みょうが斎びいきの高津神社裏の高麗屋心斎はんが、ぜひあの男を出せていう推挙をしやはったそうや」

「へえ、そらまた、晴れがましいこッちゃな」

「ところが、お前はん、こッちの大将は犬猫や。そんな仕合に出られるかい、とわしが長屋へ行っても起きもしくさらん。やっと、町内から五両出すということで承知させた。あの男、あれでなかなか勘定高いところがある。小判で五枚、枕許に置いてやったら、猫に小判やな、と皮肉そうに笑いおった」

「ほなら、話はもう済んだわけだンな」

「仕合は済んでへんがな。負けよったら、大阪の恥ならまだええが、鰻谷の家主の恥になるのが、わしは忍べんのや」

天満仕合

仕合は、午前九時から始まることになっていた。天満宮の境内は、すでに山崎の青竹で竹矢来が結ばれている。空模様には申し分なかったが、大阪の初冬にはめずらしく打水の凍てるほどの寒い日だったという。

仕合が始まってから、北風が刺すように吹きはじめた。大阪方剣士は十人、薩摩藩士が十人。ところが、大阪方の出場者は、南側に立つ。風をまともに受けるわけである。そのせいだけでもあるまいが、薩摩方の末座の男に、大阪方が二人、またたく間に叩き伏せられた。剣士のなかで、ぼやく者があった。

「えらい損や。向い風のうえに、こッちゃ、ハダカやがな」

ハダカやがな、というのは、防具をつけていないという意味である。当時、大阪で盛行していた北辰一刀流をはじめ諸流派では、練習も仕合も、当然防具をつける。その点はこんにちの剣道と、ほぼかわらない。ところが、薩摩の自源流というのは、素面素籠手を眼目としていた。薩摩の人瀬戸口備前守が祖で、弱年のころ、自源坊という僧侶から極意をさずけられたところから流名をつけたが、この流儀は癖が多いために薩摩以外には普

及しなかった。まず、立合練習を好まない。練習はもっぱら立木をたてて、独りで木刀で叩く。剣のさばきよりも斬撃の速度に訓練の重点を置き、立ち合えば二の太刀を考えず、相討を覚悟で必殺の斬を加える。そういう豪快果断な流風が、薩摩人の気組みに適合していたのだろう。

だからきょうの仕合も、薩摩側は大阪方に防具をつけさせなかった。大阪方はおどろいたが、「まあええ、長いもんには巻かれろや」と、袋竹刀一本で仕合に立った。ところが平素防具に馴れている者が裸で立ち合うと、予想以上の恐怖が先立つことがわかった。真剣仕合のように固くなってしまい、その隙にポカリとやられる。昏倒する者。骨折する者が数人も出た。

「次」

審判の薩摩藩士が、じろりと、大阪側の席を見た。六人目が席を立った。ところが、そのときになって、ようやく大阪側の席がざわめきだした。

「みょうが斎めがまだ来よれへんがな」

「あいつ、怖わなって、逃げよったンとちがうか」

「いや、来る」と云ったのは、付添人として大阪方剣士の席にいた高麗屋心斎である。幾分青ざめながら「きっと来まりしゃろ。あの人には、家主の藤兵衛はんから、五両渡っているはずだッさかいな」

じつをいえば、その当日、午前七時ごろになって、源五郎はお歌の来訪を受けていたのである。

「みょうが斎はん、せっかく大事な仕合に出やはるちゅうので、火でも斫らして貰おうと思うて来ました」

「べつに大事でもあらへん」

源五郎は、薄目をあけながら、お歌を見て云った。言葉つきこそ素っ気ないが、お歌の突然の来訪をよろこんでいるらしいことは、その眼付でわかった。発情期の雄栗鼠のような眼をしていた。お歌はその眼をみると、からだの内側まで赤くなるような血の騒ぎをおぼえた。いつとは知れず、吸いこまれるように、源五郎の横にすわった。匂いがする。土の上に臥ている源五郎の裸形から、異様なにおいが昇りたっているようであったが、それがどういう匂いか、判断がつきかねているうちに、お歌は、自分の中から何かが抜け出てゆくようなくるめきを覚えた。人形をした魂のようであったとも思える。抜け出たあとに、お歌が閉じている瞼のうちが薔薇色の光で満ちた。お歌はこの土の上に臥し、裾を白く割ってしまっている自分に気付かない。すでに、人形の魂が虚空にのぼってしまったからであろう。源五郎の手がのびた。小さな戦慄が走って、土に吸われた。はげしい歓喜が内臓

を押しあげた。お歌は源五郎に抱かれているのか、天地の気に抱かれているのか、それさえも分明でなかった。

「流儀といえば」

源五郎は、かすかに、独りごとのように呟いた。「これも流儀のうちになる。仕合といえば、仕合はすでに始まっておる」

「みょうが斎はん」

お歌の声ではない。呼びかけたのは、格子をあけて覗きこんでいる藤兵衛であった。眼をつぶって、懸命に衝撃をこらえている風情だった。藤兵衛は、この光景を驚くべきでないと思った。みょうが斎の剣名があがるにつれて、藤兵衛も彼の犬猫式の自然流にいくぶん影響されるようになっていた。いいとは思わなかったが、かといって積極的に妨害する自信がなかったのだ。

「あの、仕合がはじまってまッせ」

「ああ」

源五郎は、気のない返事をした。

「えらい敗け戦さや」

「わしも大てい負けるやろ。仕合みたいな、したことないさかいな」

「頼ンないお人や」

「いつまで見ている。外へ出え」

源五郎はお歌から離れると、座敷へかけのぼって、身支度をととのえた。木綿の紋服に袴をつけて、殊勝にも武士の装束に戻った。相手が気の荒い薩摩人だから、それ相当の容儀だけは整えるつもりだろう。この男にも、その程度の才覚はあるらしかった。

刀は帯びず、袋竹刀を一本持った。かまちから跳びおりて、格子をあけようとすると、

「あのう……」

お歌が恨めしそうな視線をまっすぐに射あてて、土間にすわっていた。振り返って源五郎は、ああまだ居たのか、という顔付をした。一瞬前のことは、忘れるという精神の仕組みになっているらしい。お歌は、あらためて源五郎に見られてから、急に膝の乱れに気付いて前を掻きあわし、真赤になってうつむいた。

「お歌どの」

「はい」

「棄てはせぬ」

源五郎は路上にとびだし、北へむかって一文字に走った。

「来た」

大阪方のひとりが、ふりむいた。鳥居をくぐって石畳の参道を吠えたてるようにして、源五郎が走ってくる。右手に持った竹刀が、時には風を突き、時には虚空に複雑な円をえがきながら、舞い走っていた。

矢来の中では、大阪方の九番目の剣士宮部源蔵が、逆胴を入れられて、背をまげたときである。薩摩方は、二人倒されて、まだ三番目が立っているにすぎない。

「あれが、みょうが斎という男か」

薩摩藩士の席が、一様に矢来を駈けこんでくる源五郎を見て、ふと、可笑しみを堪えた。

「まさか、狂人ではあるまい」

「あっ」

矢来に駈け入るなり、審判の合図も待たず、名乗りもせず、やにわに六尺ばかり跳ねあがったかと思うと、宮部を倒して所定の位置に戻ろうとしていた薩摩方の三番目の男の頭上へ、怪鳥のように襲いかかってきた。

ゆらい、流儀剣術には、型がある。双方型を心得て、それを原則に変化させてこそ剣術の仕合というものは成立するのだが、源五郎にははじめから型がなかった。将棋でいえば、銀が突如として飛車になったり、歩がものもいわずに香に化するようなものである。相手が思わず戸惑った瞬間、源五郎の竹刀は脳天で砕け、衝撃が肛門にまで突きぬけた。昏

倒するのを、薩摩方の世話人が抱きおこして、控席まで連れ去った。入れかわって、赤熊をかぶった薩摩方の高級将校らしい男が出てきて、

「おはん、帰れ」

と、みょうが斎の肩を叩いた。含み笑いをしながら、「大阪は商人の都じゃから、むりもない。仕合の作法どころか、剣術も知らんらしい。無智に免じて、無礼はとがめまい。早う帰れ」

内心は、薩摩方は舌を捲いたのである。こんな無茶苦茶な剣術が世に存在するとは思ってもみなかったし、しかもその軽捷さは人とも思えない。剣客には、素人ほどこわいものはないのだ。気の利いた素人が、めちゃくちゃに天秤棒を振りまわせば、よほど熟達の者でも、容易に応酬できるものではない。ふつうは、疲れを待って打ち込むよりほかにないのだが、このみょうが斎という男は、彼なりに力の使い方というものを心得ているらしく、ケロリとして竹刀をぶらさげている。こういう手合と大真面目に仕合して、薩摩が勝ったところでどうということはなし、負ければ大阪の市政上かんばしくあるまい。そこを、赤熊の男は賢く考えたのだろう。

「帰れ。あとで酒肴でも届けておいてやる」

「そうか」

みょうが斎は、仕合なんぞどっちでもいいんだという顔付で、矢来の門のほうへ歩きはじめた。薩摩の控席の前を通る。その瞬間、なにを思ったのか、薩摩方の四番目の男が席を立つなり、猛烈な突きを入れてきた。

「阿呆かい」

みょうが斎は、猫のように跳んでそこに居なかった。たた、と、男の体は東へ流れた。ところが、みょうが斎は男を見捨てた。地上へ降りたつよりも早く、みょうが斎の竹刀は大きく青空を斫って、なんと、席にすわっている五番目の男の頭を、西瓜切りに叩きのめしていたのである。が、薩摩勢が総立ちになったときは、みょうが斎の踝（くるぶし）は超人的に跳ねて、一息に矢来の外へとび去っていた。

「まったく」

あとで薩摩方は顔を見合わせて苦笑した。

「大阪という町は広い。妙な男が棲んでおるものじゃな」努めて動揺をかくしながら、赤熊の男が、矢来の真中に立って、

「狂人が舞いこんだによって、仕合はこれで中止する。大阪の諸君もご苦労でござった」

薩摩方にすれば、みょうが斎を狂人あつかいにするしか、この場の混乱が収拾できなかったのだろう。

これが、大阪の明治以降の伝説になっている「天満仕合」のてんまつである。同時に、みょうが斎という大阪剣客が、生涯で出場したたった一度の仕合でもあった。

俚謡（りよう）では「よねちのいとはん蔵のなか」という。おそらく米子屋智兵衛は、みょうが斎との不始末を怒って、お歌を蔵の中に監禁したものに相違ない。が、このほうの問題もほどなく解決した。藤兵衛が、あいだに立って奔走したのだろう。米子屋と、十津川郷士久富家との間に、正式に婚姻が成立している。

源五郎、お歌の夫婦は、その後大阪を去って、久富家のある奈良県吉野郡（よしの）十津川村（とつかわむら）折立（おりたて）という所で、幸福に世を終えた。近頃はその付近から、二十度ばかりの鉱泉が湧きはじめているそうである。

※大阪の地名は明治以前、大坂が使われていました。この作品では、雑誌発表時のまま全て大阪としました。
（編集部）

庄兵衛稲荷

一

きままじんという。気儘人と書くらしい。大げさにいえば、町に住んでいる仙人ということになるだろう。

累代、大坂のまちには、そういう人間の伝統があって、文久のころの大坂鰻谷の気儘人といえば、猿霞堂庄兵衛のことを指した。

「ええきままじんやなあ」

庄兵衛の家のまえを通る者は、だれでもいう。庄兵衛宅は仕舞うた屋ではあったが、大坂の町家の通例として、店の間がある。道わきから目を細めて薄暗い土間を見すかせば、昼からふとんをのべて、ゆったりねている庄兵衛の姿がみえたものであった。

「ああ、結構人や」

町の者は、溜息がでた。

町全体が、身をすりへらして金を稼ぐことに熱中している土地柄だけに、稼ぎを放棄して、世を茶にして暮らしている人物が、過当なほど大きくみえたのであろう。

といって、貧乏ではこの条件にはあたらない。貧乏は、それ自体が緩慢なる破廉恥行為

とみるこの土地では、いくら仙人でも金のないのは単なる乞食にすぎない。遊んでいるくせになんとなく金があり、そのうえ人生の機微に通じ、遊芸一般の心得があり、しかも、好色の道に長けているということが、気儘人の必須条件であった。

自然、それほどの才能をもちながら遊んでいるということで、気儘人はどこの町内でも特別のあつかいをうけていた。

たとえば、庄兵衛の場合、おなじ町内の配膳屋の下女でお稲というすこし智恵のおくれた子を手なずけて、通い妾同然にしているのをみても、

「ああ、あのお方なら仕様ない。お稲のあほうも仕合わせやろ」

当の配膳屋の主人でさえ、大目でみてしまう。節季などで町内がわきたっているときは庄兵衛だけは閑だから、かえって依怙地になるのか真昼からお稲を引き入れているのだが、町の者はけっして悪意にはとらなかった。

「まるで福の神やな。わいらもいっぺん、あんな節季ィしてみたいわい」

らちもなく感心してくれるのである。

この庄兵衛をまつるホコラが、だれがいつの時代にたてたのか、いまでも大阪市天王寺区寺町の浄土宗銀山寺の境内にある。

気儘稲荷というのだが、いつのほどか安産の利益があるというので、戦前はほそぼそな

がら参詣人が絶えなかった。なぜ庄兵衛が安産稲荷なのか、ちょっとわからない。

なるほど、祭神は気儘人らしく女には目のない人物ではあったが、生涯独身を通し、子供ものこしていないから、安産の利益とは無縁のようである。

もっとも猿霞堂庄兵衛は、町内の者の色事の相談に乗ることが多かった。ついには聞き伝えて、遠く天王寺村や平野郷あたりからでも相談にきた。大ていは、女に惚れた、いつ手を出したものかなどという愚にもつかぬ類いの相談なのだが、平素は瞼をろくに開けたこともないこの男が、こういう相談になると、きまって低い鼻をこすりあげて眼をさまし、当節流行の尊攘論でも論ずるような気魄で、

「まだまだ」

と気合をかけた。

「せやけど、先さんはわてが手エ握っても、黙ってうつむいたはったンでごわりまッせ」

「あほかいな。がまんや、がまんや」

それが口癖だったらしい。色事はすべて念を入れ、手数をかけ、順を踏んで丹念に仕上げてゆくのが猿霞堂庄兵衛の手口で、その経過を楽しめない男に色事の資格はない、というのが持説であった。そのかわり、かれの指導をうけた色事はほとんど成就する。合歓へのよき案内者であったかれの事歴が、安産の利益へ連想を移していったのかもしれない。

ところで、猿霞堂庄兵衛は、もと武士であった。武士どころではない。摂津地侍の宗家ともいうべき渡辺党の系譜に属しているから、先祖は頼光の四天王の一人として大江山の鬼を退治た渡辺綱ということになるだろう。渡辺の地侍は、大坂の発展とともに大地主になり、同苗数十家が大いに栄えていったが、庄兵衛はその一軒から出て、分家した。分家するとき、両親が天満の同心株を買ってくれて、東町奉行所支配下の川同心になった。川同心というのは、大坂市内の河川にうかぶ六千艘をこえる舟の監督と百八十六橋の管理と大小の河川の浚渫を扱う。

ところが、在勤二年目で廃めた。

「なんで、廃めはったん？」

お稲は訊いてみたことがあった。庄兵衛は、お稲の、小娘にしては熟れすぎている腰をゆらゆらと膝のうえで賞でながら、

「尻が重とうてな」

といった。町ものだが、このひと言は、こんにちでも残っている。

「おいどが？」

「尻に刀をへばりつけて歩かんならんのでな」

そんなことで、折角本家が買ってくれた十五石三人扶持の同心の身分を、心斎橋の小間物問屋の次男坊に転売してしまった。もともと大坂では、商家で能なし息子が出来た場合、よくよくこの様子では家業がたつまいと見きわめると、

「侍にでもするか」

という。侍はその程度の位置にしか見られていなかったのだろう。早速、公事師にたのむ。公事師というのは、大坂諸役人に顔のきくいわば代言人と周旋屋を併わせたような職業で、売りに出ている同心株をさがすのに事はかかない。庄兵衛も公事師を通じて売った。小間物問屋の付け値が三百両、庄兵衛の付け値が四百両、結局ナカをとって三百五十両で手をうち、さっそく役所に隠居届と養子縁組届をだして、天満同心町の同心長屋を立ちのいた。立ちのく際に公事師との間に、小さないざこざがあった。

「貴方さん、その紋服」

と庄兵衛の袖を、しつこくつかまえて、

「三百五十両は、中身だけやおまへん、ふるたい其の値エだッせ」

「ふるたい？」

「紋服と大小やがな」

「そらあかん」

と、庄兵衛は紋服をぬがそうとする公事師と必死にあらそったが、結局丸腰にされてし

まい、長襦袢一枚で同心長屋を出た。

気儘人になったのは、それからだったという。しかし、鰻谷の町内に伝わる口碑では、この間の庄兵衛の人間像をさらに鮮明にしている。渡辺庄兵衛というのは、北辰一刀流の剣客であったというのである。天満の藤槇道場で免許をうけ、一方緒方塾で蘭学をまなんで、青春のころはそのどちらも出色の才をうたわれた時期があった。

なるほどそのほうが、気儘人らしくていい。由来、気儘人というのは、能力があってしかも世を捨てて市井で怠けているという者への尊称だからだ。

話を本題へいそごう。じつをいえば、気儘人猿霞堂庄兵衛が、文久三年八月、こともあろうに大和高取城の蔭軍師になり、来襲した天誅組の窮兵千余人をみごとに撃退したという、この種の人間にしてはふしぎな話が鰻谷の町内にのこっているのである。

二

このての顔を、土地の者は「三味線の胴」という。角ばって平たく、無用の凹凸にとぼしい。脚がみじかいせいか、猿霞堂庄兵衛は、上背のないわりに坐るとズシリと大きくみえた。歳は、お稲が出入りしていたころだから、まだ五十は越えていなかったろう。そうしたある日、四角い顔をかしげて、

「お稲、またおなごがでけそうやでえ」

「へい」

お稲はまだ十八だし、あまり利口ではないから、表情がにぶい。やっと小さな唇をあけて、

「ほたら、わたえは、もう来んでもよろしおまンのか」

と云った。鈍いというより、一緒に寝てさえおれば、小遣いをくれたり、着物を買ってくれたりするおじさんという程度にしか猿霞堂を考えていなかったのだろう。むろん庄兵衛はお稲の親元の配膳屋には十分の手当はしているから、親元のほうでもお稲の猿霞堂通いをむしろよろこびさえしている。あほうが金になれば、これ以上のことはないからだ。

「お前は、別ッちゃ」

「さよか」

お稲はべつにうれしそうな顔もしない。

「お前だけはな」

「へい」

「別ッちゃ」

「さよか」

ゆらゆらと咽喉の奥で唄でもうめきあっているようなお稲とのふんいきが、猿霞堂庄兵衛にはこよなく楽しいらしい。猿霞堂は気儘人になって以来、数多くの色事を手がけてきたが、窮極のところ、女はあほうにかぎるという心境がひらけた。淫事はつづまるところ、孤独なものだ。双方が合一して果たすというものではなく、双方のそれぞれが、自分のなかの欲念を、自分の中の機能で勝手に晴らしているにすぎない、と猿霞堂は悟った。この悟境をおしすすめていけば、相手の人間感情はむしろ無用のもので、相手があほうであればあるほど、より無雑純一な悦楽がうまれる、というのが猿霞堂庄兵衛がお稲を愛するゆえんのようなのである。

もっとも、かれがあほうのみを心掛けているのでないことは、色事は経過を楽しめという言葉でも知られる。あほうを賞でる反面、かれの枯れることのない異性への興味が、いつもねばねばと未知にむかって拡げられていたことは、こんどの相手のばあいでもわかることだった。相手は、只者ではなかった。庄兵衛は、いままで、町娘から芸妓、下女、あほうにいたるまでたいていの種類の女は知ったつもりだが、この種の相手は、まずためしがない。

「ご寮人さん……」

その女の大坂見物の供をして歩いたとき、庄兵衛は、つい適当な称びかたを思いつかぬままに、そうよんだ。ご寮人さんではたしかにおかしい。

女は、二万五千石の小藩とはいえ、大和高取藩の国家老駒原監物の妻女なのである。厳密には、夫の監物が先年死去し、いまではひとり息子の新太郎が十八歳で家老職をついでいるから、国家老の若い刀自といってもいい。敬称の少ない大坂言葉のなかに育った庄兵衛には、どうもこういう階層の女に話しかけるのはにがてだった。ところがお婦以という名のその女は、

「なあに」

と、無造作にこちらをむいてくれたのである。ちょうど、土佐堀川にかかる栴檀ノ木橋を南へ渡ろうとしているときだった。六月の川風が東からふいていた。猿霞堂庄兵衛にとってはお婦以とはじめて会った日だったが、この瞬間こそ、かれは足もとにのめりこんで橋板を掻きむしりたいほどの衝動にかられた。女に惚れる瞬間というものは、時にはこれほどの衝撃をともなうものだとは、不覚にもこの年になるまで知らなかった。いま栴檀ノ木橋に立っているのは、鰻谷の気儘人猿霞堂ではなく、まるで初々しい少年のような庄兵衛が、凹凸にとぼしい顔に辱らいをさえ含んで風の中に佇立していた。

「かまわないのよ、ご寮人さんといってもらっても。船場の商家のきれいなご内儀のよう

で、うれしいわ」

お婦以は江戸育ちである。定府の重役の家にうまれ、国許の駒原家に嫁してきた。そのままどの土地にも出ないから、育った江戸の娘言葉のほかは使えない。三十五とはいえ、小柄で眼に張りのあるお婦以は、そういう舌音のあまい言葉を使っても不自然でない若やぎがあった。

「ああ」

庄兵衛は、いまにもお婦以の足もとに倒れこんで、小さな白い足袋を撫でさすりたいような気持を、やっとの思いでおさえていた。

「猿霞堂さん」

「へえ」

「やっぱり、あなたもお兄さんと同じご商売？」

お婦以も、この奇妙な男に関心をもったらしい。兄の分銅摂津屋庄左衛門は、この土佐堀川の川筋にある高取藩蔵屋敷に出入りして、買物方をつとめている。買物方というのは、銀主、蔵元といった商人ではなく、蔵屋敷に入用の材木、武具、馬具、被服から筆一本にいたるまで一さいの物品を調達する特約商人で、庄左衛門は郷士の身分ながら両刀は差さず、髷も町人風に結って数藩の蔵屋敷に出入りし、相当な利潤をあげていた。その兄

が、得意先の高取藩蔵屋敷の御殿（藩主が参観交代の途次や、藩の重役が出張したときなどに使う建物）に泊っているお婦以の大坂見物の案内役を、庄兵衛に云いつけたのである。お婦以はよろこんで、供などは連れずに行きましょう、と気軽に連れだって出たのが、さきほどの栴檀ノ木橋だったのだ。

「へえ、わたえは」

「なんでしょうね」

お婦以は、庄兵衛をみた。儒者髷をゆっているくせに紋服もきず町人風の身腰の人体が、第一にふしぎだったらしい。

「気儘人だす」

「それ、あきんど？」

「いや」

「お武家？」

「なかなか」

「なんでしょうね」

「気儘人だす」

「ああきっと、学者なのね」

お婦以はわからないまま、そう決めてくれてから、つと足をとめ、あとからついてくる庄兵衛を手招きして、

「連れだって歩きましょう」

といった。お婦以にすれば、国許の窮屈な生活から解放されて、武士のほとんどいない大坂の自由なふんいきを存分に味わいたかったのだろう。肩をならべて歩きながら、

「ご夫婦のようね。猿霞堂さんのおかみさんに知られたら叱られるかもしれないけど」

「妻は居まへんのや」

「まあ、どうして？」

「気儘人だッさかいな」

お婦以はいよいよわからない、という顔をした。

「すると、お坊さまかしら。それにしてはおぐしはあるし。おかみさんが持てないなんて、変ね」

「へえ」

庄兵衛は、体を小さくした。坊主なら、とっくに女犯で遠島ものになっているだろう。

「まあ。にぎやか」

いつのまにか、芝居小屋のならぶ道頓堀の雑踏に足をふみ入れていた。ふと庄兵衛の袂が重くなった。気付くと、お婦以ははぐれぬ用心だろう懸命に袂の端を握りながらついてくるのである。ただそれだけで、庄兵衛ほどの男の膝頭が役にたたぬほどにふるえた。ふるえながらも庄兵衛は、

（わいは）

と思った。

（きっと、このご家老のご寮人はんと仲を遂げてみせるぞい）

庄兵衛は雑踏を幸い、袂のなかから、そっとお婦以の手を握った。お婦以はさすがにぴくりと手首をふるわせたが、すぐ、庄兵衛の掌のなかに自分を托して、力を抜いた。それがわかると、庄兵衛は指に力をこめ、そっと、右肩に寄りそっているお婦以のほうを盗み見た。お婦以の中高の形のいい横顔は、心もちあごをあげて芝居小屋の絵看板を見あげたまま、そしらぬふりをしていた。

（こら、いけるがな）

思わず慾がでて、もう一度つよく握ろうとしたとき、からくも自分を制した。

（まだまだ）

あせっては事がやぶれるのである。色事というものは、はじめはそっと真綿のくずを女の襟につける程度で満足すべきものだ。次第に相手の気づかぬままに真綿をふやしはじめ、

やがて女の体を頸すじから爪先までほたほたとつつみ終えた頃合いをみはからって、はじめて腰をあげねばならぬ。それが猿霞堂の芸であるはずであった。

が、猿霞堂にも不覚はあったのだ。

いまの場合が、そうであった。袂のつむぎの感覚を通してもなお温かく伝わってくるお婦以の掌のやわらかさから、かれは自分を引きはなす勇気がなかった。

いつのまにか、かれらは道頓堀界わいを一巡して、太左衛門橋の袂まで戻っていた。橋を渡ると宗右衛門町になる。まわりの人混みがようやく薄手になってきたとき、

「猿霞堂さん」

「へい」

「鋳掛けというんですてね」

「なんだす」

「ご夫婦などが、連れあっていることを」

「ようご存じでンな。土瓶の焼きつぎをする鋳掛け屋は、たいてい夫婦で荷台を曳きよりますンでな」

「もうその鋳掛けは」

お婦以はちらりと袖口をみて、

「やめましょうね。私はかまわないのよ、ちっとも。だけど、あの幟の下で人がわらってるわ」

「どうしたの」

猿霞堂は、声が出なかった。詫びるつもりだったのだろうが、あわてて引いた手を左手で懸命にもみながら、風に歯茎を乾かしたまま、茫然としていた。気儘人としての自負を、今日ほど根こそぎに喪失したことはなかったのだろう。

三

「あにはん、そら、ほんまかいな」

猿霞堂庄兵衛が、訪ねてきた兄の分銅摂津屋庄左衛門の羽織のひもをつかんだのは、文久三年八月二十日のことであった。鰻谷町内の口碑は、このあたりからようやく鮮明になってくるようである。

「うそ、いうても仕様あろかい」

分銅摂津屋は不快そうにうなずき、

「おかげで、掛けを倒されるかもしれんわいな」

「戦さか」

「なるやろ。なれば、大和諸藩は負けよるやろ。なにせ、尊攘浪人のほうは死にものぐるいで来よる。人数も、所在の百姓まで狩りあつめて千人を越しとるそうや」

天誅組のことである。

この奇妙な事件は、文久三年八月十三日、孝明天皇が、尊攘派の若い公卿や長州系の策士にかつがれて、大和行幸を宣言したことからはじまる。分銅摂津屋が弟の気儘人の家へ訪ねた日から、わずか六日前のことである。

天皇みずから肇国の聖地である畝傍山陵に詣で、陵前で攘夷断行の勅命を幕府にくだそうというのだが、幕府の要路者は肝をつぶした。政治に熟達しない青公卿や国際情勢に無智な志士たちとはちがい、世界の列強と戦う力が、この国に皆無であることを知っていたからである。

狂喜したのは、京大坂に流入してきている諸藩の脱藩浪士であった。国を憂えるのあまり藩を脱けて畿内へのぼってきたものの、さしあたって毎日することがない。悲歌慷慨をかさねているうちに、ねがってもない行動目標にぶつかったのが、この大和行幸だったということになるだろう。

だれから頼まれたわけでもないのに、天皇の大和行幸の露払いというので、行幸仰出のでた翌る八月十四日、松本奎堂、吉村寅太郎という人物たちが十九歳の公家中山侍従忠光を大将にいただいて、同志三十七名とともに京を出発した。

吉村寅太郎は、大坂心斎橋の骨董屋で買った黒革オドシの具足に、半月の前立をうった兜をかぶり、赤地錦の小袖に猩々緋の陣羽織をきこんで、京の方広寺に同志を集結させ、船を仕立てて泉州にくだり、堺に上陸した。近辺の旅館扇屋からとりよせた弁当で一同腹ごしらえをしたうえ、河内、大和へ押しだした。

所詮は雑軍だが、かれらに味方したのは当時の弱小藩の無智と日和見心理だろう。

河内狭山村に陣屋のある北条一万石の領内に入ると、藩の上下が動揺し、中央ではもう革命がおきたのかと錯覚する者もあり、家老某がとんできて丁重に挨拶をしたうえ、茶菓の接待などをして機嫌をとりむすんだ。

大和五条では、幕府の代官所を襲撃している。代官所には由来兵備というものはなく、代官鈴木源内のほかに事務をとる下僚が数人いたきりだったが、一同はやにわに乱入し、代官、手代、用人など四人を斬り殺し、たまたま居合わせた村の按摩までを惨殺した。鈴木源内は、代官としては存外土地の評判のよかった人物らしい。幕吏ながらひそかに勤皇の志をもっていたという。とはいえ、すでに集団ヒステリーともいうべき状態にあった天誅組一味にすれば、相手がどのような人物であれ、幕府の地方官を討って軍門の景気づけ

にすればよかったのであろう。

京を出たときは隊士三十数名だったものが、十津川郷士団の参加や農家からの徴用兵をふくめると、すでに五百名を越えようとしていた。むろん、田舎のことだから、この古具足をつけた連中こそ、革命政権の正規兵だと思っていたのにちがいない。

そうでないことが大和一円に知れ渡ったのは、八月十九日のことであった。つまり、その前日の京の宮廷で、政変がおこってしまったのだ。もともと大和行幸は天皇の意思からでたものではなく、長州藩および長州系の公卿の強引な策動によるものであったが、これをよろこばない薩摩、会津の公武合体派の勢力が謀議して、尊攘派の公卿十九人が即時参内停止になり、長州藩の堺町御門警衛は解かれ、つづいて七人の公卿が長州へ落ちた。

宙に浮いたのは、大和の野にいる天誅組の一団だった。もともと背景をもたない浪人部隊であるうえに名分を失っては単なる徒党にすぎない。

幕府の大坂城代は、紀州、桑名および大和諸藩に対し、天誅組討伐の命をくだした。

天誅組は、その置かれた立場こそ滑稽だったが、希望を喪失したことが、かえってかれらに死を決せしめた。いわば、死兵である。

そうした時期に、分銅摂津屋庄左衛門が弟の猿霞堂庄兵衛をたずねたわけだが、庄左衛門が昂奮しているのは、むろん天下の形勢についてではない。得意先の大和高取藩関係の

売り掛け金が、この戦さ騒ぎのために回収できるかどうかが心配だったのだ。

「蔵役人にかけおうても、剣もほろろや。戦さじたくで金が要る、払いは十年払いにでもしてもらわんとこまる、ちゆイよる。そんなあほなことがあるかい、というと、ほなら国許へ掛け合うてンか、とこうや」

「なるほど」

庄兵衛は、ぼんやり肘枕をついたまま、前栽の陽当りをながめている。庄左衛門はよほど肚にすえかねているのだろう、声をふるわせながら、

「ド侍どもは浮き足だっとる」

「そやろ。何百年も戦さをしたことがないさかいな。目エむいとるやろ」

「ところで、庄兵衛」

「なんじゃい」

「汝は才覚がある。くそ度胸もある。それに、若いころは、軍学も剣術も習うて、戦さ場はまあ隣りイ行くようなもんや」

「阿呆ぬかせ」

庄兵衛は苦笑したが、庄左衛門はいらいらとせきこんで、

「おまけに、汝は閑もあるわい」

「早う用をいうたらどや」
「大和高取まで行って、掛けを取ってきてンか。タダやあらへん。分ウだすわ。こンだけ」
庄左衛門は指を二本突きたて、
「七百両のうちの百四十両や。わるい口銭やないやろ」
「よかろう。武家装束でゆくゆえ高取藩大坂蔵屋敷の関手形と国許の重役への添書をこしらえて貰おうか」
「安いこッちゃ」
「路用は要らん」
「ほなら、分ウに色つけるわ」
「分ウも要らん」
「へえ。タダか」
「そのかわり、当てにして貰うまい」
「そら、こまる」
「こッちゃ、気儘人や。気持に荷イもつのはかなわん。荷イは一つでケッコや」
「なんじゃい、なんぞほかに荷イがあるのか」

「そらな」
猿霞堂庄兵衛は片目をつぶり、パチリと指で兄のあご下をはじくような真似をして、
「恋じゃわい」
といった。

四

畝傍から一里ある。
岡という村で、飛鳥朝のころの廃寺のあとをすぎるときに、庄兵衛は斑鳩のなく声をきいた。夏が過ぎようとしている。
赤土の街道が真弓の村に入るときに、古い祠をつつんだ樫の森で、嘴に紅点のあるその鳥をみた。三度目に声をきいたとき、猿霞堂庄兵衛は桝屋橋の橋板をふんでいた。
橋を渡ると、城下になる。
城下の村の名を、遠国の人は高取とよび、畿内の者は壺坂といい、土地の者は土佐ノ町という。
土佐ノ町は、植村駿河守二万五千石の城下だが町といえる規模ではない。

村は、山を背負っている。高くはなかったが、それでも登れば大和盆地はおろか、晴れた日には摂河泉の壁である葛城山脈をこえて、遠く淡路島まで見とおせた。植村藩の城塞は、その山のうえにあった。

城は山上にあったが、侍屋敷は、藩主の居館をかこんで、その山ふもとに群れていた。

「家老屋敷はどこだす」

猿霞堂庄兵衛は、みちみち数軒の家をたたいたが、どの家もこたえがなかった。猫がいっぴき、道を横切った。庄兵衛は、

「ははあ」

と立ちどまった。

「村を空けくさったな」

敵が押しよせてきたとき、村を焼いて山の城塞へこもるつもりなのだろう。敵に家屋をあたえた場合、そのまま野戦陣地に化してしまうおそれがあるためだった。

武家屋敷のならぶあたりまできたとき、むこうから、雑兵数人をつれた騎乗の男がやってきた。

「家老の駒原はんの屋敷はどこだす」

「お手前は？」

痩せ黒ずんだ中年の武士は、武士のくせに大坂弁をつかう奇妙な男を、けげんそうに見おろした。

「大坂蔵屋敷からの使いで、渡辺庄兵衛といいますわい」

「拙者は、当藩剣術指南役浦上新兵衛と申す。ただいま見廻り中ゆえ、役儀によって馬上おゆるしなされ。ご用は？」

「用は」

庄兵衛は、ぐっと詰まった。

まさか、この陣中に掛け取りにきたともいえないし、まして、家老屋敷の若い刀自を張りに来申した、ともいえた筋でもなかったから、まず唾をのみ、

「それは」

と、ゆっくりうそをついた。

「拙者は、大坂鰻谷に住んで、時に頼まれては軍学を講ずる者でごわりましてな。このたびはご当藩はえらいお取り混みで」

「お見舞いたみ入る」

浦上新兵衛は、なおもうろんくさげに目を光らせた。庄兵衛は頓着せず、あたりの景色をみながら、

「大坂蔵屋敷詰のご家中とは懇意でごわりましてな」
「それはいかさま」
「蔵屋敷の歴々からたのまれ、なんぞ拙者の軍学のようなものでもお役に立つことがあろうかい、というわけでのこのこ出て来ましたわけだす」
「ははあ、すると、添書でもお持ちかな」
「ここに」
懐ろから油紙につつんだものをさしだすと、新兵衛は丹念に読みくだしてから、にわかに容儀をあらため、馬からおりた。
「失礼つかまつった。ご案内いたそう」
顔をみると、ずいぶん真面目な男らしい。
雑兵に馬を曳かせ、自分は猿霞堂庄兵衛と肩をならべて歩きだした。もっとも、庄兵衛の左側に寄りそったところをみると、庄兵衛に不審の様子があれば、いつでも機敏に処置してくれようという才覚だけは用意している様子だった。
「浦上はんは」
話題のないまま、庄兵衛は子供の数でも訊ねようとすると、
「神道無念流でござる」

新兵衛は、早合点して荘重にこたえた。
「それはなかなか今様な」
庄兵衛はやむなく相槌をうった。
「お手前は」
「めっそうもない」
「いや、お隠しあるな。お見受けするところ、さりげないご様子にも、なんと無うお心得のはしばしが見えるようでござる。何流をおやり召された」
(阿呆かいな)
猿霞堂庄兵衛は、肚のなかであざ笑った。
(これやさかい、田舎者はこまるねや)
「何流でござる。見廻り中でござるゆえ、いわば役儀じゃ。お答えねがいたい」
「生田流をすこし」
「箏曲のようでござるな。剣術のほうでござるぞ」
「大坂の天満に藤槇道場というのがごわりましてな。諸藩の蔵役人や奉行所の同心侍などを客にほそぼそながらつづいている。そこで北辰一刀流をならいましたが、なにぶん若いころのことで、いまでは棒をふっても犬も逃げまへンわい」

「藤槇道場の、渡辺庄兵衛……。あっ」
「お聞きおよびだしたかいな」
「貴殿が、たしかに渡辺庄兵衛どのでござりまするか」
「いまは猿霞堂というがな」
「庄兵衛どのなら、遠い記憶に聞きおよんでござる。天満では鬼才といわれたお方じゃが、その後竹刀を棄てられた、と」
「べつに剣術使いになる気イはおまへんさかいな」
「これはこれは」
浦上新兵衛は、好人物らしく大げさに首をふって感嘆している。
やがて、なまこ塀をめぐらした駒原屋敷の長屋門の前まできたときに、新兵衛は、
「これはしたり」
背をそらしてせい一ぱいにおどけてみせた。
「つい、お話に夢中になっているうちに、うっかり失念もうした。この屋敷は、きょうは空っぽでござったわい。ご家老駒原新太郎様は軍正として、ここから八丁ばかり行った鳥ケ峯と申す岡にある陣地にござる。刀自とご内儀そのほかご家族は、山の上の城屋敷のなかにご避難中じゃ」

「その刀自のお婦以ご寮人さんとは、拙者はとくに存じよりだしてな」
「あ、それは。渡辺庄兵衛どの、お恨みもうしまするぞ。なぜそれを早く聞かせてくださらぬ。まことに応対、粗略でござった。ご堪忍、ご堪忍じゃ」
田舎は、旅廻りの絵師などがやっているように触れこみかた一つで大そうもない待遇をうけるものだが、庄兵衛の場合は、庄兵衛自身がうすぼんやりしているあいだに、勝手に剣客浦上新兵衛がとぼしい想像力を駆使して、相当な人物に仕立てあげてくれていた。実直なこの剣客には藩内の信望があるらしく、その日は半日がかりで、それぞれの陣地についている藩の重役たちに引きあわせてまわったために、猿霞堂こと渡辺庄兵衛は大坂からきた傭い軍師という形で、押しもおされもせぬ信用ができあがってしまったのである。

五

ほうぼう引きまわされて、かんじんのお婦以に会えたのは、やっとその日の日没前のことであった。
山の城の国見櫓の下に、城詰めの小屋があり、その南は大筒小屋、さらに詰め侍の長屋がならび、その南に藩の重役の城屋敷が、樹木にかこまれてひっそりと建っていた。庄

兵衛が来意を侍女に告げたとき、お婦以は茶をたてていたが、
「庄兵衛どの？」
侍女のほうは見ず、遠い目つきで、陽射しの消えたうすぐらい庭をぼんやりながめた。
むろんお婦以は、あのときの奇妙な大坂者を忘れてはいない。ただ正直なところ、舐めるように親切にしてくれた印象以外にさまで残っていないのである。
「猿霞堂庄兵衛でごわりまする。あのせつは、いかい失礼はんでごわりました。このたびは、えらい、ご家中お取り混みで」
「お見舞ですね」
なにをしにきたのだ、といわんばかりの冷たい表情だった。青く剃りおとした眉に、八百石の次席家老の母堂らしい見識があった。
（こら、勝手がちがうわい）庄兵衛はへきえきしたが、もっとも、女は舞台がかわれば豹変するぐらいのことは、十分に算盤のはじき済みのことだった。
「ご家老に鳥ケ峯の陣屋でお会いしました」
「新太郎どのと？」
「へい、このたびの合戦には存分に力を貸してくれいと云うことでごわりましたわ」
「まあ」

お婦以は、眉をひらいた。
「猿霞堂さんは、軍学者だったのですね」
「なかなか」
「まあ、ご謙遜」
お婦以の構えた姿勢に、どことなく弛みがみえはじめた。庄兵衛は、やはり女は子供のことをいうにかぎる、と思った。
「新太郎どのは、まだとしはがいかないために苦労をなさっているようです。猿霞堂さんがたすけてくだされば、きっとよろこぶにちがいありません」
「なかなかもって。しかし地形を按じまするところ、天誅組はどうやら戸毛方面から参りますでごわりまンな」
「まあ、そんなこと、新太郎にもおっしゃってくださいましたの」
「へい、存分に」
「相変らず猿霞堂さんは親切ね」
親切は猿霞堂の商売のようなものだ。
「ご寮人さん」
「なんでしょう」

「大坂で見物の節は、えらい致らんこッて」
「いいえ、楽しかったわ」
「これはほんの手みやげがわりに」
猿霞堂庄兵衛は、刀を押しのけてかたわらの風呂敷包みをもちあげ、なかから金蒔絵の小箱を二つとりだした。無造作にふたをひらいて、べっこうのかんざしと、黄金に兎を刻んだ文鎮をみせると、お婦以は他愛もなくよろこんで、
「ほんとに、これくれるの」
娘のようにはしゃいだ。
「ご寮人さんに似合わしまへんやろけど」
「うそうそ。似合うわ」
お婦以はかんざしをとって、さっそく髪へ挿した。あげた腕の白さに庄兵衛はおもわずごくりと唾をのんだが、顔だけはつとめていかめしく、
「ほんまは、わてェこのふた品をもってくるために高取へくだりましてん」
ぬけぬけと云った。

六

色事は親切第一というかれの流儀にたがわず、猿霞堂庄兵衛は、軍正駒原新太郎のために真心をこめて働いた。むろん、そうすることがお婦以をよろこばせる一番の道だということを知っていたからである。
かれが高取藩の陣形をみると、前哨陣地の配置や、煙硝置き場の位置、後詰の待機場所などに多少の欠陥があったので、尻をからげ、刀もほうりすてて山野を走りまわっては手直しをしたり、予定戦場を鳥ケ峯のふもとに想定して戦況をさまざまに仮想し、それを新太郎にいちいち図で示しては戦闘指揮の方法を教えこんだりした。
「このあとは臨機応変だンな」
「どうもありがとう。猿霞堂どのの話をきいていると簡単に勝てそうですね」
駒原新太郎は、母に似た唇をほころばせて微笑した。
もっとも、大勢の幹部のなかには猿霞堂庄兵衛という得体の知れぬ傭い軍師が、若い軍正の後に従っていちいち軍法の口出しをすることに不快を感じている者がなくもなかった。
大砲奉行の市川左衛門もその一人である。

じつをいえば、鳥ケ峯の岡のうえに据えられている四門の青銅砲をみて、庄兵衛はおどろいたのだ。

「なんだす、これは」

「大砲じゃ」

「煙火筒かと思うた」

庄兵衛はべつに悪口を云ったわけではなかった。高取藩の戦闘配備をみると、どうも防禦に重点をおきすぎているのが気にくわなかったのである。兵力を、城のある高取山や、そのふもとの鳥ケ峯に集結しすぎて、平野から来る敵に対して防禦はできても捕捉殲滅することはできない。

そのことを総奉行の主席家老寺田織衛に具申したところ、織衛は五条の空を指さして、

「敵はわれにまさる五倍の兵力だ。守る以外に手はない。それにわが藩には高取山の天嶮があるし、権現様から直々賜わったブリキトースがある」

と吐きすてた。

「なるほど、これがブリキトースだすかい」

庄兵衛は、馬鹿が口をあいているようなあんぐりした砲口をなでながら、市川左衛門の顔をみた。

ブリキトースという大砲は、高取藩では権現様ご下賜ということになっているが、ただしくは家康が大坂夏の陣がおわったころオランダから買いこみ、寛永十七年、植村家が高取に移封されるときに幕府が権現様の大砲ともったいつけて持たせてやったものである。高取藩にはブリキトースが六門ある。六門それぞれに六軒の下士の家がつき、その総責任者として百石取りの大砲奉行の家が代々つづいている。

（大名もええ気なもんや。百石が二百年として二万石。この大砲のおかげで、こいつの家が代々米のめしを食うて来よったんやさかいなあ）

庄兵衛は感心したが、しかし、なんといってもブリキトースは高取藩の誇りなのであった。その威力よりもむしろ、将軍家から直々にこのちっぽけな田舎の藩に贈られたというところに、かえがたい神聖感があった。

ブリキトースというのは、鋳力通スが語源である。もともとは、オランダのブリキトリックという兵器製造会社が造ったものだが、高取藩の人々はブリキでさえも射通すという所からこの名をつけた。ブリキとはオランダ語からきた日本語で、薄い鉄板に錫を貼りつけた金属である。江戸時代の大和高取では、固いものの代名詞にさえなっていたのであろう。

砲は、むろん先込めの原始的なもので、弾は炸裂弾ではなく、鉄丸か石を詰める。すで

に英国のアームストロング会社の鋼鉄製の元込め砲が出現している時代に、この宇治茶を塗りつけたように青々とした砲が、庄兵衛の目からみれば敵を殺傷する物騒な道具というよりも、どこか土俗臭のあるご神体のようにもみえた。

「ほら、まあ結構なこッちゃ」

庄兵衛は、左衛門をなだめるようにいった。左衛門は砲側でふるえながら、もしこれ以上砲の権威を傷つけられれば、家門の名誉のためにも刀を抜きかねまじい形相を示していた。もっとも陣中の私闘は死罪ときまっているから、うかつに刀はぬけない。庄兵衛もその辺の呼吸を心得ていて、相手の肩をたたき、

「なにも拙者は、貴方さんの悪口をいうてるわけやないさかいな。堪忍しとくなはれや」

庄兵衛にすれば、二百余年のあいだ、武器を進歩させることを考えず、ただこの砲を磨く真似をして無駄めしを食ってきた武士というものの無智とずるさがおかしかっただけである。

庄兵衛の方寸からでた着想として、竹ノ皮道というものがあった。

高取山の城へのぼる道は、山麓の黒門からのぼる細い急坂が一すじしかない。この約十五丁のあいだを、駒原新太郎に献言して、すきまもなく竹ノ皮を敷かせたのである。

「敵がきても、すべってよう登りくさらんわい」

庄兵衛は、徴用の百姓と一緒に竹ノ皮を播きちらしながら、うれしそうに笑った。

この竹ノ皮のおかげで、高取山の守備兵は半分に節約できたわけで、余った兵力を主決戦場である鳥ケ峯の前方に散開させた。ところが、この竹ノ皮は敵をなやますよりも前に、庄兵衛自身を難渋させるはめになってしまった。

じつをいえば、庄兵衛は、高取へきてから日没になると毎日のように鳥ケ峯の陣地をぬけて、高取山のうえのお婦以のもとにこっそり通っていたのだった。

もっとも、お婦以のほうは最初はいい顔をしなかった。

「人目があります。もし妙な疑いをうけたら私はこの高取には居られなくなりますわ」

「ほなら、この庄兵衛と大坂で住んだらよろしおますがな」

「まあ、大そうな云いよう。猿霞堂さんと私とは、べつに恋仲でもなんでもありませんのよ」

「いまはな」

ちがいない。ときに冗談にまぎらわしてきわどい口やりとりを交わしていたが、お婦以はただそれだけの仲だった。もっともその程度で庄兵衛が我慢をしていたわけではない。

（よし。今夜という今夜は……）

意を決して猿霞堂庄兵衛がお婦以のいる高取山をのぼったのは、八月二十五日の夕刻で

あった。

八月二十五日といえば、五条で集結していた天誅組がついに行動をおこした日である。早暁、全軍が五条河原を発し、午後になるとすでに先鋒は高取領にほど近い重阪峠をこえて、陸続と高取攻撃の拠点である戸毛にむかって北進していた。諜者の報告をきいて、高取の各陣地は異常な緊張につつまれていたが猿霞堂庄兵衛は軍師らしくそうした機会をねらっていたのだった。こういう夜こそ、好色者にとってえがたい戦機なのである。

(どいつの目や耳も、戸毛の天誅組に吸いつけられとるわい。それに、うまれてはじめての戦さで、生きた心地もしとらへん)

ところが、釘抜門をくぐり、黒門をすぎて山麓にかけあがると、

(仕舞うた……)

いらだつ庄兵衛の足をいきなり奪ったものがある。庄兵衛が播きちらした竹ノ皮だった。夜目にも白い竹ノ皮の腹が、生きもののようにかれの下にすべりこんできては庄兵衛の足を空しく回転させ、這えば腰をうち手をすりむいた。中腹へくると、いよいよ急勾配になる。ときには竹ノ皮の群れがなだれのように他の竹ノ皮の群れを誘って、ずるずると闇のなかをそのまま半丁もすべりおちることもあった。

庄兵衛は道わきの草をつかんで這うようにして十五丁の山坂をのぼりつめると、三ノ門の柱のそばでうごけなくなってしまった。

(ああ、歳やなあ)

若い者でも参るだろう。五十を過ぎた男が、二十日鼠が輪をまわすような大働きをして、やっと十五丁の山坂をのぼりつめたのだ。心臓がのどからとび出てしまいそうにくるしかった。

恋にも運というものがある。いや、運だけが、恋の成就を左右する唯一のものかもしれない。大和の伝説では、恋の神はほんのわずかな垣根の破れから入ってくるそうだが、このとき、庄兵衛のうえに偶然というより、奇蹟にちかいことがおこった。三ノ門の小門が重い音をたてて開き、そのわずかなすき間から、なんとお婦以の姿が月の下に出てきたのである。

秋ぐちとはいっても、この夜は風がなかった。お婦以は涼しさをもとめてここまできたのだろうか。倒れている男をみつけると、気丈に近づいてきて、提燈をさしだした。

「どなたです」

凛としたきびしさがある。大坂でみせたお婦以の印象はそこには片鱗もなくて、やはり家老屋敷の若い刀自らしい毅然としたものがそのみじかい声のなかにあった。

しかしその姿勢は、つぎの瞬間にくずれた。

「まあ、猿霞堂さん――」
「へい」
「こんな夜でもきてくれたの。竹ノ皮を播いたから、もう来てくれないと思ったんだけど」
「はずかしいことだすが」
「なあに」
「猿霞堂庄兵衛は惚れてまッさかいな」
「まあ」
お婦以は佇んで、波うっている猿霞堂の背をじっとみつめていた。
「竹ノ皮でころびながら、えらい深草ノ少将や」
「猿霞堂さん――」
お婦以の姿勢はさらにくずれ、庄兵衛のそばに膝をついた。肌に温められた匂い袋のかすかなにおいが、夜気のなかにみちた。
「わたくし」
しばらくだまっている。なにを思ったか、お婦以は提燈の灯を消した。
「まだ、恋というものをしたことがないのよ」

どういう意味だろう。恋をしたことがないから、あなたの求愛に答えるすべを知らないというのか。それとも、恋をしたことがないから、その未知の世界へあなたに手を曳かれてのめりこんでいきたいというのか。
しかし猿霞堂庄兵衛は沈黙していた。この沈黙の重みこそ、猿霞堂の流儀にとっては千金にも価いするものだった。かれはだまってお婦以の小さな掌をとり、やがてその手を引き、袖口のたくれた白い腕を自分の胸の下に捲きこんで、お婦以の体を押し倒した。
「ご寮人さん。申しわけないが、わいのは恋やない。好色や。せやけど、わいはこの好色の道に生涯を賭けてるでえ」
「ああ気儘人……」
「そうや、この稼業がわかったか」
「厭や」
庄兵衛の手が、お婦以の裾に触れたらしく彼女はかすかに叫んで、身をよじらせた。
「恋やないけど、わいはご寮人さんが死ぬほど好きや。照れくそうて恋とはよういわん。好色や。好きごころだけで、ご寮人さんを求めてるのや。かんにんやでえ」
「だけど、それが恋というものではないの？　わたくしのために、こんなあぶない戦さ場まできて……」

「ちがう。好色で命を落してもええと思うのが気儘人や。お婦以ご寮人さん、かんにんしてや」

抱きよせた庄兵衛の手とはべつの指が、お婦以の裾のなかでうごいた。

「厭や」

「かんにんやでえ」

「厭や」

「かんにんしてや」

「厭や。ここでは、いや。——あの、あの藪のなかへ、わたくしを抱いていって」

「ご寮人さん」

「ここでは、いや」

「——じつは」

庄兵衛は、ぐったりと頬を上につけ、泣くような声で云った。

「ああ首が動かん。手エも足もや。かんじんのわいが動かれへんねや」

※

戦闘は一日で終り、高取藩の圧倒的勝利に帰した。その間の猿霞堂庄兵衛の事歴を詳述したいのだが、予定の枚数がつきてしまった。庄兵衛は高取防衛で大骨を折ったあげく、

かんじんのお婦以をも得ずに大坂に帰り、鰻谷の町内であいかわらずお稲とふたりで気儘ぐらしをつづけたという。その後の庄兵衛については、べつの機会にゆっくり紹介させていただきたい。

侍はこわい

一

「狆の仔」

などと、夫の相楽庄之助は、よくからかう。お婦以のことをである。お婦以はこれでも美人だとおもっていたから、そのつど、

「また」

とにらんでやる。いちど、訊いてみたことがある。

「いったい、どこが似ているのでございますの」

「眼さ。ほら、その眼。大きくて、黒っぽくて、まるくて、いつも濡れていて、そのくせよく動く」

「いやだわ」

お婦以は、あわてて眼をこすった。庄之助は、そのしぐさを可愛いいとおもった。むろん、庄之助は、自分の妻が狆に似ているなどと、おもったことはない。ただ、妻が、もう二十一にもなるのに、小娘のように甘えったれで、夫の庄之助の挙動に好奇心がつよすぎ、まるでじゃれるようにまとわりついてくるのが、少々うるさいと思うことは、たびたびあ

る。つまり、狆の仔なのだ。狆の仔はいくら可愛ゆくても、ときどき、小うるさくなるのに似ている。

お婦以は、自分の毎日の生活に満足していた。この家に輿入れしてきてから三年になるが、このごろほど、いきいきと楽しい毎日はない。

お婦以は、船場伏見町の唐物問屋江戸屋十兵衛の末っ子としてうまれた。江戸屋は、屋号のとおり、十兵衛夫妻も五人の番頭のうち一人をのぞいてはぜんぶ江戸のうまれで、大坂の商家でありながら、お婦以は、江戸ふうのしきたりのなかで育った。自然、お婦以は、大坂のふうになじまない。年ごろになって、同業すじなどから縁談が選りきれぬほどにもちこまれたが、お婦以は、

「あたくしは、お武家でなければ、いや」

といって、きかなかった。両親は、よくない料簡だといってたしなめた。この諸式の高い時世に、商家から武家に嫁にゆく馬鹿はないのである。第一、商家でなに不足なく育った娘が、扶持米でくらす武家の台所をきりもりできるはずがないではないか。

「しかし」

と両親は考え直すようになった。お婦以を大坂の商家にやるよりも、苦労はすくないかもしれない、町家のうちむきのしきたりが、江戸と大坂では、ひどくちがう。それに通

じないというだけで、おなご衆はおろか、店の番頭、手代からも軽侮されるかもしれない、と思いなおし、

「お婦以、唐物同心でもいいか」

といった。

「いいわ。どなた？」

「相楽庄之助さんというお方だ」

庄之助は西町奉行に属する同心で、天満の同心町の組屋敷に住み、唐物（輸入品）の監督がそのしごとである。町奉行所の役人には与力と同心があり、与力は課長で、同心は平吏員とおもえばよい。同心には、盗賊吟味役や定町廻役など警察業務をする者のほかに、金役、石役、川方、唐物など市政担当の武士がおり、庄之助は唐物同心だった。自然、仕事の関係上、業者の寄りあいに出たり、店の品物を検査したりするから、江戸屋十兵衛とは親しい。

はなしが進んで、お婦以が輿入れをしたのは、文久二年五月のはじめのことであった。床入りの夜、お婦以は両親に教えられたとおり、庄之助の前に指をついて、

「お婦以は町家のそだちでございますゆえ、お武家のうちうちがわかりませぬ。いろいろしくじりが多いかと存じますが、そのつど、お叱りくだされば、お婦以は一生懸命になっ

ておぼえます」

「いいよ」

庄之助は無造作にいった。いつも微笑をたやさない気のやさしい男なのだ。

「おれんとこは、おやじどのもお袋どのも、早く世を去ったから、かまうことはない。隣り屋敷のご新造などから教えてもらって、あとはお婦以の我流でやればいい。ただ、お祥月命日だけは、おぼえていておくれ。これは、武家のしきたりだからね」

「お祥月命日と申しますと、お父さま、お母さまの？」

「それはおれもおぼえているさ。歴代の将軍家のお命日だ。この日は拝参日といって、お役所は休みになる。朝のうち、四天王寺や建国寺などにお詣りして、あとは屋敷でお婦以とふたりっきりになれる日だ。つまり、骨休めの日さ」

「まあ、うれしい」

「いまからお休みだけをうれしがっちゃ、いけないな。ご奉公で疲れてもどる毎日のおれをいたわってくれなくちゃ」

「うんと、いたわって、差しあげますわ」

お婦以は、ことばを一節々々区切り、拍子をつけるような言い方で、請けあった。

二

三年たつと、武家のしきたりにも、すっかり馴れた。夫の扶持は、現米十石三人扶持だから暮らしは楽ではなかったが、お婦以は、自分でも、こんな才覚が自分にあったのかとおどろくほど、うまく切り盛りした。

もっとも、夫には多少の余収がある。大坂の地役人にはめずらしく剣術に熱心で、二十一歳のとき天満の北辰一刀流の田中道場で大目録皆伝をうけ、ひきつづき代稽古として道場にのこっていた。それにはわずかながら、お手当がついた。奉行所でも、相楽庄之助の剣名は奉行所全体の誇りでもあったから、非番の日に、道場へ通うことをみとめていた。

（妙だな）

とお婦以がおもいはじめたのは、つい最近のことである。

「きょうは、道場の日だからね」

と出かけてゆく夫に、不審がある。ほかでもなかった。——

道場の日は、もどってから夫が湯に入っても、夜、抱かれるときは、夫のからだから、どことなく、あのかびくさい面や籠手のにおいがしたものだ。お婦以は、夫のにおいのな

かに、そのにおいがまじることが、きらいではなかった。そのにおいのなかに、夫が、道場で相手をうちすえている、たくましい筋肉のうごきを想像することができた。お婦以はこのにおいのなかで、自分が商家のご寮人にならずに武家の妻になったうれしさをさえおぼえたものだった。ところが、このごろはそうではなくなっていた。道場の日の夜でも、夫の庄之助の体から、あのにおいが消えてしまっているのである。

（へんだわ。それとも、あたしの鼻が馴れてしまって、わからなくなったのかしら）

ある日、お婦以は、庄之助が着更えをすませて茶をのんでいるときに、思いきって、

「ほんとうに、きょうは天満の道場にいらっしゃったのですか」ときいてみた。

「え？」

庄之助の表情が瞬間かげったのを、お婦以は見のがさなかった。庄之助は、しいて笑顔を作りながら、

「あたりまえじゃないか。私は十四のときから道場は休んだことがない」

（うそだわ）

その顔をみて、はっきりとおもった。

こどもがまだできないから、お婦以は、毎日、庄之助のことばかりを考えている。お役むきのことだけは仕方がなかったが、そのほかのことなら、庄之助のすべてを知っていなければ、お婦以は気持がおちつかないような気がするのである。

（あたし、だまされているのかもしれない）

お婦以は、毎日も思案した。そんな妻の様子をみて、庄之助はある朝、

「ちかごろ、どうかしているのではないかね」

とたずねてくれたが、お婦以はあわててかぶりをふって、

「いいえ。なんでもございませんわ」

笑顔でごまかしつつも、

（どうかしているのは、ご自分のくせに）

と、庄之助の落ちついた横顔が、にくらしくなった。

庄之助とお婦以は、三つしかちがわない。たったそれだけちがうだけなのに、相楽庄之助という夫は、うまれたときから大人だったみたいに、ひどく落ちついていた。老人のように茶がすきで、家計のわりには、茶だけがぜいたくだった。朝夕、自分で煎れて、それをお婦以にもあたえ、ゆっくりと時間をかけて喫む。茶をのむ挙措は悠長で、どこかとぼけた感じだったが、よくみると、どんな宗匠でもこうはいくまいとおもうほど、みごとに作法にかなっている。

（お武家って、みなさまこうかしら）

町家そだちのお婦以は、とてもかなわないとおもうのだが、この朝だけは、ちがった気持でそれをみた。

（町方の者は、お行儀がわるいけど、むきだしで生きている。お武家はきっとそうでないかもしれない。しつけや作法はりっぱだけどひょっとすると、中身はごまかしているのかもしれない。ゆだんがならないわ）

げんに、唐物の役目は宴会が多い。伏見町の唐物仲間によばれて、新町などで芸者をはべらせる席に出ることが多いのだ。そとで、なにをしているかわからないことだった。

（そうだ）

とおもった。

お婦以は、伏見町の実家から、番頭の与吉をよんで相談した。

与吉は、五人の番頭のうちでたった一人の大坂者で、商売はへただが、根がひょうきんな男だし、土地にあかるいのと、世故にたけている点で、主人の十兵衛や奥むきの者に愛されていた。

お婦以は、まさか、夫の庄之助の肌のにおいを与吉にうちあけるわけにはいかなかったが、ただ、天満の道場まで供をしてくれ、とたのむと、

「さては」

と与吉はいった。かんのいい男だ。

「小嬢さんは、なんぞ、お餅を焼いておいでごわりまするな」

「わかるの？」

「むだに、五十年もめしを食うておりませぬよ。あまりお見上げせねばならぬご料簡ではごわりまへぬな。したが、ちかごろは街が物騒じゃ。お供だけはつかまつりましょう」

街がぶっそうじゃ、といったのは、ほんの数日前にも、京の池田屋という宿で、諸国の攘夷浪人が集会をしていたところを幕吏にふみこまれ、さんざんに斬られた事件があり、大坂でも、攘夷御用盗と称する浮浪の者が商家に押しこんだり、白昼、路上で斬りあいがあって、人死にが出たりしている。町の治安が、日を追うにつれて悪くなっているのだ。

そとへ出た。

暑い。

かぞえてみると、天神祭までは、あと幾日もない。

城の見える武家屋敷の辻々をいくつか通りすぎて、京の鷹司卿の大坂蔵屋敷の前まできたとき、与吉は立ちどまった。お婦以はふりかえって、

「どうしたの」

「小嬢さんは、この御門のかげで日ざしを避けてござれ、与吉だけが道場に参りましょ

う」

「なあぜ？」

「あほやなあ。お武家がたのご新造ともあろうお方が、ご用もないのに、はしたのう、あるじのお役むきの場所にお顔を出されることはごわりまへぬ」

「そうかしら」

与吉のいうとおりにした。

しばらくして、与吉が小走りでもどってきて、お婦以のそばへ寄ってきた。汗のにおいがした。与吉は声をひそめて、

「おどろきなはるな。旦那はんは、ここひと月ほど、道場はお休みじゃということでごわりまする」

「そう」

お婦以は、くびれたあごをひいて、うなずいた。こういうときには、とりみださないのが、武家の妻だと、かねて考えている。

「これは、えらいことになりましたな」

「どうして」

「悋気は女の悪徳ともうしますゆえ、取りみだしたりはなされますなや。ナニ、魔がさすということもある。しばらく、そっとしておけば、正気にもどられましょうわい」

三

それから三日ほどして、お婦以は庄之助を送りだしたあと、ちがいだなのほこりをはたいていると、あやまって、手文庫を落した。

（いけない）

あわてて拾おうとした。

相楽家の本家は、江戸駿河台に屋敷地を拝領する旗本寄合席五千石の相楽志摩守で、この手文庫は、本家の先々代が将軍家から拝領したものをわけてもらったものだ。塗りは傷んではいるが、金蒔絵で、葵の定紋が入っている。——お婦以は、あわててかがんでから、

「あっ」

と声をあげた。血が、体じゅうから、すっとひいてゆくのが、自分でもわかった。手文庫がこわれたのではなかった。なかから、ひとさしのかんざしが出てきたのである。

（まあ。……）

それが、庄之助の亡母や祖母のそれでないことは、ひと目でわかった。作りが、当世風のものなのである。材料は、とき色のぎやまんで、きらきらと光りを帯びてやや軽薄な感じのするそれは、上方の粋筋の女しか、ふつう用いない。嗅ぐと、かすかに髪油のにおいがした。

（わかったわ）

どうすべきか。

手文庫にそれをおさめ、もとどおりに置いたあと、お婦以は思案した。

（しっかりするのよ、お婦以。――）

自分に云いきかせてみたけれど、手足が小きざみにふるえてくるのを、どうしようもない。

あくる日、与吉をよぶと、

「やっぱり、そうでごわしたか」

とうなずいた。

「いっそ、あたって砕けなはれ」

「くだけるのは、いやよ」

「なんでで、ごわりまする？」

「くだけるのはいいけど、お婦以は恪気病みだといわれて、旦那さまにきらわれてしまうのはいやだわ」

「大きに」

与吉は、しばらく思案したあと、

「この一件は、与吉が請け負いましょう」

といって帰って行った。

その翌日から、与吉は、あるじの江戸屋十兵衛のゆるしをえて、気はしの利く丁稚を仕事からはずし、

「よいか、これは口止め料じゃ」

と小粒をにぎらせ、しっかり握らせてから取りあげた。「こどもには大金は罪ゆえ、お家はんにあずかって貰うておく。この一件、たれにも云いなや」

与吉は相楽庄之助の非番の日には、丁稚にあとをつけさせることにしたのである。丁稚の松七は、与吉の出里の難波村の縁戚の者で、口のかたい子だし、まず、他にもらすことはあるまい。

そのころになって、庄之助の挙動がめだっておかしくなった。あけ方ちかくに戻ることもあるし、ついには帰宅しない日もあった。

「ちかごろ、御用繁多でな」

というのみで、それ以上の云いわけはしなかった。お婦以はそれでも、

「左様でございましょうとも」

といった。不足がましいことをいわぬのが武家の内儀の心得であると、隣家の妻からきかされていたからである。

庄之助を送り出したあとなど、

(もう、お婦以がいやにおなりになったのかしら)

と、涙がとめどもなくあふれることがある。——もっとも、そのあとにかぎって、夜の記憶がまるで色彩をつけたようにあざやかにうかんで、ひとり赤くなってしまう。疑いながらも、お婦以は夫の愛情をつよく信じてもいた。

(おいやになんか、なっていらっしゃらないわ、きっと)

庄之助がはたして「御用繁多」であるかどうかをしらべるのは、わけはなかった。お婦以の実家が、庄之助が監督する唐物仲間なのである。父の十兵衛にたのむと、

「悴気はよくないな」

といいながらも、気になるのか、それとなく同業や庄之助の相役にきいてくれた。ところが、唐物取締りの諸法度がかわったわけでもなく、長崎で安治川尻で大口の抜け荷が発

覚したわけでもなかったから、庄之助の役目が、べつにいそがしいはずはなかった。

「あの」

「なんだね」

天神祭のすんだ次の夜、お婦以はおもいきってたずねてみた。

「御用繁多と申されますが、どういう御用なのでございましょうか」

「お婦以、お役目のことだよ。これは武家の奥むきの者の心得だ。きくべきではない」

「でも」

「当節、世上がさわがしい。諸国の脱藩浪士が多数大坂に潜入して、白昼刃傷の沙汰におよぶことがしばしばある。昨夜も、木津川に船がかりして、市内の商家をかすめ去った御用盗が出た。とかく、お奉行所が、猫の手でも借りたい時節になった。それゆえに、いそがしい」

「でも」

「ほかになにを訊きたいのかね」

「唐物方の旦那さまが、そのようなお仕事におかかりあいが、あるのでございますか」

「お奉行には、与力三十騎、同心五十人しか在勤せぬ。わずかな人数だ。役目が唐物であろうと、川方であろうと、このように市中騒然たるときには、いかような仕事もする。す

べて、お上のためだ」

「お上を」

お婦以は、おさえていたはずのせきがきれた。

「そのようにお大事に遊ばすなら、なぜお定紋入りのお手文庫に、あだし者のかんざしなどをお入れあそばす」

「見たのか」

庄之助は、こわい顔をして立ちあがり、

「そちは、やはり町家のそだちだな」

といった。そのひとことが、お婦以の胸を刺した。それを云われるのがいやさに結婚以来気持をはりつめてきたのに、近所の組屋敷の女たちにいわれるならともかく、夫の庄之助にいわれたのはこたえた。お婦以は、眼に涙をいっぱいためて、

「ええ、お婦以は町方のそだちでございますわ。お婦以は、あきんどの奥むきで育ちましたゆえ、しつけもできておりませぬ。だけど」

「だけど？」

「お武家なんか、だいきらいでございますわ」

叱ってみたものの、庄之助はお婦以をもてあましはじめたようだ。

「なぜかね」

「うわべばっかりでございますのね。へんにかくしだてしたりして、人間じゃないみたい。もう、あたくし、厭やでございますわ」

「こまったな」

（なにもこまることなんか、ありはしないのに。あたくしにかくれて、へんな女のひとと隠れあそびをしていらっしゃるくせに。……）

翌日、不幸なことに、それが裏付けされた。

与吉がやってきて、報告したのだ。庄之助が、新町の杵屋美代吉という長唄の女師匠の格子戸を、さも馴れたふうで入ってゆくのを、松七がみたというのである。

「定町の御用でもないのに、そのような家に出入りなさるのは、たしかに妙でごわりますな。しかし、小嬢さんは、なにもおっしゃいますな。わしが、それと無う、ご意見つかまつりますさかい」

その日の夕、店へもどった与吉は、しばらく荷造の指図をしていたが、不意に肩をたたかれてふりむくと、息のとまるほどおどろいた。いつのまに店へ入ってきたのか、相楽庄之助が松七の手をにぎって、立っていたのである。

「与吉、この小僧にわしのあとをつけさせているようだが、それほど目明しがすきなら、

商家の番頭などやめろ。定町廻役にたのんで、十手捕縄を持たせてやってもよいぞ」

「……いえ、それには、わけが」

「弁解せずともよい。お婦以は、わしの妻ゆえ、実家の番頭が、とやかくと要らぬ智恵をつけてもらっては迷惑する。ひとのあとをつけるような不浄なまねをするほどわしが疑わしければ、お婦以を実家にもどしてもよい」

「め、めっそうな」

「そうだろう。おれもいやだ。おれは、お婦以が可愛ゆくてならぬ」

庄之助は、ぬけぬけと云い、

「しかし一方、町家と縁を結んだことを悔ましくもあるのだ。おれの上役の内山彦次郎様も、お婦以との話がはじまった当初に申された、町家の者をもらうとべたべたと人のつながりが家に入りこんできてうるさいものぞ、と。そのお言葉が、いま思い出される」

「なんとも、申しわけもございまへぬ」

「悔いるか」

「へい」

「悔いるなら、ゆるしてやる。しかし罪ほろぼしにおれの役に立ってくれまいか。このことは、お婦以はもとより、店の者、またわしが朋輩にも、洩れてはこまることだ」

「かくしごとでございまするか」

与吉は迷惑そうな顔をした。

「お役目のことではないのでございまするな」

「ない」

庄之助の気走ったつめたい表情をみて、与吉は、侍とはこれできらいだ、とおもった。庄之助の人柄は、与吉も大好きなのだが、いちばんかんじんな一点で、庶人とはちがう何かがあるようなのである。

四

「ここではまずい。与吉ちょっと顔を貸してもらおうか」

そのまま庄之助は先にたって外へ出た。北へ歩いて、土佐堀川の川っぷちへ出ると、

「掛けろ」

ちょうど満汐どきで、足もとまでひたひたと汐が満ちていた。与吉がすわると、磯の香が鼻さきへただよった。庄之助はしばらくだまっていたが、やがて、

「五月二十日の夜の、内山彦次郎様の一件を聞きおよんでいるだろう」

「へい」

「それならば、話が早い」

内山彦次郎というのは、西町奉行所の名与力として江戸にまで聞えた人物だった。儒学者でもあり、経済学者でもあって、ことに大坂の商業機構の改革に力をつくし、さまざまの業績をあげてきた。それが、さる五月二十日の退庁後、駕籠で天満橋の上にさしかかったときに、暗殺された。

下手人はわからない。しかしそれが、新選組隊士であることは、すぐ町のうわさでひろまった。うわさには、十分な根拠があったのだ。

それより一年前の七月十五日の夜、京から新選組の近藤勇、芹沢鴨らが下坂し、鴻池家へ乗りこんで、隊費の無心をしたことがある。その夜、一行は京屋忠兵衛方に投宿し、遊興のため北陽新地へむかう途中、むこうから酒気をおびてやってきた大坂相撲のひとりが、隊士にたわむれて行く手をさえぎった。芹沢がその男を抜きうちで斬りすてた。これが動機になり、五六十人の力士が手に手に樫の棒をふりかざして、新選組が遊興中の住吉屋へおしよせ、双方路上に出て大乱闘になった。そのあげく、力士側七人が斬殺された事件があり、当時、大坂の市中をふるえあがらせた。

事件の翌日、近藤は西町奉行所に出頭し、右の次第をとどけ出た。折りあしく係りの与力が不在で、内山彦次郎が応接にあたった。近藤は、奉行所などを歯牙にもかけていないから、ただ届けっぱなしにするつもりだったが、彦次郎はゆるさなかった。「すでに七人の死人が出ている。いかにお手前方に道理がござるとはいえ、届けだけではすみませぬぞ」といった。近藤は色をなし、席を蹴って立ちながら、「われわれは京都守護職松平中将様ご支配の者である。貴殿らの取調べをうける身分ではない。云い分があれば、守護職公用人にかけあわれよ」

事件はそのままになったが、このときの彦次郎の剛直さが市中の評判になり、そのため、いよいよ新選組のうらみを買った。五月二十日の夜の下手人は新選組隊士であるというわさは、ここから出ているのである。

「まちがいはない。おれは、調べた」

と庄之助はいった。

「暗殺の当日、鴻池に御用金受けとりのため、新選組隊士沖田総司、原田左之助、永倉新八、井上源三郎、松田倉蔵の五人が下坂していることは、宿所京屋でしらべた。このうちのひとりが下手人なのだ。当日は、日暮れとはいえ、まだ往来がみえた。人相をはっきり見た者がある」

「だれが？」

「お前も知っているかんざしのぬしさ。新町の小唄の師匠杵屋美代吉だ。その日は出稽古のもどりで、ちょうど橋の上にさしかかったとき、内山様にとどめを刺している下手人をみた。あわてて逃げようとしたときに、かんざしを落した。おれはここ一月のあいだ、足を棒にしてこのかんざしの落しぬしをさがした。やっとそれが新町の美代吉とわかり、おびえるのを口説いて、人相をききだした。顔まではわからなかったが、背が五尺なかったという。五尺そこそこの小男は、五人のうち、松田倉蔵しかない」

「なるほど。しかし、妙やな」

と与吉は、とぼけた顔をして、

「その一件は、相手が新選組ゆえ、お奉行所でも、不問に付されているはずでは、ごわりまへぬか」

「そう。当節、与力同心と申しても、腰ぬけがそろっている」

「なんで、お役目でもない旦那様がお調べなさる義理がおありじゃ」

「おれは、内山様の儒学の弟子だ。それだけでなく、父親を早くなくしたおれは、子供のころから内山様には世話になり、真実の伯父上と思うて暮らしてきた。お婦以をもらうときには仲人になってくだされてもいる。たれが不問に付そうとも、相楽庄之助の武士がだまっているわけにはいかぬ」

「どうなさるわけで」

「仇を討つ」

「げっ」

唐物同心が、新選組を相手に仇を討つなどとは、気でもお狂いやしたのか、と与吉はおどろき、

「だ、だれを討つのや」

「松田倉蔵をだ。聞けばわしとおなじ流儀の北辰一刀流の使い手で、伊予松山の下田軍兵衛どのの弟子であったという。下田道場にはさして俊秀はいなかったときくから、たいした相手ではあるまい。京屋でしらべると、松田は、この三十日に、副長助勤の山崎烝の供をして大坂にくだるという。例によって夜は北陽新地の住吉屋で遊ぶだろう。その途中を待ちうけて斬る。――ついては、与吉」

「へい」

「事は秘密を要する。あとあと奉行所に迷惑がかからぬよう、おれは市中浮浪の者をよそおって討ちかけるゆえ、万一おれが斬られた場合は、死体の始末をたのむ」

「そんなあほうな」

「当夜はそっとおれのあとをつけて来い」

「おやめなはれ」

口を酸っぱくしてとめたが、庄之助がついに、おどしか、正気か、

「おれのいうことがきけぬなら、いったん明かした以上、やむをえぬ。口を閉じさせるために死んでもらわねばならぬ」

と刀に手をかけた。与吉は、その顔をみて、ぞっとした。いつもはおだやかな庄之助の眼が、狂人のような暗い光りをやどしていた。これが侍の眼というものなのだろう。与吉はおそろしさに、

「へい」

と従ってはみたが、あとで、

（お武家には、見当のつかぬ所がある。やはり、子供のころから剣術をしたり、小うるさいしつけをしたりするさかい、そうなるのやろか）

その日から数日、眼をつぶると庄之助のあのときの顔がうかんできて、ねむれなかったという。

※　※

この話は、大阪の時計商某家につたわっているはなしで、話というのは、これっきりでしまいである。松田倉蔵は討たれもせず、相楽庄之助は討ちもせず、その年は暮れ、やがて四年目に明治をむかえた。

世がかわってから、江戸屋十兵衛は唐物問屋から時計と宝石の輸入商に転じ、幕府の瓦壊で失職した娘むこの相楽庄之助をむかえて分家をたてさせ、高麗橋（こうらいばし）で同種の店をもたせた。与吉は本家からの付け番頭として庄之助店の番頭となり、そのまま世を終えた、という。

事件の結末は、要するに、松田倉蔵が、その当日、たしかに京屋にはとまったが、北陽新地の住吉屋には行かなかった。その翌日には、早くも大坂を発（た）って京へもどっている。路上で待ちかまえた相楽庄之助は、ついに松田の姿を見なかったのである。

なぜ、松田倉蔵が早々に大坂を離れたかという所に、この事件の唯一の秘密がある。

与吉は、庄之助から云われた口止めをまもらず、そのまま、江戸屋十兵衛とお婦以に明かして、善後策を講じたのだ。

思案のあげく、出入りの御用聞をよんで百両の大金をもたせ、こっそり京屋に松田を訪ねさせたのである。

「くれぐれもだれから、とは、云いなはるなよ」

と、与吉は御用聞に十分に釘をさしておいた。「なにもきかず、だまって大坂を発ってくれれば、この金をやる」と云わせたのである。すねに傷をもつ松田倉蔵は、さすがになにごとかを察したらしく、金をうけとると、そそくさと大坂を離れた。

そのあと、与吉はお婦以に、

「これで厄払いじゃ。したが、小嬢さん、この一件の種あかしは、口がさけても、庄之助旦那には云いなはるなよ。謀られたとおもえば、なにを仕出かすかわからん。侍ちゅうもんは、五体は人間の形をしていても、なんや知らん、臓腑が一つ足らんか、多すぎるか、べつの生きものや」

庄之助は商人になってからも、ときどき機嫌のいいときは、店の者などに、

「おれは、ご一新前に、新選組の松田倉蔵を斬ろうとしたが、むこうに逃げられた」

と自慢したりしたが、そんなときはお婦以はにこにこと微笑(わら)っているだけで相手にならなかった。

一新になってから、こどもが、三人できた。男の子二人に、末が女であった。

お婦以は、どの子にも、

「お父さんは、いまはあんなにやさしいお人だけど、お若いころは冷汗の出るようなことをなさった。北同心町の組屋敷に住んでいたころのことをおもいだすと、ぞっとする」

やはり、商家の子は商家に嫁入りするのがいちばんいい、と、お婦以は老女になってからも、おりにふれて語っていたという。侍の不可解さが、身に沁みていたのだろう。

ただいま十六歳

一

榎（えのき）のおえいとはうまれぬさきから結ばれている、とこの少年は信じていた。

少年の名は勝太（かつた）といった。大百姓の子である。この村にときどきやってくる近藤周助（こんどうしゅうすけ）という先生から剣術を習っていた。が、剣術とおえいとは、さしあたって関係はない。

（おらァ、このつらだ）

と、ときどきたらいの水をのぞきこんで、おえいを想うことがある。おえいの顔がそこに映っているのではない。十六歳の勝太の顔が映っている。醜い。

眉がさしせまり、口は梨をほうりこめるほどに大きく、両あごが張って、このあごは去年あたりからとめどもなく成長し、異常な隆起をかさねている。このまま捨てておいては、勝太自身も地上で見たことのないすさまじい顔になるに相違なかった。

（おえいが好くかどうか）

このあたりは藪が多い。村の道は藪を縫って通っている。ことしの春さき、勝太は風にさからって藪道を駈けていると、むこうから来るおえいとぱったり逢った。おえいは肩あげがとれて、すっかり娘になっていた。

「おえい」

駈けちがってから、勝太はふりむいた。おえいは、何なの、という無表情な顔をしていた。二、三カ月見なかった間に、唇が生きもののように肉づいている。

勝太をそれを見てどぎまぎしたが、しかしおれは男だと自分を叱咤した。言うことだけは言わねばならぬ、と思った。が、言うべきことが何もなかった。それに気づくと勝太は内心狼狽し、えへんと大人のように咳ばらいを一つし、

「用心しろ」

と、意外なことを言ってしまった。なにを用心するのか、勝太は一瞬考えてから、

「用心することだ」

ともう一度言った。言ってから、このおえいが娘になったことについて、村の若者どころか他村の連中まで騒いでいることを思いだし、べっと竹の根に唾を吐いて、

「みなおめえを狙ってやがる。鍛冶屋の田助爺も、おえいの尻ァあぶねい、おえいの尻ァ村でまもれ、と言いていた」

「なにをいってるの」

と、おえいは笑いだした。笑うそぶりまでちかごろはしながついてきた。その白いのどが動くのを見ていると勝太は目がくらむ思いがし、そばの盂宗の幹を大きな掌でバシバシ

たたき、

「知っているか、知るめえ、秘事がある」

といった。すぐ早口になり、秘事さ、知るめえがおらァおめえのけらいだ、といった。

「けらい？」

おえいがびっくりしたように声をあげたので勝太は満足し、うん、とはじめて子供っぽくうなずいた。

「家来さ、おめえの死んだおじいさんぐれえが知っている」

「おじいさんは四十年前に死んだのよ。あんた、そのおじいさんから聞いたわけはないでしょう？」

「聞きやしねえが、秘事だから知っている。たれにも明かさねえでおこうと思ったが、明かした以上、仕様がねえ。おめえも明かされた以上は覚悟せねばなンめえ、おらァを家来だと思え」

「……」

おえいはこわくなってきたらしい。凝っと勝太の顔をみつめていたが、急に表情が醜いほどにゆがんだ。

いつのまにか、勝太が股間をまくりあげているのである。異物が勝太の両掌のなかで雲

をえた竜のように天にむかって動いている。

「これは家来のしるしとして、見せた」

と、勝太は咽喉をかすらせていった。宣言したつもりであった。でなけりゃ余人にめったに見せるもんじゃねえ、と勝太はつぶやき、やっと裾をおろして蔵ったときには、おえいはどこにも居なかった。逃げたのである。

（そんなことがあった）

と、勝太はときどき思いだす。いまでもその行為を決して後悔していないし、おえいに対してせいいっぱいの赤誠をあらわしたつもりであった。

榎のおえいは、村はずれの小高い丘に住んでいる。その古ぼけた百姓屋敷のなかに大きな榎があるために、「榎の」と通称されていた。おえいの屋敷にはもう一つ通称があった。ションゲンサンというのである。それが将監さまを訛ったものであると勝太がきいたのは、ほんの去年であった。

勝太の村は、武州南多摩にある。雑木林が武蔵野の余影をのこしているほか、黒土のはてしもない田園地帯である。このあたりは、空がおおっているかぎりの土地と草は、すべて幕府の所領であった。

自然、武士はいない。

勝太は少年のころから武士というものにあこがれているくせに、武士の姿をほとんど見たことがなかった。

このあたりの村々は、ずいぶん離れた伊豆の韮山代官の飛地支配になっている。ときどき代官所の手附とか手代とかよばれる役人が庄屋の家までやってくる。これらは大小こそ帯びているが、収税をするための役人で、勝太の概念にある武士ではなかった。

――江戸に行きゃ、武士は腐るほどいる。

と祖父があごで東の空をしゃくって、教えてくれたことがある。東に江戸がある。わずか五里ほどの距離であった。いつかはその江戸へ出ねばならぬと思っていた。

さて将監さまである。なぜ榎のおえいの家がわずか二町歩の中百姓の家のくせに将監さまなのであるか。

「むかしは神主だったのさ」

と、去年、祖父は教えた。祖父は久左衛門と言い、号を義堂。漢詩をつくった。百姓の分際ながら眼の血走った一種壮気のある人物で、自邸の味噌小屋を改造して道場をつくり、江戸から教えにくる近藤周助なる剣客を泊めてはよく世話をした。

「神主か」

「ただの神主じゃねえ。おえいの血統は阿蘇津彦命という神様から出ている。肥後の阿

蘇大宮司家が、いわば宗家だ。阿蘇大宮司家といえばでえみょうより位が高いぞ」

「おえいの家はそれか」

「じゃねえ。ずンとさがってその阿蘇家のたれかがこの関東の下野にやってきて土豪になり、戦国時代には宮川将監と称して千貫ばかりの領地を守って、他を切り取ったり切りとられたりしていた」

「それで将監か」

「その将監宗近という人が豊公の関東御征伐のときに小田原の北条氏に味方して領地を奪われ、下野からこの武州石原の里に流れてきて、百姓になった。そのときについてきた家来が、わしどものご先祖だ」

「じゃ、武士かえ、おらン家は」

「いや、昔の話だ」

でもいい、と勝太は思った。自分には戦国武士の血が流れている、と思いたかった。このころから勝太はめだって態度がいかつくなり、撃剣にも身を入れ、毎日道場でころげまわって竹刀をふりまわすようになった。

「おらァの家は、もとは武士だ」

と村の仲間にも言いふらすようになり、すこしでもその妄想を嘲弄する者があると、引きずってきて道場で竹刀を渡し、跳ねまわりとびまわって、相手の息のとまるほどにたたきのめし、

「どうだ」

これでも武士でねえと言きゃがるか、とまでは口に出さなかったが、竹刀で存分におもい知らせた。

武士には、主人がいる。勝太にもいる。ただの百姓じゃねえ、武士の血が流れている、ということを自分に言いきかせるためには、どうしてもおえいが必要であった。

おえいとは幼いころによく遊んだが、そう言えばあらそわれぬものだ、おえいの顔、姿が、どこか雅びている、と勝太はおもった。

(やはり、ただの百姓娘じゃねえ)

一人で納戸に寝ころがっておえいのことを想像していると、なるほどそうであった。おえいの顔を特徴づけている、糸をひいたように細い眼までが、普通ならば淫蕩に感ずるところを、勝太の想像のなかでは、ああいう眼なればこそおえいが貴種なのだ、ということになった。

勝太はひそかに臣従を誓い、いつかそれをおえいに打ちあけねばならぬ、と思った。

思い暮しているうちに、果した。この春、藪道でおえいに逢ったとき、とっさに多少狼

狽して、男根まで見せてしまった。

（あれはあれでいい）

勝太はおもっている。無一物の自分が、家来としての赤心をみせるのは、それしか法がないではないか。

二

勝太に、薄ひげが生えはじめた。春以来、おえいにもしものことがあれば命も要らぬ、とおもっているのに、当のおえいは、村の道などで出会ってもものすそを翻して逃げるように小道へかくれたり、連れと夢中で話してゆくふりをして、そばを通る勝太を無視したりした。

村の道で出逢う勝太は、いつも肩をいからせ、昂然として通ってゆく。すれちがうときツトおえいを一瞥し、まるで番太郎の言うせりふのように、

「おえい、変ったことはないか」

といった。噛みつきそうな眼をしていた。

（まもってやっている）

無言でそう押しつけている。そのくせそればかりではなく、犬が鼻を鳴らすようななまなましい視線でおえいの裾のあたりを見、ひとりで赤くなったりした。

（子供のくせにいやらしい）

と思うのだが、とにかく出逢うたびにえたいの知れぬ感情をおえいの胸に残した。整理がつきかねることであった。自分が好きなのか、単に助平なのか、おえいは相手をどう考えればよいかわからない。

が、当の勝太にきいてみても、おえいにどういう種類の関心があるのか、正確には答えられなかったであろう。

勝太は毎日、味噌小屋の道場で撃剣ばかりしていた。百姓の子でも撃剣さえつづけてさえいれば、桑を食っている蚕が蛾になるようにいつかは武士になれるだろうという漠然とした期待があった。

「お前は、いい耳をもっている。途方もない身分の人間になれるかもしれない」

と、暁斎という村の鍼医が、勝太の背に養生鍼を打ちながら言ってくれたことがある。暁斎は若いころの唐瘡で目がみえなかった。目のみえない老人が、指で勝太の耳たぶをつまみながら低くつぶやいた。それだけにかえってこの予言は神秘的なひびきをもった。

これが勝太の神話である。かれはこの神話を自分自身のなかで大事に育てていた。

神話はこれだけではない。三つある。榎のおえいというのもかれの作った神話の一つだし、もう一つ重要な神話は、その巨きな口であった。その異様に発達した下顎をひらくと、口の中に拳をらくらくと出入りさせることができた。村の老人たちは、これほど大きな口を、江戸でも見たことがないとほめた。

（加藤清正もこのとおりであったそうだ）

という話もきいたことがある。清正は尾張中村の後家の子だが、武功を重ねたすえ、肥後五十余万石の国主にまでなった。

（骨相が似ておれば運命も似るという。清正ほどの男にあやかりたいものだ）

とおもった。

この年、嘉永三年である。春からずっと多摩地方の村々に顔を見せなかった江戸の近藤周助が、夏になってやっと村にやってきた。

「どこぞお加減がおわるかったので」

とその夜、勝太の祖父が酒を出してきくと、

「いや、取り込みがござってな」

おだやかに微笑した。さらに訊くと、連れ添いが死んだという。

「御新造さまが？」

祖父がおどろき、左様なことなら報らせてくだされればこの在所の門弟一同で駈けつけましたのに、と怨みがましく言うと、周助は、「いや、馴れていますので」といった。

九人目だという。それも生き別れはなく、ことごとく死に別れている。この温厚な老剣客にもし異様なところがあるとすれば、その点の来歴ぐらいのものであった。

平凡な男なのである。

天然理心流の三代目宗家で、この流儀は初代の近藤内蔵助いらい多摩方面の農村をこつこつ巡回して百姓門人をとりたててきた。

周助もまた多摩の百姓の出で、初代、二代があるきまわったこの田園を、ここ二十年ばかり、篤農家が田を耕すような篤実さで巡回している。

でなければ、食えない宗家なのである。かたちだけは江戸の小石川柳町に道場はあるがこういう無名の流儀を歴とした武家の子弟が習いにくるはずがなく、柳町界隈では、

「芋道場」

などとかげ口をたたかれていた。百姓ばかりを教えている、という意味だろう。

「妙なものです」

と、周助は、唇の酒しずくを拭った。

「九人も妻を娶ってひとりの子も成さなかった。それがしには子だねがないのかもしれま

せぬ。お冴、おうの、お駒、千代、増乃、おまつ、よしの、お里、おみつ……いずれもいまこうして思いだせば」

周助は沈黙した。眼をつぶっている。共に世をすごしてきた九人の妻を瞼の裏に呼び入れているのかもしれない。

やがて、

「左様」と黄色い歯をみせた。「どれも子を産めぬようなからだではござらなんだ」

「まだご落胆なさるようなお齢ではござりますまい。当村にも足腰の丈夫な娘がおりますから、お世話いたしましょう」

「十人目でござるか」

周助はため息をつき、「いやいやもう齢でござる、これからまた夜ごと夜ごと耕さねばならぬかと思うと大儀でござるわ。もはや養子に致します。道統を継がせるのは、実子よりも目筋に叶うた養子がよい。あちこち物色しております」

「よいご養子が見つかりましたか」

「ごぞんじの府中の門人井上源三郎、あれの弟で林太郎というのがそれがしの世話で白河浪人沖田勝次郎殿の娘お光に婿入りして沖田の家名を継いでおります。この沖田家に、死んだ勝次郎殿の遺児がいる。お光の実弟にあたります。それを柳町の道場の内弟子にしてくれ、というので、いまあずかっておりますが、利発な子でしてな」

「ほほう」

「名は宗次郎（のちの総司）といいます。しかしまだ七つで、わしの齢からいえば養子として幼すぎる」

「日野の佐藤彦五郎どのの家にも男の子がおりましたな、なかなか剣の手筋のいい子だそうだ」

といったのは、勝太の父の久次郎である。

佐藤彦五郎というのはこの近在きっての豪家で日野の名主をつとめ、屋敷に立派な道場ももち、周助の先代三助のころから天然理心流の多摩地方における金主となり、当主の彦五郎自身、旦那芸ながらも周助から目録をもらっている。

「ああ、歳三でござろう」

と、周助はいった。

「あれは彦五郎殿の弟ではなく、彦五郎殿のお内儀お信どのの弟でありましてな。お信どのはこのさきの石田村の」

「存じております、石田の土方隼人どのから嫁いだのでございましたな」

「左様、よくご存じで。あの歳三という子はそのお信どのの末弟でござる。これが妙な子

で、お信どのが輿入れするとそれにくっつくようにして佐藤家にやってきて入りびたっている。佐藤家では、お信は歳三付きで貰ったようなものじゃ、と笑っております。歳三にすれば生家は百姓家だが佐藤家は武家同然の家、それに道場もある、ついおもしろくて入りびたっているのでありましょうな」

「幾つです」

「御当家の勝太どのより一つ下でしたかな、剣の手筋はいい、それに石田在の自分の生家に矢竹などを植えて、ゆくゆくは武士になるのだ、と言っているらしい」

「なるほどご養子には打ってつけではございますな」

「いや」

周助は首をひねっている。口に出してはいわないが、その歳三という子を周助はあまり好きではないらしい。歳三は色白で眼の大きくこれが百姓の子かと思うほどに秀麗な容貌をもっている。しかし子供のくせに妙に倨傲(きょごう)でぎょろりとした眼がひどく冷たい。要するに可愛気がなかった。

「なにしろ道統を継いで三百人の門弟を取り立ててゆくというのは容易なことではない。手筋だけがよければ、というわけに参りませぬでな」

言いおわったあと、周助はひどく意味ありげな沈黙をした。義堂老人と久次郎を交互に

見ながら微笑をしている。やがて、

「ご当家の勝太どのがほしい」

といった。

父の久次郎は意外な顔をした。久次郎も剣術がすきでこの年になっても味噌小屋の道場で竹刀をふりまわしているが、三男の勝太がうまいと思ったことがない。

「あれは不器用者で」

と苦笑した。周助がからかっているのだろうとおもったのである。

「左様」

周助は力なくうなずいた。この剣客その点でうってつけの後継者であるとは思えない様子である。

「しかし」と周助は自分に言いきかせるように、「あの年頃で小器用なのは、かえって伸びませんな。導きようによってはあの不器用さが、将来大器になるもとかもしれませぬ。勝太どのにはそのもとだねもある」

「もとだね？」

「左様、当流で申す気組(きぐみ)でござるな。気組で敵を一瞬気死せしめておいてぱっと撃つ。気組と申すのは天性のものでござる。あの子にはそれがある」

話は早いほうがいい、というので周助はとりあえず、この上石原滞在中に勝太を仮り養子にし、近藤姓を名乗らせた。

ついでに勝太はまだ前髪をのこしていたので、武家らしく元服させるということで髪を結いかえ、前髪をおとして月代を作った。もっとも前髪の全部をおとしていきなり憎々しげに大人に仕立てるのではなく、指二本入る程度だけ細く月代をつくり、あとの髪は一、二年残しておく。これを細元服といった。この当時の風習である。

ただ衣服だけは大人のものを用いる。勝太は、黒木綿の紋服を着た。紋は近藤家の二引両であった。

名も通称を勇とあらため、昌宜と名乗った。近藤勇昌宜というわけである。

いっさい、武士ごしらえになった。といって武士になったわけではない。師匠の近藤周助も厳密には武士ではなかった。奉行所に出れば単に「周助」である。

幕法では、百姓町人がみだりに姓を名乗ることを禁じているし、まして武士の風体をし両刀を帯びることは、普通ゆるされない。しかし剣術の道場主は、医師、絵師などと同様、渡世の上で姓を私称することを黙認され、装束も武士風につくることも大目に見られている。

勇は、そういう渡世上での、

——武士に似たもの。

になった。

そういう服装で、村々のおもだつ家を周助に連れられてあいさつにまわった。腰に大小の重味を感じながら周助のうしろに立ってあいさつをしたり受けたりしていると、自分が別人になったように思われた。

（この姿を榎のおえいにもみせてやりたい）

とおもった。が、榎のおえいの家は天然理心流の保護者の家でもなんでもなかったから養父の周助はあいさつにまわらなかった。

勇は、隣家でお産手伝いをしているお梅という女を裏の垣根にまねきよせ、文を手渡し、

「榎のおえいまでとどけてくれ」

といった。お梅は四十を越した出戻りで、村中の取り込みの家から頼まれては賃かせぎの手伝いにまわっていた。結び文をみると、いきなり、勝太これけえ、と指を出し卑穢な手つきをした。歯茎で笑っている。

「それじゃねえ」

「ああいいとも、そのかわりおめえ、おえいとどんなことがあっても、おらァの恩は忘れるんじゃねえぞ」とお梅はおどけて、からりとした口調でいった。わすれやしねえ、と勇

は武士らしい体面をつくってわざと無表情に答えた。このお梅と、去年の夏、芋畑の葉の下で寝たことがある。ひと夏に四遍さそいだして五度目に誘うと、

——癖になる。

と、お梅は坊主のようなことをいってことわった。

榎のおえいは、暁斎という医者の家へお裁縫(はり)をならいにゆく。その途中、藤左衛門(とうざえもん)の家の軒から走り出たお梅につかまり文をにぎらされた。

暁斎の家についてから、厠のなかでそっとひらくと、

あすの八ツ半、硯井戸(すずり)で待っている。見せるものがある。勝太

とある。おえいは正直なところ、背筋が寒くなった。見せるものと、いう。股間のそれかと思い、途方に暮れた。が、勝太のあの気狂いじみた目の光りをおもいだすと、

(行かないと、何をするかわからない)

とも思ったりした。

翌日、昼すぎまで思案していたが、結局わら草履をはき、屋敷の裏木戸から出た。すぐ藪になっている。

藪道を歩くと、

(雨かしら)

と仰ぐぐらいに藪が騒いでいる。おえいは、走った。勝太のいう硯井戸の藪までは、そのまま藪づたいに行ける。やがて、井戸がある。

井戸わきに、勝太らしい者がうずくまっていた。おえいは息を切らせてそこまで駈け、

「何よ」

といおうとして、あっと声をのんだ。勝太が立ちあがったのである。なんと、黒紋服にぶっさき羽織、高マチ袴をはいて武士まがいの装束をしていた。

「おらァ、このとおりになった」

「……」

「名前も勝太じゃねえ。おえい、おれはあす江戸へゆく。このさきは小石川柳町の道場に住む。それだけを言いにきた」

「見せないの？」

例のものを、である。おえいはおびえた声で、いった。見せればすぐ逃げ出そうと思っていた。

「このとおり、もう見せている」

装束のつもりである。

「ああ、その姿を」

私に見せにきたのね、とおえいはあわててうなずき、ほっとした。
「おえいにだけは見せて江戸に発ちたかった。おれにとっては主筋の家の娘だからな」
「うそよ」
おえいはびしゃっと言い、そのこと父にきいた、父はそんなこたねえ、それどころか勝太の家は年寄百姓で、家はむこうのほうが上だ、といっていた、——とおえいは言い添えた。
「おめえの父は無学だからな」
勝太、いや勇は、いった。おえいがどう否定しようと、この少年は自分の神話のほうを信じた。
「おえい、二度とそのことは言うな。おれの家は、もと武士だった。そのまぎれもねえ証拠に、お前の家というものがある。宮川将監さまの子孫というお前の家というものが、だ」
そいつをかんじんのおえいに疑われてはこの少年としてはたまるまい。
凄んだ眼をしてにらみすえた。
おえいは気圧されて二つ三つあわててうなずいた。
「わかったな、おれはけらいだぜ」

「うん——」
おえいはうしろ手で竹をかかえ、諦めたように、何度もこっくりした。
「だいじなことを忘れていた。きいているだろうが、おれはこんど近藤周助先生の御養子になった。名も、勝太じゃねえ」
「なんというの」
おえいは、別に興味はなかったが、はなしのついで、といった気持で訊いた。
「近藤勇というんだ」
少年はまだその名が言いづらそうだった。
そのとき、竹の梢をぱらぱらと大粒の雨が走ったかと思うと、ざあっと風が藪を薙ぎ渡った。
「おえい」
と、そばの小屋をあごでしゃくり、「そこで雨宿りしてろ」といいながら自分の大小を鞘ぐるみぬきとっておえいに渡し、羽織をぬぎ、着物をぬぎ、襦袢までぬぎ、脱ぐたびにおえいに渡し、とうとう下帯一つになった。
「どうするの」
「どうもしやしねえ。大事な装束が雨にぬれるとこまるからよ」

やがて竹の落葉を舞いあげるほどの大雨が降ってきて、おえいの髪をたたいた。おえいは竹を縫って走り、小屋へとびこんだ。ふりかえると、すでに藪は乳色の煙雨のなかにある。

勇の姿が見えなかった。

おえいは、乾いた地面をさがし、勇があずけた大小や着物を膝の上に掻いこんでしゃがんだ。やがてそこにも雨が吹きこんできたために奥へ移った。

四半刻(しはんとき)ほど待った。勇は来なかった。どうせ妙な児なのだ、と思い、おえいは気にすまいと自分に言いきかせてじっとうずくまっていたが、やがてたまりかねて切り窓から外を見た。

藪が影のようにはげしく揺れている。そのなかをゆっくりと動きまわっている人影があり、まぎれもなく勇だった。ときどき風が煙雨を切りさいたりする瞬間、その灰色の影がおどろくほどあざやかな肌色にもどったりした。

(なにをしているのだろう)

知りたかったが、同時に諦めもした。男もあの年頃になると、えたいの知れぬ生きものになるのかもしれなかった。

やがて小降りになり、ほどなく歇(や)んだ。

「歇んだ」

と、少年が入ってきた。広い肩幅と引きしまった腰をもっていた。下帯のふくらみから雨しずくが垂れている。勇はおえいの前でゆっくりとそれをはずした。

おえいは、顔をそむけた。

勇は、下帯をたんねんに絞り、それで体中をぬぐい、やがてもう一度絞り、股倉にかけはじめた。

「濡れたもの、毒よ」

と、おえいは小さな声でいった。

「仕様がねえよ」

勇は、不愛想にいった。

「なぜ、雨のなかにいたの」

「裸なら、いくら濡れたってかまわねえからさ」

「小屋の中に入ればよかったのに」

「おれはな」

と、この眼の鋭い少年は、はじめてわらった。ひどく子供っぽい顔になった。

「好きなのさ」

「なにが」
「ああいう、ざあっと来るやつがよ。子供のころ、真夏に村雨が地面をたたきはじめるともう矢もたてもたまらなくなって、鯉が滝口で跳ねるように跳ねまわったものよ」
「もう大人なのに」
と、おえいは視線をまわして勇を見ようとして、あわてて眼をそらした。
「それを蔵って」
「いいんだ、おめえさえよければ、見てもいいんだ」
勇は大真面目に言い、おえいが見やすいように彼女の前にあぐらをかいた。
「見たいだろう」
勇は、無邪気な顔で微笑した。女も男のそういうものを見たがる、とこの少年は信じこんでいるようであったし、それを見せてやることも忠義のひとつだと思いこんでいるようでもあった。
「へんなかたちをしている」
と、おえいは、おずおずとそれへ視線をむけてからはっと眼をそらし、ひどくあわててすそを直した。
「どうした」

「あたしのはいやだ」
交換にみせろといわれるのをこわがったのだろう。言われて、勇は不機嫌な顔をした。
「たれも見せろとは言わねえ。話はちがうがおれは女と男とが一緒になるってことはどんなことか知っているんだぜ。まあこうみえても、世間はおめえより上だ。そうなっちゃ可哀そうだと思って、雨に打たれて体を冷やしていたんだ。そういうけじめが、つくかつかねえかというところが、侍と百姓のちがいだ」
勇は、下帯を締めおわると、おえいから襦袢をひったくって袖に手を通した。
「怒ったの」
「いや、おめえには武士ってものがわからねえらしい」
「そりぁ、百姓の子だもの」
「主筋とはいえ、あれだな、将監さまの血すじも、薄くなったもんだ」
お梅ばばあのほうが立派だ、と思った。——癖になる、といって、おれを突きのけやがったが、そのあと日が経ってから、勝太よく我慢している、さすがは侍修業の出来た子だ、といってくれた。
なるほど侍の子とは我慢のできる子ということだ、その我慢ぶりをこのおえいは汲みやがらねえで妙に用心ぶかく裾なんぞを掻い合わせやがる。……

勇は、小屋を出た。

陽がかっと照っていた。その日射しのなかから、勇は小屋にいるおえいのほうをふりむき、何か言おうとした。

「なあに」

ときいてやると、「晴れた」といった。えたいの知れぬところがあるかと思えば、日が照ったというだけで、溶けるように笑っている。

「おえい。置きみやげに、一輪指しをつくってやろうか」

と、少年は藪の中に踏みこみ、あちこちよさそうな竹を物色していたが、やがて一本の竹の前で左膝をついた。

コトリと右肩を落した。

やがて噴きあげるような気合とともに、少年の手もとで白刃が跳ね、キラキラと二三閃したかと思うと、太刀をおさめた。

ざあっと孟宗竹の梢が天を掃きはじめ、その根もとの幹が、三つにくだけた。

ころりと地上に落ちたのは、ちょうど一尺ばかりの底節（ふし）の一輪指し様のものだった。

勇は、その一輪指しをおえいの掌の上にのせ、立ち去ろうとした。

おえいは、夢中で勇の袖をとらえ、

「あんた」

と、いった。いつ江戸の修業がおわる、もしあんたさえその気なら、あたしは待っていてもいい、といった。

「嫁か」

勇は、意外な表情をし、すぐあわてて、

「おえい、だめだ。そいつは、別のやつに言え。おらァ江戸に出た以上、死にものぐるいに修業して日本一の剣客になってみせる。いまはそれどころじゃねえ」

「馬鹿っ」

おえいは一歩さがって、唾をはいた。口の奥を噛みきったのか、唾が真赤だった。

おえいは気がつくと、藪の道を風のように駈けおりている自分を知った。

（なぜあんなやつに馬鹿なことをいったのだろう）

村道へ出、善兵衛（ぜんべえ）の垣を通りぬけたとき、なにかの使いできたらしくお梅がおえいの屋敷の石段をおりてくるのを見た。

お梅は、半かけ草履をぴちゃぴちゃ鳴らしておえいのそばに寄ってきて、

「雨に遭ったろう」

と、おえいの着物を見た。濡れていないことに気づいて、きなくさそうに笑った。

「硯井戸のむこうの小屋にいたね」
「……」
「そうこわい眼をするもんじゃないよ。若いときにゃ、いろんなことがあるものさ」
「お梅、ちがう」
おえいは、お梅の筒袖をとらえた。
「心配しなくてもたれにも言わないよ。ただ、あの子はもう村には帰って来ないよ。年寄りがよく言うだろう、昔から風変りな顔つきのやつが村に残ったためしがないって。あれさ、あの子も、ああ口が大きくては残れまいよ、なにしろ、こう」
とお梅は口をあけ、前歯に自分の拳をあてがいながら、
「これが出し入れ自在なんだからね」
そういって、わきにかかえたかごからすももを一つとりだし、
「食べな」
とおえいにくれた。

おえいはその後ほどなく上布田村の百姓家へ嫁ぎ、子を何人も生んだ。
三十を過ぎてから、京を戦慄させている新選組の隊長というのが自分の生家の村の出だときいた。
「それはたれです」
と、風聞を持ってきた薬屋にきくと、近藤勇というひとだ、という。
それから数年して上方の鳥羽伏見で戦争があって将軍方が敗れ、敗兵が江戸へ戻った。
それを追って官軍が江戸へ攻めてくる、という風説がしきりに飛び、おえいの住むこの甲州海道沿いの村々では毎日そのうわさで持ちきりだったころ、ちょうど節句の前日に大雪が降った。
「江戸から戦さごしらえの人数が押し出してくる」
というので、村では家財具をまとめて逃げ出す者があったりして大騒ぎした。その午後二門の大砲をひいた五六百人の一隊が、雪を衝いてあらわれ、おえいの家の前を通って行った。
おえいは雨戸をおろして息をひそめていたが、あとで、
——大将は新選組の近藤様だそうな。
といううわさをきき、
(あっ)
と思い、乳呑み子をかかえて雪の中を布田小島まで走ったが、雪に足をとられてついに

諦めた。

「甲州で戦さをしに行くらしい」

ということもあとできいた。

近藤は隊の中軍をすすみ、金銀の金具を打った長棒引戸の大名駕籠に乗っていた、ということも、人のうわさで知った。

（もう御公儀が崩れて天朝さまの世になったというのに、あの人は何をしにゆくのだろう）

とおえいは不審でならなかった。

考えてみると、ふしぎな児だったようにおもう。おなじ百姓の娘をつかまえて主筋だのけらいだの合点のゆかぬことばかり言い、それも目の色を変えて言いつのっていたが、京では将軍家の押しかけ家来になり、こんどは幕府が瓦解してから、甲州城攻めに出かけるという。

（お梅のいったように、口が大きすぎるせいかしら）

近藤が死んだ明治後も、おえいはときどきそんなことを考えた。

解　説——短編の醍醐味

三好徹（作家）

およそ三十年くらい前のことになるが、B社主催の講演旅行で司馬さんとごいっしょしたことがある。三人一組で月曜日から木曜日まで、さほど時間のかからない移動をして、たいていは夜六時から、市民ホールとか会館講堂とかで各人が一時間足らずの講演をする旅であった。

朧げな記憶では、福井県の鯖江にはじまって舞鶴、綾部と回り、最後が京都だった。もう一人の講師はS氏で、年齢は上だが、直木賞を受けたのは、司馬さんより少し後の作家だった。わたしは、一九三一年生まれだから、一九二三年生まれの司馬さんより八年若い。司馬さんの直木賞作「梟の城」は昭和三十四年下期で、わたしの「聖少女」は昭和四十二年下期だから、これも八年の開きがある。われわれの世界、俗にいう文壇内で八年の差というのは、一世代の開きがあるから、実はかなりの差なのである。だが、いっしょに旅している間、Sさんにはその距離を感じても、司馬さんとは、世代の違いのようなも

のは感じなかった。司馬さんがサンケイで十年余の記者生活をした経験があり、わたしも読売で十数年の記者生活をしたことで、新聞社内の先輩後輩のような親近感を（わたしの一方的な思いこみかもしれないが）抱いていた。司馬さんの人柄のせいもあったろう。何かにつけて格式ばったことを口にするSさんを敬遠して、司馬さんと話をすることが多かった。

噂どおり、司馬さんが座談の名手だったこともあるが、記者経験のほかに親近感を覚える個人的な理由があった。直木賞を受けた数日後に、それまでお目にかかったことのなかった司馬さんから祝いの葉書を頂いた。そのなかで、印象に残った文章があった。この仕事を長く続けるこつは、昨日のことは忘れ、明日のことは思い煩わないことです、と書いてあったのだ。

解釈は自由だが、わたしは、いま机に対して書いている原稿の一枚一枚一言一句に全力をつくしなさい、という意味だと思った。直木賞を受けると新聞社や出版社から原稿の注文がくる。人によっては、一月に一千枚書いたとか、眠くなるのを防ぐために立って書いたとかいう話もある。わたしは、そういう忙しさはなかったが、それでも新聞連載、週刊誌、月刊誌の仕事が重なって、一月に五、六百枚を書いたこともないではなかった。むろん、長い期間ではない。しかし、一日に二十枚も書き続けると、ともすれば雑になりがち

である。そのとき、心に浮かんでくるのは、右のアドバイスだった。

作家が仕事をする上でのこの心構えは、司馬さん自身が自分にいい聞かせていたものであったろう。

司馬さんの人間的なあたたかみについては、多くの人によって語られている。わたしは、それほど親密に接していたわけではなかったが、このアドバイスのことは忘れ難い。

もう一つ、いまでもよく覚えていることがある。講演旅行の一コマだが、司馬さんは、人間はある地方の風土や食事の影響で、その地方ならではの顔になってくるものだ、といい、近ごろは何となく見当がつくようになってきた、といった。豪雪地帯の新潟に生まれ育った人と、雪はめったに降らない鹿児島で生まれ育った人とは、どこか違った風貌になるかもしれないが、それが見わけられるものだろうか。

で、わたしは司馬さんに、

「わたしは東京生まれの東京育ちだけれど、両親は先祖代々、ある県の生まれです。どこだか、見当がつきますか」

といった。いかに司馬さんでも、わかるまい、と心中では思っていた。すると、

「そうやな。一つだけ、何かヒントをくれんか」

と司馬さんはいった。

「ヒントねェ。それでは……関ヶ原から西」
とわたしはいった。
ほとんどそくざに、
「ああ、長州やね」
と確信にみちた声。
事実、わたしの父は山口市の生まれ、母はいまは防府市になっている村の生まれの見合い結婚である。二人とも何代か前まで逆のぼっても長州人であることは間違いない。
「驚いたな。よくわかりましたね」
「何ていうのかな、三好さんの顔は典型的な長州づらなんだね」
高杉晋作だの桂小五郎だのでわかることだが、やや面長で、どちらかといえば撫で肩の男が長州人の特徴なのだそうである。
司馬さんの著作は、源平時代から明治まで、あるいは中国古代史にまで及んでいるが、何といっても、幕末に生きた坂本竜馬、土方歳三、大村益次郎、徳川慶喜、西郷南洲、大久保利通らを描いた諸作の印象が強い。わたしは、創作の秘訣を聞いたことはないが、これらの作品を執筆したとき、多くの参考史料を読破したことは容易に想像できる。そして単に読んでメモをとるのではなく、伝記などには、主人公や関係の深かった人物の写真

が載っているが、司馬さんは、その人たちの写真を何時間も、もしかすると何日間も、飽きずに眺めて過したのではあるまいか。
司馬さんは関ヶ原の古戦場に立つと、東西両軍の武者たちの発する雄叫びや銃声や蹄の音が聞こえてくるそうだ、と聞いたことがある。勝手な推測になるが、坂本竜馬や土方歳三の写真を眺めつつ、司馬さんは、かれらといろいろなことを語り合っていたような気がするのである。
そういうことの蓄積が、実は作品中の何げない一行に、ふっと出てくるものなのである。本書に収録した作品は、雑誌に発表されたままで、これまで単行本に入っていなかったもので、もっとも初期のものは昭和三十四年の「豪傑と小壺」である。直木賞は下半期だから、受賞前の作品ということになり、他の諸作は受賞後に発表された。そのころは「倶楽部雑誌」と一くくりにされる月刊誌があって、司馬さんは直木賞を受賞してからも書いている。そして、わたしにあたえてくれたアドバイスのままに、発表の舞台がどこであれ、一行もゆるがせにせずに仕上げているのだ。
たとえば「権平五千石」の主人公は、有名な、「賤ヶ岳の七本槍」の一人だが、加藤清正や福島正則ほどに有名ではない。そして、他の六名が秀吉によって大名に取り立てられたのに、五千石の旗本のままに据え置かれた。徳川の天下になっても同じことで、両加

藤や福島は大大名になったが、権平は五千石のまま。しかし、彼らが幕府によって取りつぶされたのに、幕末まで家系は続き、最後には一万一石の、小ではあっても大名になれた子孫の話で、この好短編は締めくくられている。

この解説のために調べてみると、大和・田原本の平野藩の誕生は慶応四年（明治元年）で、同時にほかにも一万石の外様大名ができている。そして平野の場合、明治十七年に当主の平野長裕が男爵位を授けられ、明治三十年には、貴族院議員に選ばれているのだ。「権平五千石」に限らず、他の諸作に相通ずる底流は、武家社会において、というよりも人間社会において成功とか失敗とかに一喜一憂することの滑稽さである。その上に、女性というものの、時代を超えた偉大さが淡い色調でたくみに描かれている。

権平の妻のおあい、みょうが斎のお歌（うた）、狐斬りの小里（こざと）、庄兵衛稲荷のお婦以（ふい）、侍はこわいのやきもちやきのお婦以、若かりし近藤勇（こんどういさみ）が岡惚れしたおえいらは、作品の上では決して主役ではないのだが、読み終えてからしばらく経ってみると、不思議なことに主役に劣らぬ存在感がじわりと生じてくる。

前に一部の評論家が、司馬遼太郎は、志をもった男を描写するのは巧みでも、女を描くのは不得手のようだ、などと評していた。その評言がまったくの見当違いであることは、本書の諸作を読めば明白である。

また、司馬作品の長編はどれをとっても壮大な史劇といっていいし、読者数も多いのだが、わたしの考えでは、それは作家の一面であって、全面ではない。

後期には書かれなくなったが、初期から中期にかけて執筆された短編や百枚程度の中編は、小説の醍醐味を感じさせてくれる。

（これは本当にあった話かな）

と思わせられることもあるが、創作であろうとなかろうと、それが作家のウデなのである。

一般に「解説」なるものは、個々の作品について、読者の便となるように書くものらしいが、その意味でいうと、この文章は解説にはなっていないかもしれない。

それでも構わないと思っている、と書くと居直っている感じになるが、あれこれ解説するよりも、読んでいただけば小説のおもしろさを味わってもらえるというのがわたしの真意である。

なお、本書において作品の配列順は、発表時ではなく、作中の時代の流れに応じている。

光文社文庫

文庫オリジナル／時代小説短編集
侍はこわい
著者　司馬遼太郎

2005年1月20日　初版1刷発行

発行者　篠原睦子
印刷　萩原印刷
製本　ナショナル製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話（03）5395-8149　編集部
8114　販売部
8125　業務部
振替　00160-3-115347

© Ryōtarō Shiba 2005
落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-73809-5　Printed in Japan

㊐本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

●初出誌●

「権平五千石」「週刊新潮」昭和40年1月11日増大号
「豪傑と小壺」「読切倶楽部」昭和34年3月号
「狐斬り」「週刊サンケイ」昭和37年2月1日新春特別増大号
「忍者四貫目の死」「週刊新潮」昭和36年5月8日増大号
「みょうが斎の武術」「講談倶楽部」昭和35年4月号
「庄兵衛稲荷」「面白倶楽部」昭和35年4月特別号
「侍はこわい」「主婦の友」昭和36年6月号
「ただいま十六歳」「文藝朝日」昭和39年11月号

作品中に、今日の観点から見れば考慮すべき表現が含まれていますが、著者がすでに故人であることと、描かれた作品の時代背景とをあわせて判断し、発表時のままとしました。
編集部

お願い　光文社文庫をお読みになって、いかがでございましたか。「読後の感想」を編集部あてに、ぜひお送りください。

このほか光文社文庫では、どんな本をお読みになりましたか。これから、どういう本をご希望ですか。

どの本も、誤植がないようつとめていますが、もしお気づきの点がございましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえいただければ幸いです。

光文社文庫編集部

下忍狩り　佐伯泰英
五家狩り　佐伯泰英
八州狩り　佐伯泰英
代官狩り　佐伯泰英
鉄砲狩り　佐伯泰英
流離　佐伯泰英
足抜　佐伯泰英
見番　佐伯泰英
清掻　佐伯泰英
木枯し紋次郎（全十五巻）　笹沢左保
けもの谷　澤田ふじ子
夕鶴恋歌　澤田ふじ子
花篝　澤田ふじ子
闇の絵巻（上・下）　澤田ふじ子
修羅の器　澤田ふじ子
森蘭丸　澤田ふじ子
大盗の夜　澤田ふじ子

鬼の武蔵　志津三郎
地獄十兵衛　志津三郎
城をとる話　司馬遼太郎
戦国旋風記　柴田錬三郎
若さま侍捕物手帖（新装版）　城昌幸
白狐の呪い　庄司圭太
まぼろし鏡　庄司圭太
迷子石　庄司圭太
夫婦刺客　白石一郎
天上の露　白石一郎
孤島物語　白石一郎
伝七捕物帳（新装版）　陣出達朗
安倍晴明・怪　谷恒生
ときめき砂絵　都筑道夫
いなずま砂絵　都筑道夫
おもしろ砂絵　都筑道夫
まぼろし砂絵　都筑道夫

「司馬遼太郎記念館」への招待

司馬遼太郎記念館は自宅と隣接地に建てられた安藤忠雄氏設計の建物で構成されている。広さは、約2300平方メートル。2001年11月に開館した。

数々の作品が生まれた自宅の書斎、四季の変化を見せる雑木林風の自宅の庭、高さ11メートル、地下1階から地上2階までの三層吹き抜けの壁面に、資料本や自著本など2万余冊が収納されている大書架、……などから一人の作家の精神を感じ取っていただく構成になっている。展示中心の見る記念館というより、感じる記念館ということを意図した。この空間で、わずかでもいい、ゆとりの時間をもっていただき、来館者ご自身が思い思いにしばし考える時間をもっていただきたい、という願いを込めている。　（館長　上村洋行）

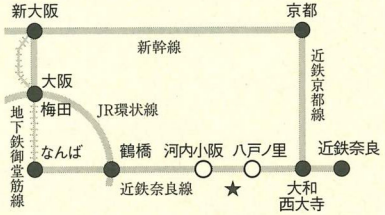
利用案内

所 在 地　大阪府東大阪市下小阪3丁目11番18号　〒577-0803
T E L　06-6726-3860 , 06-6726-3859（友の会）
H P　http://www.shibazaidan.or.jp
開館時間　10:00～17:00（入館受付は16:30まで）
休 館 日　毎週月曜日（祝日・振替休日の場合は翌日が休館）
特別資料整理期間（9/1～10）、年末・年始（12/28～1/4）
※その他臨時に休館することがあります。

入館料

	一　般	団　体
大人	500円	400円
高・中学生	300円	240円
小学生	200円	160円

※団体は20名以上
※障害者手帳を持参の方は無料



アクセス　近鉄奈良線「河内小阪駅」下車、徒歩12分。「八戸ノ里駅」下車、徒歩8分。
Ⓟ5台　大型バスは近くに無料一時駐車場あり。但し事前にご連絡ください。

記念館友の会　ご案内

友の会は司馬作品を愛し、記念館を支えてくださる会員の皆さんとのコミュニケーションの場です。会員になると、会誌「遼」（年4回発行）をお届けします。また、講演会、交流会、ツアーなど、館の行事に会員価格で参加できるなどの特典があります。

年会費　一般会員3000円　サポート会員1万円　企業サポート会員5万円
お申し込み、お問い合わせは友の会事務局まで
TEL 06-6726-3859　FAX 06-6726-3856